Z 221-851

增補改版

受驗叢書

東洋史 全

文學士箭内亙
文學士小川銀次郎 合著
文學士藤岡繼平

東京 杉本翰香館藏版

241
851

特20
184

増補改版

受驗叢書

東洋史 全

文學士箭内互
文學士小川銀次郎
文學士藤岡繼平 合著

東京 杉本翰香館藏版

明治
38 6 21
内交

再版に際して

一、予輩曩に諸官立學校入學試驗應募者のためにこの小冊子を編したるに、受驗者諸子の意に適したるものと見え、忽ちにして其の初版を盡せり。爾來書肆の再版を望むこと急なりしも、初版の誤植を正し、且項目の三四改むべきものありしが上に、用務多端にして、これを能くせざりしかば、徒再今日に至り、始めて再版に附することを得たり。

一、この書は他の二書に比して、稍詳なるに似たれども、予輩は一般受驗者が、特に東洋史を難しとするの傾向あるを知るが故に、成るべく多くの問題を列擧し、一々之に解答を附したらんには、之を通讀するもの容易に東洋史の一班に曉達せんと思ひたればなり。されど高等師範學校以外の諸學校受驗者は今回新に施したる傍點に注意し、それと連絡あるもののみを簡單に記憶せば足れり。

一、一般受驗者は年號及地名の脚註を悉く暗記するの要なきは勿論なれども、卷末に附したる年表に特に大書したるものは成るべく記憶せんことを力むべし。その他は何代の初、中、又は末頃に起りしものと知るか、若くは我紀元又は西洋紀元の何世紀の初、中、又は末頃と暗記せば十分なりとす。今初學者のために、世紀の呼び方をいはんに、例へば、六國の合從は我紀元三百二十八年、西洋紀元前三百卅三年とあらば、我紀元四世紀の初頃、西洋紀元前四世紀の末頃（紀元前に在ては數の多きは後なればなり）といひ、泜水の戰は我紀元千四十三年、西洋紀元三百八十三年とあらば、我紀元十一世紀の初頃、西洋紀元四世紀の末頃と呼ぶべし。

一、諸子の記憶を助けんがためには、通讀の際、左の順序により て別紙に書き抜くをよしとす。

第一、重要なる年號を二三十列記して、その下に事實を一二行づゝ書き留むべし然らば全體の事實の前後を誤る虞はなからん。

凡例

一、本書は師範學校及中學校卒業生の諸官立學校入學試驗準備に便し、かねて師範生中學生若くは一般初學者の參考用として編纂したるものなり

一、本書の目的已に受驗用たり故に極めて重要なる事實のみを摘出して之に解答し力めて要領を得て記憶に便ならんことを期せり

一、本書は教科書の如くに事實の連絡に重きを措かざれども而も編年紀事本末の兩體を折衷して可成的前後相關連せしめ讀者をして特に教科書若くは一般歷史書を參考することなく獨立して略ぼ東洋史の一班を知了することを得しむ

一、かく多少全體の連絡に注意したるを以て時に或は重要なる地名人名若しくは事實にして本文中に解釋し難きものあり乃ち各部の終りに「注意すべき事項」を置きて這般の事項を說明し本文と相俟て智識の明確を成

さしむ

一、本書は已に問答體なり而して各問各答必しも相獨立せず時に重複することあるを免れず蓋しこれ各項に就きて明晰なる記憶を得しむるに於て甚だ利便ありと信じたればなり

一、書中年號は皇暦を用ゐたり而も西洋方面に關係すること大なるものは西暦をも併せ附したり

一、巻末には附錄として歴代興亡表歴代帝都表歴代世系東洋史略年表を加ふ而して年表中各年代事變の下には本書に於ける當該頁數を附記し以て索引に代へ、年表によりては一目の下東洋史の全豹を窺ふに便ならしめ、附記の頁數によりて書中の事項を知悉することを得しむ

明治卅五年四月

編者識

第二、重要なる戰爭の名を年代順に列擧し、その關係者と勝敗とを附記すべし。蓋し戰爭は概ね時勢を一變するほどの力あるものなればなり。

第三、有名なる人物の名を年代順に列擧し、その人の有名となりたる所以を簡單に附記し置くべし、歴史は偉人の傳記の連續といふも不可なきほどなればなり。

第四、最後に歴史的名辭、例へば、共和、五覇、均輸、單于、黨錮、西域、クリルタイ、倭寇、靖難等を年代順にて書き留め置くべし。

一たび通讀したる後、更に以上の順序に從つて己れが書き拔きたるものを見れば、智識を精確にするは疑なく、從て如何なる問題の出づるありとも、決して度を失ふことなかるべきなり。

明治卅六年四月

編者識

東洋史目次

第一　周以前の支那……一

堯舜以前――堯舜の事蹟――禹の功業　世襲君主制――夏の世――殷の興亡――注意すべき事項

第二　周……六

周の勃興――成康の治――周公旦の事蹟――召公奭の事蹟――周室の東遷――春秋の世――覇者興起の由來――齊桓の覇業――晉文の覇業――楚莊の覇業――越の勾踐の覇業――秦穆の覇業――陪臣簒立の由來――戰國時代と戰國の七雄――秦の興隆の由來――商鞅の事蹟――六國同盟（合從）――合從の破れし所以　連衡――六國滅亡の原因――周室及六國の滅亡――周末諸學の興起せし所以――儒家　孔子、孟子、荀子――道家　老子、列子、莊子、――其他の諸家　墨家、楊家、法家、名家――注意すべき事項

第三　秦……一二

始皇の新政——秦末群雄蜂起の原因——秦の滅亡——法三章——西楚の覇王　楚漢抗爭の近因——漢楚の交戰——劉邦楚を滅ぼせる顚末——項羽の亡びし所以——注意すべき事項

第四　西漢の初世……三一

高祖の天下經營——呂氏の亂——文帝の治——諸王の驕橫と賈誼の諸王鎭壓策——吳楚七國の亂——主父偃の推恩令——漢の武帝の事蹟——武帝の學術奬勵——注意すべき事項

第五　西漢と外國との關係……三八

武帝の外國征伐（南越地方を平ぐ——古朝鮮を滅ぼす——始めて西域との交通を開く——匈奴を征す）——武帝外征の結果——匈奴歸順——宣帝の治——注意すべき事項

第六　漢室の衰運……四五

宦者の專橫——外戚の跋扈——王莽の篡立——王莽敗亡の顚末——劉秀の即位　漢室の復興——光武帝の政治——注意すべき事項

第七　印度の古史……五〇

印度の開國——太古印度の族制——摩奴の法典とその影響——釋迦牟尼と佛教の興起——結集及佛教の盛運——ダリウス及亞歷山の侵入——阿輸迦王の佛教奬勵——大月氏の盛衰——迦膩色迦王と佛教——佛教支那に入る——注意すべき事項

第八　東漢の末運……五七

東漢滅亡の原因（外戚の驕橫——宦者の專權）——黨錮の顚末——匈奴の衰微とその西遷——鮮卑の興廢——班超の西域征服始末——西域征服の結果——注意すべき事項

第九　三國の世……六三

東漢の末世群雄割據の原因——董卓の暴橫——關東に割據せる群雄——曹操の勢頓に大となりし所以——曹操の勢威——劉備孫權の同盟と曹操の大敗——東漢の滅亡　魏の篡立——三國の鼎立——關羽　吳蜀の爭——諸葛亮の忠誠——三國の滅亡と晉の統一——注意すべき事項

第十　晉及五胡十六國……七一

八王の亂の原因——八王の亂——晉室東遷の由來——夷狄侵入の由來——三國の世に於ける五胡の情況——匈奴の大單于中原に帝と稱す　晉室の東遷——東晉の北征する能はざりし事情——桓溫の事蹟——苻堅の强盛及その版圖——淝水の戰——苻堅敗亡後江北群雄の割據——後魏の興起——劉裕の東晉を篡ふに至れる次第——南北朝の分立——注意すべき事項

第十一　南北朝……八一
柔然の興廢——後魏太武帝の偉業——宋魏抗爭の由來——後魏孝文帝の新政及其結果——東西魏對抗　高歡と宇文泰——蕭道成の簒立と宋の滅亡——侯景の叛——隋の興起と南北朝の統一——南北朝時代の經學——六朝時代の文學——南北朝時代の佛教——注意すべき事項
第十二　隋及唐の初世……八八
〔文帝の治世　法制改定——楊帝の偉業——群雄蜂起　隋の滅亡——唐の勃興——太宗の偉業——唐の制度——注意すべき事項
第十三　唐代の外國……九五
高句麗百濟新羅建國の由來——隋以前三韓と我國との關係——高句麗の極盛及その衰亡——我國と隋唐兩國との交通——突厥の興起——突厥の分立——唐と突厥との關係——回紇及黠戛斯——唐と大食國　回教の全盛——中古の印度——唐の極盛時の版圖——注意すべき事項
第十四　唐の中世以後……一〇三
武后の亂——韋后の亂——開元の治——節度使の設置——安祿山及史思明の叛——節度使跋扈の由來——節度使の疲弊——宦官專横の由來——朋黨の爭——朱全忠唐室を簒へる顚末——注意すべき事項
第十五　隋唐の學問宗教及貿易……一一〇
隋唐の儒學——唐の詩文——唐代支那に入りし諸宗教——佛教興隆の原因——印度に渡りたる著名の僧侶——道教唐の國教となる——隋唐と西洋諸國との海岸貿易——注意すべき事項
第十六　遼　五代　宋……一一三
契丹——阿保機——渤海の興亡——契丹と後晉——後周の世宗の偉業——五代の帝系——趙匡胤(宋の太祖)——宋の統一——澶州の役——李元昊——宋と西夏——宋の大屈辱——宋の財政困難——王安石の新法——新法に對する世論　朋黨の爭——阿骨打の事蹟——西遼の興亡——靖康の難——秦檜の和議——宋代の儒學文藝宗教——注意すべき事項
第十七　元……一二七
蒙古の興起——成吉思汗西征の原因——蒙古興隆の原因——拔都の西征——蒙古の南征——旭烈兀の西征——憲宗の南侵　世祖の即位——宋の滅亡——元軍の大敗——蒙古四汗國の始末及疆域——海都の事蹟——元衰滅の原因——蒙古時代東西交通の盛なりし所以

—注意すべき事項

第十八　明……一三八

明の興起と元の滅亡——明の太祖朱元璋の政治——靖難の役——方孝孺——鄭和——帖木兒の偉業——露西亞帝國の起源——土耳古帝國の起源——宦官專橫の由來——土木の變——韃靼の俺答——倭寇——朝鮮の建國——萬曆朝鮮の役——順憲成と東林黨——明の滅亡及其の原因——明代著名なる學者——莫臥兒帝國の興亡——歐人東漸の由來——葡萄牙人の東洋貿易——西班牙人の東洋貿易　比律賓群島の占領——明代の天主教——注意すべき事項

第十九　清……一五三

後金の興起——清の太宗の經略——清の世祖の統一——鄭成功——三藩の叛亂——尼布楚の條約——聖祖の偉業——高宗の偉業——清初の學術——清初の耶蘇教と科學の進歩——和蘭人の東洋貿易——英吉利人の東洋貿易——英國人の印度侵略（其一、二）——阿片戰爭の原因——阿片戰爭——南京條約——英佛同盟軍侵伐の原因——英佛同盟軍の北侵　北京の陷落——北京條約——長髮賊の亂——怡克圖條約——露西亞の極東經略　愛琿條約——露西亞の中央亞細亞侵略——伊犂條約——中央亞細亞に於ける英露の爭衡——佛國の後印度經畧と清英との交涉——

—注意すべき事項

第二十　最近の日清韓……一七五

日本の臺灣征伐　琉球所屬の確定——大院君の鎖國主義——我國朝鮮の獨立を承認す——朝鮮に於ける事大獨立二黨の軋轢——甲申の亂　天津條約——日清戰爭破裂の由來——日清戰爭——下ノ關條約——三國同盟　遼東半島の還附——日清戰役後列強の支那に於ける土地永借——義和團の亂　北清事件——注意すべき事項

附錄

略年表

歷代帝都表

歷代興亡表

歷代世系表

東洋史

文學士 箭内亘
文學士 藤岡繼平 共編
文學士 小川銀次郎

第壹編 周以前の支那

第一 周以前の支那

支那は世界に於ける最古國の一にて開創の事邈として考ふべからず、想ふに、今を距ること數千年の昔、黄色人種に屬する漢族は西北方より今の支那本土に移り、原住者たる葷粥（クンイク）（北狄の一にて匈奴の先）、三苗（南蠻の一にて猺の先）等の異種族を南北に討ち退け、黄河の北岸に多くの部落を作り、年代を經るに從つて部落の數も大に增加し、その間に、威權才智共に優れたる大酋長即ち君主世に出で、

漢族の文化漸く見るべきものありしならん。古書に、包犧氏が八卦を作りて吉凶をトひ、網罟を作りて漁獵を教へたりといふが如き、又神農氏が木を用ゐて耒耜を作り、農を教へ、日中市を爲して民に物を交換せしめたりといふが如き、又黄帝氏が炎帝氏を破りし後、民に舟車の便を教へたりと傳ふるが如き、この間の消息を窺知せしむるに足るものなり。

又古書に三皇五帝の號あり、黄帝前後の君長を以て之を充つれども、古來その定說なく、且戰國時代の人の作り出したる說とおぼしければ、こゝに言はず。

二　堯舜の事蹟

太古の事、知るべからざれども、堯舜以後の事實は、概ね「尚書」に載せられたれば、まことの支那の歷史は、この時より始まるものなり。元來堯舜以前、父子相繼で天子の位に即きたるものなく、皆當時の君長中、最も强盛なる權力又は德望あるものが、他の諸君長の上に立ちて、天子となれるなり、堯の天子となりしも之に外ならざるが如し。

堯は仁德高く、民を憐み、治を圖り、天下至治を樂めり、後世孔子の稱述により て舜と共に至聖と崇められ、歷代帝王の模範となりぬ。

今堯の事蹟として顯然疑ふべからざるものを擧ぐれば、(一)羲和兩氏に命じて、曆法を定め、一年を三百六十六日とし、之を十二月に分ち、閏月を置いて四時を正しくしたること、(二)當時支那の大憂たりし洪水を治めんとし、鯀を登用して之に委ねたるに、九年を經て功なかりしこと、(三)舜の至孝を聞き、民間より擢んでて、政を攝せしめたること、(四)舜を、堯のために拔擢せられ、一躍して、天子となれるなりとす。堯崩じて舜はその禪を受く。

舜は、堯のために拔擢せられ、一躍して、天下の政を攝す、堯老いて治水の事未だ成らず、乃ち堯は位を舜に禪り、その志を成さしめたる也。

今舜の事蹟を考ふるに(一)堯の政を攝すること二十八年に及び、(二)その間、天子の巡狩、諸侯の朝覲に關する制を立て、刑罰を定め、凶族を除き、(三)即位の後、時の司空(水土を掌る官)禹に命じ、水害を除かしめて先帝の遺志を成し、(四)禹を始と

し、契(セツ)・皐陶(カウヨウ)等の賢臣朝廷に列し、天下大に治まれり。

三　禹の功業　世襲君主制

舜崩ずるや、諸侯は禹を推戴して天子の位に即かしむ、茲し禹の大功に感激せるなり。(一)禹は堯に仕へて司空となり、(二)舜の時、勵精刻苦、八年の後、水害を除き、天下を九州に區劃し、貢賦の制を創め(三)苗民を討ち拂へたり、(四)即位の後、安邑(山西、解州夏縣)に都し、帝と稱せずして王と稱す。

四　夏の世

禹崩ずるや、その子啓また賢なりしかば、既に禹の功業を德とせる諸侯は、相率ゐて啓に歸服し、啓をして父の位を繼がしめたり、是れ實に支那に於ける君主世襲の始にして、所謂王朝(Dynasty)も亦之より起る、初め禹は夏后氏と號せるより、その子孫の君臨せる國を夏といふ。禹より十七世、四百餘年にして履癸(桀)に至り、末喜を寵し暴虐無道なり、遂に商湯に滅ぼさる。

五　殷の興亡

湯は舜の司徒(教育を掌る官)契(セツ)の後にして、商(陝西、商州)の君たり、賢臣伊尹を用ゐて、諸侯を懷け、夏を滅ぼして後、推されて王となり、成湯と號す、亳(ハク)(河南、歸德府、寧陵縣)に都し、國名を猶商といふ。その後盛衰あり、十九世盤庚の時、都を殷(河南、彰德府、安陽縣)に遷し、國號を殷と改む、三十世辛(紂)に至り、姐己(ダキ)を寵し、狂暴なりしかば、遂に周の君發に伐たれて死し、殷は六百餘年にして亡ぶ。

六　注意すべき事項

(イ)苗人種。苗人種は古への所謂三苗、又は有苗にして今は重に貴州の山地に住す。太古は揚子江黃河の間に居りしが、漢族が西北より來り移り、黃河の南北に帝國を建つるに及んで、次第に西南の地に逐はれ、永く支那の文化に與る能はず。

(ロ)箕子。箕子は殷の王族なり、紂王の時大臣となり、微子・比干と共に殷の三仁と稱せらる。紂の暴虐を諫めて却て囚へられ、殷亡ぶるに及んで周に仕ふることを肯んぜず、逃れて朝鮮に居る。周の武王封じて朝鮮の王とす、實

に古朝鮮の始祖なり。

(八)伯夷、叔齊、共に殷の人なり。殷亡ぶる後周に仕ふるを恥ぢ。首陽山に遁れて周粟を食はず遂に餓死す。世に義人と稱せらる。

(二)三代の王都。夏は安邑、殷は殷商は亳、周は初に鎬、後に洛邑。

第貳 周

七 周の勃興

周は舜の后稷(穀稽を掌る官)より出づ、棄の子孫世〻后稷たりしが、夏衰ふるに及んで官を失ひ、戎狄の間にかくれ、後邠(陝西邠州)に遷りて、漸く人心を得、數世を經て古公亶父の時、匈奴に攻められて岐山(陝西、鳳翔縣)の下に國を立て周と號せり亶父の孫昌、仁政を施し諸侯概ね之に歸す、時に殷の紂王益〻暴虐なりしかば昌の子發嗣ぎ、終に諸侯の軍を會し、紂を伐て之を滅ぼし、商に代て王と爲り、昌を追尊して文王といひ、大に宗族功臣を封建し、以て王室の藩屏とせり。發は即ち武王なり。

八 成康の治

武王死して後、其子成王立つ。武王の弟周公旦朝に立て政を攝し、制度を建て禮樂を作りて範を後世に垂れ、洛邑を建て、天下の諸侯を會せり。成王死して其子康王立ち、天下太平國運隆盛にして、成康の二朝刑を用ゐざること四十餘年に及べり、世に之を成康の治と稱す。

九 周公旦の事蹟

周公旦は賢明多才なり。成王立て猶幼なりければ弟召公奭と共に王を輔け朝に臨み、勵精治を圖れり。(一)攝政の時、周公の二弟管叔、蔡叔亂を作せしかば周公東征すること三年、悉く禍亂を平定し(二)殷の紂王の庶兄微子を宋に封じて殷人の歡心を買ひ、(三)封建の制度を定め(四)禮樂を作り學校を起して文物を盛にし、(五)井田の法を改めて人民貧富の差を減ずる等、周初の偉績は悉く周公の力に成れり。故に孔子も周公の偉を追賛し文武二王と共に聖人の

列に加へたり。

十　周室の東遷

初め武王、豊より鎬(陝西省西安府)に遷り、成王の時更に洛邑(河南省河南府)を營み、彼を西都と云ひ、此を東都と稱せり。然るに康王の孫穆王の世より後は、四夷邊境を侵し、周室漸く衰へしを、宣王一たび之を擾ひて周室を中興せしが、その子幽王無道にして、犬戎に殺されしかば、皇紀前百十年(770B.C.)幽王の子平王は、洛邑に卽位して大統を繼げり、史に之を周室の東遷といふ

十一　春秋の世

孔子「春秋」を作りて平王四十九年(722B.C.)より敬王三十九年(481B.C.)に至るまで凡そ二百四十二年間の事迹を錄す、故に此時代を春秋の世といふ。卽ち、「春秋」は、支那最古の史書といふ可し。此時に當りて王權全く衰へ、諸侯放恣にして攻伐兼併日も亦給らざりしかば、此時代の初には七十餘國を存せしもの、終には僅かに齊・楚・秦・越・宋・陳・魯・衛・晉・鄭・曹・蔡・燕・吳等の大國のみとなれり。

十二　覇者興起の由來

周室東遷後益〻微弱にして、諸侯相爭ふに際し、戎狄四方に起りて侵略愈〻甚しく、動もすれば中國を蹂躙するの勢あり。しかば、諸侯の大なるもの、名を尊王攘夷に藉りて、諸侯に號令し、內亂を定め外患を除かんとするに至れり、これを覇者といふ。

十三　齊桓の覇業

始めて覇者の業を成せるを齊の桓公となす。桓公都を山東の薄姑(山東省青州府)におき、管仲を擧げて富國強兵の策を講じ、皇紀前十九年(679B.C.)王命を以て覇者となり、楚を屈し、戎狄を攘ひ、能く王事に勤め民心を安んじ、その功業五覇に冠たり。

十四　晉文の覇業

管仲死して齊の覇業衰ふるや、宋襄公之に代らんとして楚に破られ果さず、次で興りしものを晉の文公となす。晉は絳(山西省平陽府)に都す、文公山西の地に據

り、狐偃・趙衰等の良才を用ゐ、北狄を討ちて周室を救ひ、楚を城濮（山東省曹州府）に破り、皇紀二十九年（632B.C.）遂に王命を以て覇者となる。

十五　楚荘の覇業

時に楚に荘王あり、楚は世、鄧（湖北省鄖州府）に都して湖北の地に雄視し、つねに中原を圖らんと欲し、窃に機の至るを待つ。荘王楚に主たるに及び、晉の内亂に乘じて北上し、皇紀六十四年（597B.C.）晉軍を邲（河南省開封府）に破り、代りて覇を中原に稱す。

十六　越の勾踐の覇業

楚の平王の時、吳王闔廬は楚を破りて勢を江淮の間に振ひしが、後、越王勾踐に破られ、その子夫差回復を計りて勾踐を降したが、勾踐は名士范蠡に輔けられて刻苦二十年の後、皇紀百八十八年（473B.C.）終に吳を滅ぼし、ついで王命を以て覇王と稱せり。

十七　秦穆の覇業

秦の穆公、賢臣百里奚を用ゐて、内治外征能く功を奏し晉を破りて河西の地を略し、鄭を襲ひ、滑を滅し、ついで西の方、戎を攘ひて大に地を拓き、皇紀三十八年（623B.C.）周王の命によりて西方諸侯の長となる。後年の秦の基業は實に此時に定まれるなり。

十八　陪臣簒立の由來

諸侯の強大なるもの、漸くその富貴に安んじ、國政を擧げて、その重臣に委ね、又覇者は常に會盟に忙はしく、己れの封内に居ること稀なりしかば、益〻陪臣をして私恩を賣り、權威を積むの機を得しめたり。韓・魏・趙の三氏が主家晉を亡ぼして其地を分領し、齊の重臣田氏が主家を簒ひ、而して共に王命を受けて諸侯となりたるが如きは、その最も著しきものなりとす。世に韓魏趙の三國を三晉△ともいひ、田氏の齊を田齊△ともいふ。

十九　戰國時代と戰國の七雄

覇者交〻起りて諸侯を統率し、天子に代りて海内に號令するに至りしより、王

室の威嚴全く地に落ち、その強大なるもの、各一方に雄視して、攻伐衆併に日も亦給らず、遂に所謂戰國の世を現出せり。而して春秋以來の大諸侯秦・楚・燕及び新に興れる韓・魏・趙・田齊の四國を併せ稱して、戰國の七雄といふ

二十　秦の興隆の由來

秦の襄公、周室東遷の際、兵を以て平王を送りしより、封ぜられて諸侯となり、穆公の時、地を廣めて東黃河に接し、西西戎を亡ぼすこと十二、遂に西方に覇となり、所謂關中の要地全く其有に歸せり（皇紀三十八年）爾後列世專ら拓地殖民と富國强兵とに意を用ゐしも、尙中國諸侯の秦を遇するに夷狄を以てせしかば、孝公發憤して政を爲し、商鞅を用ゐて變法の令を布くに及んで地形の險要と天然の沃土とは、その善政と相俟て、秦をして列國の間に嶄然その頭角を露はすに至らしめたり。

二十一　商鞅の事蹟

商鞅は衛の人なり、秦の孝公の信任を受け、變法の令を布き、之を厲行して富國强兵の基を開く（皇紀三百二年）。戰功あるものには爵を授け、私鬪するものには刑を加へ、井田の法を廢し、分家の制を創めて收稅の源を增し、耕織を勵まして民を富ませり。されば令出でゝ十年、秦國の治大に擧り、百姓皆餘財あるに至る。後商鞅罪ありて、戮せらるといへども秦の興隆は此變法與て大に力ありしこと疑なし。

二十二　六國同盟（合從）

秦は孝公の時國運頓に强盛に向ひ、其子惠文に至りて王號を僭稱し益〻强大なり。初め夷狄を以て秦を遇せし中國の諸侯は今や漸くこれを憚り、殊に其東方侵略の愈〻進むを見るに及んで遂に之を恐るゝに至れり。此時に當り洛陽の辯士蘇秦なるもの燕王に謁し、六國同盟秦を仆すの策を獻じて用ゐられ、更に三晉齊楚の五王を說服し、自ら其長となり、六國の相印を帶び、同盟諸國の間に斡旋せり。之を六國の合從といふ、蓋し從は縱と同じく南北の義而して六國秦の東に在りて南北に列せるを以て之れが合同を此くは稱せ

しなり、實に皇紀三百二十八年(333B.C.)とす。

二十三　合從の破れし所以　連衡

六國は蘇秦に促されて合從の約を結びたれども、其翌年直に破れ、爾後幾たびか結び且つ解かれたり。蓋し(一)六國が秦を恐るゝは即ち同じきも、秦に境を接するものと然らざるものとは、各其利害の度を異にす、(二)加ふるに、秦は類りに離間の策を施し、尋で諸侯の軍を破り、六國も亦漸く合從の不利なるを覺るに際し、(三)皇紀三百三十八年魏の辯士張儀秦の相となり、六國の王に見えて、口を極めて合從の非を論じ、連衡の利を唱へしかば、十二年の後六國一たび秦に服事するに至れり。衡は橫と同じく東西の義なるを以て、秦が東方の六國を連合し服事せしむるを連衡といへり。

二十四　六國滅亡の原因

合從連衡の際、諸侯相爭ひ、常に秦の乘ずる所となり、益其地を失へり。赧王の元年、齊の湣王は、燕王噲を伐て之を殺し、翌年秦齊兵を合して楚の兵を破る、趙は武靈王の時、地を北境に拓き、惠文王次で立つや、藺相如、廉頗の二賢相、心を一にして政を執りしかば、秦敢て兵を趙に加へず。既にして齊王朱を滅ぼし意驕るや、燕の上將軍樂毅は秦・韓・魏・趙の師を率ゐて齊を伐ち、六ヶ月の間に七十餘城を下せり。樂毅燕を去るの後、齊の將田單の爲めに悉く復することを得たれど、齊は之よりまた振はざるに至れり。要するに(一)六國相互の不和と(二)賢臣に信任せざることとは、愈〻六國の疲弊を招き、秦の乘ずる所となりしなり。

二十五　周室及六國の滅亡

六國相侵して國力益〻疲弊するに際し、秦は惠文王の時、巴蜀を略して國益〻富み、頻年兵を東に出して城を陷り地を拓かざるなし。武王を經て昭襄王立つに及んで、范雎を相とし、白起を將として、大に趙軍を長平(山西澤州)に破るに及も、なくして西周の赧王は秦の勢を恐れ諸侯に命じて秦を伐たしめしかば秦兵を出して之を滅し、後七年にして東周また秦に降り、周全く亡ぶ。時に皇紀

四百十二年なり。秦の昭襄王死し、二傳して嬴政(即ち始皇帝)に至り、李斯の計を用ゐ頻りに反間を放ち、又大に六國の卿相に賂して君臣を離間し、猶己れに害あるものあらば屠刺客を放ちて之を殺さしめ、然る後師を率ゐて之を伐ちしかば、韓は皇紀四百三十一年を以て亡び、其後二年楚亡び、燕は其翌年、齊は其翌年を以て亡ぶ。周の武王より殆んど九百年の後、秦天下を一統し、こゝに一大帝國を創むるに至れり、實に皇紀四百四十年(221B.C.)なり。

二十六　周末諸學の興起せし所以

(一)春秋戰國の際、王室微々として振はず、諸侯攻戰を事として、天下麻の如く亂れ、百姓塗炭の苦ありしかば、道を憂ひ世を救はんとするもの、春秋の末には老子、孔子あり、戰國の時莊子、孟子、荀子の徒出で、その唱へし所の說は永く後代の尊奉を受けたり。(二)加之此時に當りて周初の禮樂制度全く壞れて上下の階級もなく門地の尊卑も問はざるに至れると(三)思想言論の自由にして立身の容易なるとは、諸他の學說の興起を促し、世を憂ふるの輩又は名を好むの徒は、各自家の說を持して諸侯に說き匹夫より一躍して將相となるもの少なからざりき。

二十七　儒家　孔子、孟子、荀子

儒學の祖を孔子とす。孔子名は丘、字は仲尼、皇紀百〇九年(552BC.)山東の魯に生る。仁を以て道の大本となし、治國平天下は修身齊家より始まるとの說を立て、海內を周遊して列國諸侯に說きしが、概ね容れられざりしかば、魯に歸り先王の禮樂を修め易に傳し、詩書を編し、春秋を作りて範を後代に垂れ、傍ら弟子を薰陶して終生倦まざりき。さればその弟子には六藝に通ずるもの七十餘人ありしといふ。孔子年七十四にして歿し其孫子思は中庸を著して誠を說く。

孟子名は軻、孔子を去ること凡百五十年、諸學紛々として混亂極なきの時に出で、卓然孔子の學の眞意を祖述し、性善を唱へ仁義を說き、力を極めて楊墨

の説を難せり

孟子の後に荀卿あり、其學また孔子を師とすれども「荀子」を作りて性惡を唱へ、孟軻と爭ひしが、その人物と學と固より孟子の敵に非ず。孔子の學は、支那歷代政教の基礎にして、その徒を儒家といふ。

二十八　道家　老子、列子、莊子

道家は老子を祖とす。老子は楚の人、名は聃、自然無爲を以て道の大本なりと唱ふ。其後百餘年にして、列禦寇出でゝ「列子」を著し、後、莊周「莊子」を作りて雄大の文に玄妙の理を寓し、共に老子の說を祖述せり。南方の學者多くは、其說を奉ず。其徒を道家といふ。後世の道教は蓋し之に附會して起れる者なり。

二十九　其他の諸家　墨家、楊家、法家、名家

儒家の說北方に盛にして道家の說南方に行はるゝに際し、尙幾多異端の說其間に行はれたり。墨翟を祖とする墨家は兼愛の說を爲し、楊朱を祖とする楊家は自愛の說を爲し、商鞅、韓非の徒は法術を貴びて法家と稱せられ、公孫龍の如きは詭辯を弄して名家と稱せらるゝ等、諸派爭ひ起りて論難攻撃日も亦給らざるの狀あり。

三十　注意すべき事項

(イ) 共和。周の厲王暴虐にして民人離畔するや、王出でゝ彘に奔る。太子靖猶ほ幼なりしかば、召公周公の二相、協和して共に國政を總理すること十四年之を共和と號せり。太子靖は、即ち後の宣王なり。

(ロ) 周の宣王の時の名臣。文臣には仲山甫、尹吉甫あり、武將には方叔、召虎あり。ともに宣帝を輔けて外は玁狁を伐ち荊蠻徐夷淮夷を平げ、內は政を善くして百姓を安んぜしかば、文武の業大に擧り、周室中興の功を成せり。

(ハ) 管仲。管仲は齊の桓公に仕へ、賢能を稱し貧窮を賑はし、稅を鹽鐵に課して國庫を豊かにし、周公の意を襲うて兵制を改革せり。此くて國富み兵強く、七年の後、諸侯を鄄(山東省曹州府)に會して覇者の例を啓く。管仲死して齊の覇業頓に衰ふ。

(ニ)會稽　春秋の際、吳王闔廬越王勾踐の爲めに破られ死せしかば、その子夫差は謀臣伍子胥を用ゐて拮据三年の後、勾踐を會稽山(浙江紹興府)に圍み、遂に和を乞はしむ。勾踐又會稽の恥を雪がんとし、賢人范蠡を用ゐて經營多年、遂に吳を滅せり。

(ホ)五覇。　春秋の世に覇を稱したるもの凡そ五人を併せ稱して五覇といふ。即ち齊の桓公、晉の文公、秦の穆公、楚の莊王、越の勾踐是なり。

(ヘ)馬陵の戰。　周の顯王二十八年(皇紀三百二十年)魏其將龐涓をして韓を伐たしむ、齊田忌を將とし孫臏を師となし之を救ふ。孫臏竈を減ずるの奇計を以て龐涓を誘ひ、更に馬陵の險阻に樹を削りて白書し、龐涓來り讀むに及んで、伏兵をして一時に弩を發せしめ、大に魏軍を破る。龐涓自刎し、太子申虜にせらる、之れを馬陵の戰といふ。

(ト)卽墨の戰、　齊の湣王の時、燕の將樂毅來り侵し、殆んど齊地を定め、今や僅かに莒と卽墨との二城を存す。後五年にして卽墨の人、田單齊の將となるや先づ反間を燕に放ちて樂毅を罷めしめ、然る後軍を進め火牛千餘頭を敵中に放ちて遂に之を破り、悉く襄に失ふ所の七十餘城を復せり。

(チ)白起。　秦の昭襄王位に上るに及びて白起擧げられて秦の將となり、再び韓魏を破り、又楚を攻めて其王をして都を徙さしめ、封せられて武安君と稱す。長平の役、趙の將廉頗壁を堅くして敢て出でざりしが、范雎の計によりて反間を放ち趙括をして廉頗に代らしむるに及んで、白起秦軍の上將となり、趙軍を伐て大に之を破り、趙括を射殺し降卒四十萬人を坑殺せり、三年の後秦王白起を疑ひ死を賜ふ。

第三　秦

三十一　始皇の新政

始皇帝李斯等の議に本つき、勇斷して新政を布き、大帝國の經營をなす。今其重なるものを擧ぐれば左の如し。

(一)郡縣の制。帝は周末諸侯强大にして兵亂相繼きたるに鑑み、李斯の言を容れ封建の制を廢して郡縣の制を布き、天下を三十六郡に分ち郡を小分して縣とす。是に於て中央集權の實擧る。又宗室及功臣には朝廷の稅賦を割きて重く之を賞賜せり。

(二)官制。帝又新に官制を定め、中央政府には丞相(政を理す)太尉(兵を掌る)御史大夫(監察の官)を置きて、一人をして大權を專らにするの憂なからしめ、地方の制も亦之に倣ひて、郡に守、尉、監、各一人を置く。皇帝は此三大權を總攬す。

(三)兵器の沒收、富豪の移集。天下の兵器を收め、之を銷して鐘鐻金人を造り咸陽(陝西西安府内)に聚めて國都を富まし、一は以て地方の禍亂を防ぎ、一は以て皇帝の威を示せり。

(四)外征。帝の三十二年、蒙恬(モウテン)を將として、北、匈奴を退け河南(オルドス)の地を收め、長城を增築して臨洮より遼東に到るまで所謂萬里の長城となし、以て匈奴の南侵に備へ、また南、南越の地を略す。是に於て秦の疆域は殆んど周に倍す。

(五)土木。帝又大に土木を起し、北には長城を增築し、渭水の南には阿房宮を作り、諸郡に離宮を建つ。又屢地方を巡狩して封禪を行ひ、盛に秦の德を頌せしめ、以て天子の尊嚴を示す。

(六)挾書の禁。當時猶戰國の餘習を脫せず、法令出づる毎に、學者巷議して人心を動かすこと多し。帝乃ち李斯の議に聽き、天下の藏書を收めて概ね之を燒き、又咸陽の學者四百六十餘人を坑殺す。之れを挾書の禁といふ。

三十二　秦末群雄蜂起の原因

始皇帝戰國の後を受けて天下の主となりしかば、之が統一政治を布くに當りて、頗る心を用ゐしと雖も、其新政は餘りに急劇にして峻刻なるものあり、しかば、六國の遺臣亂を思ふもの甚だ多し。然れども帝は不世出の英主なりしかば、その在世の間は皆屛息して命を奉せしが、帝死するに及びて、遂に禍機一時に發するに至れり。而して其原因を繹ぬるに、概ね左の如し。

(イ)盛に土木を起し、從て稅斂を重うしたること。
(ロ)挾書の禁は、天下の學者をして四方に散じて人心を煽動せしめたること。
(ハ)六國の遺族舊臣常に其恢復を圖りたること。
(ニ)李斯、趙高等命を僞りて、衆望ありし太子扶蘇を殺したること。
(ホ)二世立ちて、趙高權を專らにして、刑辟を重くし、舊臣を除きたること。
(ヘ)郡縣の制は中央權を過重したるが爲め、微弱なる地方官は、群雄の蜂起を防ぐこと能はざりしこと。

三十三　秦の滅亡

初め楚の懷王諸將と約して、先づ關中に入り之を定むるものはその王たるべしとなす。劉邦寬大の長者なるを以て、推されて西討の命を受け、遂に武關に入り、次で曉關(藍田)を擊て大に秦軍を破る。是より先、宦者趙高、二世皇帝に仕へて權を專らにし、方めて關東の亂を壅蔽したりしが、劉邦の軍、關に入るに及びて、俄に二世を弑し、その姪子嬰を立つ。子嬰立ちて、趙高を族誅し、劉邦の軍覇上に至るや、素車白馬して出で降る。秦は始皇帝より此に至るまで僅に十五年にして亡ぶ。實に皇紀四百五十五(206B.C.)年なり。

三十四　法三章

劉邦關に入り、咸陽の壯麗に心を動かし、留て之に居らんとせしも張良の諫に聽きて秦の重寶府庫を封じ、軍を覇上に還し、關中の父老を招いて、約によりて遠からず此地に王たるべしと告ぐ。又悉く秦の苛法を除き、唯法三章を約し、人を殺すものは死に處し、人を傷けるものは物を盜むものは罪とす、秦民大に劉邦を欣慕す。

三十五　西楚の覇王　楚漢抗爭の近因

項羽既に河北の地を平げ、將に關中に入らんとして劉邦の兵に拒まれしも、之を破りて鴻門に至り、劉邦を劫かして成らず、遂に義帝(楚王)を江南に徙し自ら彭城(江蘇省徐州府)に據り西楚の覇王と號し、諸侯の功を論じ、約に負きて劉邦を漢中に封じて漢王となし、秦の降將、章邯等を關中に分封す。劉邦之を含み項

羽を伐たんとす、是に於て楚漢の爭起る。

三十六　漢楚の交戰

劉邦既に韓信を用ゐ、三秦を伐ちて關中を定め、項羽が田榮陳餘の叛を聞て北伐せる虛に乘じて、關を出でゝ河を渡り、進みて洛陽に至り、項羽に殺されたる義帝のために喪を發し、檄を諸侯に傳へて項羽を伐たしむ。彭越魏の地を收めて漢に歸するや、漢兵五十餘萬漸く進んで彭城に迫る。項羽時に齊と戰ひしが、之を聞きて俄に軍を旋し、精兵三萬を以て漢軍を睢水に破る。諸侯依て復漢に背きて楚に降る。

三十七　劉邦楚を滅ぼせる顚末

劉邦滎陽に至りて敗軍を集め、蕭何も亦來り援ひしかば、漢兵復振ひ、屢楚軍を破る。韓信別軍を率ゐて、連りに北方を定むるや、項羽は頻りに漢兵を破ると雖も、英布叛き、謀臣范增も反間に遇ひて憤死せるの時、韓信來り攻むるに及んでは、項羽の軍糧絶え、援兵來らず、形勢益〻不可なりしかば、遂に和を請ひ、鴻溝（河南省汴州）を以て天下を二分し、西を漢に與へ、東を楚に附し、各兵を收めんと約す。然れども張良陳平等漢王に勸めて約に負かしめ、直ちに項羽を逐うて、固陵に韓信彭越等の諸將と會し遂に羽を垓下に圍む、羽圍を脫して烏江（安徽省和州）に至りて自刎す。楚漢相爭ふこと五年、漢遂に勝ちて、劉邦皇帝の位に即く、之を前漢の高祖とす。實に皇紀四百五十九年（202B.C.）なり。匹夫より起りて皇帝の位を踐むもの、劉邦を以て始とす。

三十八　項羽の亡びし所以

項羽勇武絶倫戰に巧なりといへども終に劉邦の爲めに其志を遂ぐることを得ず。その故もとより多かるべしと雖も、左の如きはその重なるものなるべし。

(イ) 項羽は功名必徒らに盛んにして、其の術に拙なりしが爲めに、劉邦の爲めに乘せられたること。

(ロ) 項羽は情を以て優り、劉邦は智を以て勝つ。故に羽の爲す所往々粗暴にし

て殘忍の觀あり、劉邦の爲す所陰險なるが故に時に寛仁の觀あること。

(ハ)彭城の形勝は遙に關中の形勢に劣ること。

三十九　注意すべき事項

(イ)李斯。　李斯は秦の始皇帝創業の大功臣なり、郡縣制、法制、挾書の禁等凡そ始皇帝の偉業は、彼の畫策する所にあらざるはなし。後丞相となりしが、二世の時宦者趙高のために讒せられて族誅せらる。

(ロ)阿房宮。　始皇帝の晩年、阿房宮を渭水の南、上林苑中に作る。東西五百歩、南北五十丈、壯麗亦實に天下に冠たり。

(ハ)蒙恬。　蒙恬（テン）は始皇帝に仕へたる名將なり。帝の晩年命を受けて、大擧して北匈奴を伐ちて河南（今のオルドス）の地を取り。長城を增築して匈奴の南下に備へしが、始皇崩ずるや、李斯、趙高遺詔を矯めて蒙恬及び監軍扶蘇を殺す。

(ニ)陳勝、吳廣。　共に楚の人にして秦末始めて兵を起したる人なり。

(ホ)鴻門の會。　劉邦既に秦王を降し函谷關を守る、項羽時に河北を定め將に關中に入らんとせしに關を守りしかば、羽激怒し鴻門（陝西省臨潼縣）に陣し直に邦を伐たんとす、邦乃ち鴻門に來り謝す羽留めて共に飲むや范增人をして劍舞に托して邦を斬らしめんとす張良之を悟り、勇將樊噲を召して邦が身を護らしめ遂に事なきを得たり。

(ヘ)鉅鹿の戰。　二世皇帝二年の末、秦將章邯既に楚將項梁を襲うて之を殺し、遂に進んで趙王を鉅鹿（直隸省順德府）に圍む。趙王救を楚に請ふ。楚の懷王、宋義を上將軍とし項羽を次將として之に赴かしむ。宋義途に在て躊躇して進まず項羽乃ち命を矯めて宋義を殺し、王命を以て自ら上將軍となり、英布等の諸將を率ゐて河を渡り、秦軍と戰ふこと九回大に之を破り、章邯を走らし一將を虜にす。此時諸侯の鉅鹿に軍するもの十餘壁、敢て兵を放たず、楚軍の强勇を見て驚き恐れ、戰罷んで羽に見ゆるに及びて皆膝行して敢て仰ぎ見るものなし。羽是に於て討秦連合軍の上將軍となり、名聲頓に高し。

(ト)趙高。　秦の始皇帝の宦者也。二世立つや、擁立の功を負ひ、丞相李斯と萬機

て殘忍の觀あり、劉邦の爲す所陰險なるが故に時に寛仁の觀あること。

(ハ)彭城の形勝は遙に關中の形勢に劣ること。

三十九　注意すべき事項

(イ)李斯。　李斯は秦の始皇帝創業の大功臣なり、郡縣制、法制、挾書の禁等凡そ始皇帝の偉業は、彼の書策する所にあらざるはなし。後丞相となりしが、二世の時宦者趙高のために讒せられて族誅せらる。

(ロ)阿房宮。　始皇帝の晩年、阿房宮を渭水の南、上林苑中に作る。東西五百歩、南北五十丈、壯麗亦實に天下に冠たり。

(ハ)蒙恬。　蒙恬(モウテン)は始皇帝に仕へたる名將なり。帝の晩年命を受けて、大舉して北匈奴を伐ちて河南(今のオルドス)の地を取り。長城を增築して匈奴の南下に備へしが、始皇崩ずるや、李斯、趙高遺詔を矯めて蒙恬及び監軍扶蘇を殺す。

(ニ)陳勝、吳廣。　共に楚の人にして秦末始めて兵を起したる人なり。

(ホ)鴻門の會。　劉邦既に秦王を降し、函谷關を守る、項羽時に河北を定め將に關中に入らんとせしに、關に守ありしかば、羽激怒し鴻門(陝西省臨潼縣)に陣し直に邦を伐たんとす、邦乃ち鴻門に來り謝す羽留めて共に飲むや范增人をして劍舞に托して邦を斬らしめんとす、張良之を悟り、勇將樊噲を召して邦が身を護らしめ遂に事なきを得たり。

(ヘ)鉅鹿の戰。　二世皇帝二年の末、秦將章邯既に楚將項梁を襲うて之を殺し、遂に進んで趙王を鉅鹿(直隸省順德府)に圍む。趙王救を楚に請ふ。楚の懷王、宋義を上將軍とし項羽を次將として之に赴かしむ。宋義途に在て躊躇して進まず項羽乃ち命を矯めて宋義を殺し、王命を以て自ら上將軍となり、英布等の諸將を率ゐて河を渡り、秦軍と戰ふこと九回大に之を破り、章邯を走らし一將を虜にす。此時諸侯の鉅鹿に軍するもの十餘壁、敢て兵を放たず、楚軍の强勇を見て驚き恐れ、戰罷んで羽に見ゆるに及びて皆膝行して敢て仰ぎ見るものなし。羽是に於て討秦連合軍の上將軍となり、名聲頗に高し。

(ト)趙高。　秦の始皇帝の宦者也。二世立つや、擁立の功を負ひ、丞相李斯と萬機

を決し、後李斯を殺して權を專にし、關東の患を塞蔽せしが、漢軍來り咸陽に逼るや、趙高罪せらるゝを恐れ、二世を弑し、子嬰を立てしが、幾もなくして族誅せらる。秦の滅亡を早めたるは趙高の罪最多きに居るといふべし。

(ナ)彭城。彭城は今の江蘇省徐州府に在り、楚漢攻爭の際西楚の覇王項羽の據りたる名城なり。

(ラ)范增。楚の項羽の謀臣にして、漢の最も恐るゝ所たりしが、後項羽は陳平の反間を信じて、范增を疑ひしかば、范增發憤の餘、病を作して死す。幾もなくして項羽亡ぶ。

(ム)垓下。今の安徽省鳳陽府靈壁縣の南に在り。楚の項羽漢軍に追はれてこゝに至り、皇紀四百五十九年大敗して烏江に逃れ自刎す。

(ル)蕭何。もと沛邑の主吏たり、劉邦起るに及んで子弟を率ゐて之に從ひ、最も劉邦に信任せらる。劉邦の關中に入るや、蕭何先づ秦の丞相府の圖籍を收めて書策の資となし、劉邦の漢王となるに及んで、丞相となりて銳意治を圖り、劉邦楚と天下を爭ふに際して、常に糧食を供し、毫も後顧の憂なからしめたり。劉邦帝位に即くに及んで酇侯に封せらる。

(ヲ)韓信。淮陰の人、家貧にして嘗て漂母の餐を受け、又小恥を忍んで少年の股下を出づ。初め楚に仕へしが、志を得ずして漢に歸し、蕭何の推薦により漢の大將となる。四方を攻伐して功顧る大なりしかば、封せられて齊王となり、項羽亡びて後楚王となりしが、幾もなくして叛を以て誅せらる。

(ワ)張良。韓の人、嘗て力士をして始皇帝を狙撃せしめて果さず、後劉邦に從ひ常に帷幕の臣たり。漢天下を定むるに及んで、留侯に封せられて萬戸を領し、後仕を致し、惠帝の時功名を全うして死す。

第四　西漢の初世

四十　高祖の天下經營

高祖既に天下を統一するや、功臣韓信英布彭越等を封して王とし其他侯と

せしもの多し、然れども異姓の諸侯は漢室の患なることを知り、漸く叛を以て之を除き、後子弟を封じ藩屏となし、秦の孤立して亡びし如くならざらんことを欲せり。然れども同姓の諸王侯亦次第に強大となり、終に文帝の時所謂呉楚七國の大亂とはなれり。

四十一　呂氏の亂

高祖在位八年にして死し、惠帝立つ、皇后呂氏の出なり。呂后才略あり、高祖を輔けて政務に參し、大に諸重臣の憚る所となる。惠帝位に即き、病の爲めに政を見る能はざるに及び、全く天下の大權を握り、帝死して後は、自ら朝に臨み制を稱し、劉氏の諸王を殺して、代ふるに己れの一族を以てし、將に天下を奪はんとせしが、幾ならずして呂后死せしを以て劉氏の諸王は大尉周勃、丞相陳平等と謀り、悉く諸呂を誅戮し、惠帝の弟代王恒を迎へて帝となす、之を文帝といふ。

四十二　文帝の治

文帝久しく地方に在りしが爲めに、能く民情に通じ、位に即くに及んで、自ら先んじて儉素を事とし、連座肉刑等の苛法を除き、賑窮養老の令を定む、而して吏も亦樸質重厚を旨とせしかば、國内殷富となり、屢田租を免じ貢獻を止むるに至る、後世稱して、秦漢以後治績第一とす、武帝が外征の偉業も、實に此時充實せられたる國用を有せしによるといふを得べし。

四十三　諸王の驕横と賈誼の諸王鎭壓策

文帝の治績頗る擧りて、天下太平を謳歌するに際して、漢室の憂は、今やその藩籬の中に起れり。即ち高祖の時、地方に封ぜられたる諸王は、各形勝を占め、兵を蓄へ、財を積み、呂氏の亂に大功を立て、實に皇室の藩屏たりしが、その後漸くその强大を恃みて專横となり、文帝代王より起て帝位を踐むに及んで、呉齊楚等の大國は、往々漢室の命を輕んずるの勢あるのみならず、山東の諸侯叛するものありしかば、朝廷亦漸く自ら備ふるの計を爲すに至れり。賈誼は治安策一篇を上りて、切に諸王抑損の急を說きしかば、文帝之に從ひ、齊王

死して嗣なきに乗じ齊を分ちて六國となせり。

四十四　吳楚七國の亂

齊は六國に分たれて往日の勢なしと雖も、吳は夙に江南に據りて天下の亡命者を集め、擅に銅を掘り鹽を製して國益〻富み、屢〻漢の命を奉ぜず。楚も亦甚だ驕横なり。景帝位に即くに及んで、鼂錯（テウソ）の言を用ゐ、諸王の罪ある毎に、託してその封地を削れり。吳を削るに及びて、遂に事を以て景帝に快からざりし吳王濞は、先づ兵を擧げて叛し、山東の四王及燕趙亦之れに應ず。而して此同盟軍は北は匈奴と連り、南は東甌と結びしかば、その勝敗は直に漢室の存亡を決すべく、關中大に震駭せり。景帝乃ち先帝の遺言を守り、周勃の子、周亞夫を大將軍に拜して七國征討の軍を擧ぐしむ。亞夫洛陽に至り、間道より敵の糧道を絶ち、吳楚の兵飢えて退くに乘じて大に之を破り、遂に全く平定の功を奏せり。時に皇紀五百七年、之を吳楚七國の亂といふ。

四十五　主父偃の推恩令

七國の亂平定の後、景帝專ら諸侯の抑壓に心を用ゐ、その封地を小にし、その官制を改めたるのみならず、武帝位に即くの初も亦常に意を此に致し、主父偃の策を用ゐて、推恩の令を下し、諸侯のその子弟に封邑を分つを許しゝかば、天下は多くの小王侯の割據となり、漢室の患漸く滅ずるに至れり。

四十六　漢の武帝の事蹟

武帝は皇紀五百二十一年（紀元前一四〇年）位に即き、董仲舒の言を用ゐて儒教を以て國家政教の本となし、大に學術を奬勵せり。帝又高祖以來匈奴の北邊に寇するを惡み、國庫の豊なるに乘じて之を伐たんとし頻年外征の軍を起し、匈奴を降し西域と通し、南越を定め古朝鮮を亡ぼし、その版圖の大、漢初に倍するに至れり。然れども頻年の外征に加ふるに、帝は神仙を好み封禪を行ひ、樓臺を起しいかば、帝の晩年に至り府庫匱乏して財政の困難甚しきに至れり。帝之を救はんとして酷吏に任じ賦斂を重くし百姓の膏血を絞りしかば、盜賊所在に起り又如何ともすべからざるの狀ありしが、帝は先非を悔い詔を下

して天下に謝せしかば、天下又安かりき。

四十七　武帝の學術奨勵

武帝即位の初、董仲舒の言に聽き、儒學を貴び禮樂を興して、大に文教の發達を計る。高祖の時、叔孫通博士となり、文景二帝の際學術漸く行はれしも、當時の學概ね雜駁にして、老莊名法の學專ら流行せり。武帝に至て、孔子を推尊し、天下の學者をして一に其教に習はしめ、五經博士を置き大學を建て大に儒學を奬勵せり。是れより、儒學は永く支那政教の基礎となれり。されば當時文學の士輩出し、司馬遷、董仲舒は文章を以て著はれ、司馬相如、牧皐、東方朔の徒は詞賦を以て其名高し。その他地方の諸王には淮南王安、河間王德あり、共に學を好みて當代文學の隆盛を助けたり。

四十八　注意すべき事項

(イ)賈誼。西漢高祖の時の文臣にして、「新語」を著して高祖に治世の方針を說きたる人なり。

(ロ)陳平。漢の高祖創業の際には頻りに反間を放ち賄賂を送るの策を立て異姓の諸王を除き、惠帝の時左丞相となり、呂氏の亂を平げ、文帝にも仕へて大に天下の治を圖れり。

(ハ)周勃。惠帝の時大尉となり、呂氏の亂平定には最功ありしかば文帝即位の初は右丞相として陳平と共に政を執れり。

(ニ)司馬遷。西漢の武帝の時の人にして、父に繼で大史となり、「史記」を撰せり。

(ホ)董仲舒。西漢第一の大儒にして、殊に「春秋」に通曉す。武帝に仕へて學術を起せり。

(ヘ)張釋之。西漢の文帝に仕へたる廷尉にして、法を行ふこと頗る謹嚴なりしを以て有名なり。

(ト)賈誼。西漢の文帝の時、梁の大傅となり、治安策を上りて、時弊を痛論せり

(チ)周亞夫。西漢の文帝に仕へ、匈奴を伐ちて功を建て、殊に七國の亂には、三十六將軍として之を平定せり。

(リ)寵錯。西漢の文帝景帝に歷仕し呉楚以下諸侯の削るべきを主張せしかば、七國亂を作すや、寵錯を斬るを以て名とし、景帝も亦人言を信じて之を殺し、後周亞夫を命せり。

(ヌ)均輸の法。西漢武帝が晩年に財政の困難を救はんために設けたる方法の一にして、その法は、遠國をして其地の多く產する所を以て賦となさしめ、而して官は之を其乏しき所に賣るものにして即ち商賈の利を奪へるなり。

第五　西漢と外國との關係

四十九　武帝の外國征伐

武帝の偉功は、文學上に於てよりも、寧ろその外國經略の點に於て見るべきなり。蓋し文帝の儉によりて國庫の充實を全うし、景帝の苦心によりて諸王侯の抑損を遂げたる武帝は、當に大に爲すことあるを得べき地位にあり、而して帝性豪邁にして功名心に富みしかば、名將衛青、霍去病等に任じて頻年兵を邊境に出し、終に東は朝鮮より西は天山南路に至り、北は內蒙古より南は南嶺以外の地に至るの間前後漢の版圖となり、疆域の大、漢初に倍するに至れり。今左に其大略を述べん。

(一)武帝南越地方を平ぐ

秦の始皇天下を統一するや今の兩廣安南の地を略し南海、桂林、象郡を置く、漢楚の際、南海郡の尉趙佗なるもの他の二郡を合せ自立して南越王と稱す、然れども漢の高祖以來專ら招撫を努めて敢て之を討たざりしが武帝の時に至りて、その北、福建の地に據れる閩越（ビン）、勢盛にして兵を之に加ふるに及んで、南越王救を漢に乞ひしかば、武帝兵を發して閩越を伐ち後南越の內亂あるに乘じて遂に之を滅ぼし、初めて江南海に至るの地を平定せり。時に皇紀五百五十一年（110B.C.）也。是れより先、帝は唐蒙を遣はして蜀の南、夜郎國を說きて內屬せしめ張騫をして滇（テン）國に往きて漢に通ぜしむ、是に於て四川雲南

の地も亦其の化を被むるに至れり。

(二)武帝古朝鮮を滅ぼす

古の朝鮮は今の遼河と大同江との間の地なり。殷亡ぶるや其王族箕子は五千人を率ゐて朝鮮に往き、遂にその地の王に封ぜられ、子孫相嗣ぎしが、西漢の初、燕人衛滿その王を襲うて自ら代れり。滿の孫右渠に至りて漢の命を奉せず、却て武帝の使者を殺しかば、帝は諸將をして海陸兩路より進みて之を征せしむ、幾くもなくして右渠は叛者の爲めに殺され國遂に亡ぶ。帝乃ち眞番、樂浪、臨屯、玄菟の四郡を置いて歸る、時に皇紀五百五十三年(108B.C.)なり。

(三)武帝始めて西域との交通を開く

西域とは葱嶺の東西兩部の地に割據せる大小數十國の總稱にして、葱嶺以東即今の新疆には、烏孫(伊犂地方)、車師(吐魯番)、龜茲(庫車)、疏勒(喀什噶爾)、于寘(和闐)等殊に著名なるものにして、葱嶺以西即ち今の中央亞細亞地方には、大宛(フエルガナ)、康居(ギルヤス)、大月氏(アム河岸)、大夏(大月氏の內)、安息(ペルシヤの一部カ)、身毒(印度)等最も大なり。武帝は匈奴を伐たんと欲し、張騫をして往て嶺西の大月氏に同盟の利を說かしめしに、大月氏は無事に狃れ戰を好まざりしかば、その策遂に成らざりしも、張騫歸國の後、その通過せる西域諸國の情況を復奏し帝も亦之に通ぜんと欲し、更に騫を遣はしかば、之れより漢と西域との交通益盛なるに至れり。而して當時嶺西諸國には、希臘羅馬の文明已に傳はり存せしを以て、此西域との交通は實に世界史上重要なる事件といふべし。

(四)武帝匈奴を征す

高祖一たび匈奴と戰て敗れしより、漢室偏へに和親を主としたりしかば、匈奴は益中國を輕侮し、其單于冒頓、老上等頻年北邊に寇し、次第に疆土を廣め、東は朝鮮より西は圖伯特の間に跨り、西域諸國も亦概ね之れに服せり。武帝の時、匈奴の軍臣單于頻りに漢に寇す。是に於て帝は漢室積年の患を除かんとし、名將衞青、霍去病に命じ大軍を率ゐて匈奴を伐たしむ。去病等之を破り進んで天山の麓に至り、悉く之を漠北に逐ふ。後張騫の獻策に從ひ烏孫と

結びて匈奴を牽制し、又屢〻西域諸國を伐ちて漢威を張りしかば、匈奴の勢益〻衰微せり。

五十　武帝外征の結果

武帝の外征は、(一)外に向て漢威を張り、東西交通の端を啓きて、文化の上に至大なる影響を及ぼしたれども、(二)外征の費頗る大なるが上に、内は土木を起し封禪を事としたるを以て、文帝以來蓄積したる府庫は全く之が爲めに空しく、遂に國用足らざるに至れり。(三)帝は之を補はんとして酷吏に任じて官爵を賣り、官業を起して民の利を奪ひしかば、百姓益〻疲弊し、盜賊所在に起りて制すべからず。晩年帝は先非を悔ゆるの詔を發して天下に謝し、外征を止め賦斂を輕くして、專ら民力の休養を計れり。

五十一　匈奴歸順

皇紀五百九十年、漢將陳湯等烏孫を救うて大に匈奴の軍を破りし後、匈奴に内訌起り、日逐王終に其衆を率ゐて漢に降りしより、匈奴の西邊全く漢の版圖に歸せり。其後内亂絶えず、呼韓邪單于はその兄郅支單于と爭ひて敗れ、漢に降り、郅支は康居に據て頗る強大なりしが、陳湯等西域諸國の兵を發し襲うて之を殺せり。是に於て呼韓邪入朝して漢の恩を謝し、且つ婚を乞ふ。元帝之を許し宮女王昭君を與ふ。匈奴是より世々漢の甥と稱し臣禮を執るに至れり。

五十二　宣帝の治

宣帝は久しく民間に在り、具さに下情に通ずるを以て、親ら政を執るに及んでは、(一)專ら意を地方の治に用ゐしかば趙廣漢、朱邑、龔遂、尹翁歸、韓延壽等の良吏相次で出で、魏相、丙吉、黃霸、于定國の賢良皆地方官より拔擢せられて一國の宰相たり。(二)帝又外夷の鎭壓に心を用ひ、青海地方の諸羌族を服し、匈奴を破りて西域を招撫す。實に漢室中興の英主たり。

五十三　注意すべき事項

(イ)古鮮の興亡(四十頁ヲ見ヨ)

(ロ)三韓。三韓とは馬韓、弁韓、辰韓をいふ。西漢武帝の古朝鮮を滅ぼせし頃(紀元前一〇八年)、今の朝鮮半島の南部に起れる三大部落にして、弁韓は今の慶尚道の西南部、辰韓はその東北部を有し、馬韓は半島の東南一帯の地に據り最も強大なり。當時支那三韓の交通漸く盛となり、從て我國人にして支那に通するものあるに至れり。

(ハ)張騫。匈奴征伐の時、大月氏と同盟を結ばんが爲め、西漢の武帝の命を受け西域に使し、遂に漢と西域との交通の端緒を啓ける人なり。

(ニ)單于。單于とは匈奴部族の大酋長の稱にして、なほ王といひ帝といふが如し。冒頓單于、老上單于など有名なり。

(ホ)衛青、霍去病。共に西漢武帝の時屢匈奴を伐つて大功ありし名將なり。

(ヘ)霍光。霍光は昭帝を輔けて、政平かに治まり百姓皆堵に安んせり。時に上官桀等霍光の勢威を嫉み之を除かんと謀りしが、昭帝賢にして惑はされず、却て桀等を誅せり。帝死して霍光宣帝を立つ。

(ト)鄭吉。西漢の昭帝宣帝の間、西域を征せる諸將の中にも、鄭吉の功最も著大なりしかば、宣帝の時、遂に西域都護に任じ(紀元前六一年)、烏壘城(天山南路の策特爾)に治して西域を總轄す。

(チ)西漢宣帝の時の名臣。武將には鄭吉、張安世あり、文臣には名士甚だ多く、宰相としては、魏相、丙吉、黃霸、于定國あり、地方官としては、龔遂、趙廣漢、尹翁歸、韓延壽あり。

第六　漢室の衰運

五十四　宦者の專横

初め武帝内寵に耽りて宦者を寵幸し、漸く宦者の政に預るの例を啓きしかば、宣帝死して元帝立つに及んでは、外戚史高と結びて帝の優柔なるに乘じて、宦者石顯、弘恭等は、帝の傅蕭望之、周堪を除き、專ら朝權を弄せり。是に於て漢室漸く衰運に向ふ。

五十五　外戚の跋扈

元帝死して成帝立ち、母王氏を尊びて皇太后とし、太后の弟王鳳を大司馬將軍に任じ、石顯及其與黨を黜けしかば、宦官の憂絕えたりといへども、外戚之に代りて政柄を弄し、遂に漢室衰亡の端を開けり。王鳳その弟五人を列侯に封じ、王鳳死して王音、王商、王根相繼ぎて大司馬となり、王氏の威權上下を傾くるに至れり。

五十六　王莽の簒立

皇紀六百五十三年大司馬王根職をその姪新都侯王莽に讓る。王莽奸才あり、力めて勤儉を粧ひ己を卑うして人に下りしかば、聲名日に盛なり。平帝立つに及んで其女を納れて皇后とし、自ら宰衡と稱して諸侯王の上に居る而も朝政を行ふに當りては、一に周制に倣ひしかば、天下の學者書を上りて其德を頌する者四十八萬人に及べりといふ。莽遂に平帝を毒殺し、宣帝の玄孫嬰を迎へて皇太子とし、號して孺子といひ、遂に自ら假皇帝と稱す。此時に當り漢の諸侯は封地小に力微弱なりしかば、奮て王氏を討たんとするものなし、されば政を攝すること三年の後、莽遂に皇帝の位を簒し、漢室に代つて天下に君臨し、國を新と號す。時に皇紀六百六十八年（8 A.D.）にして、漢高祖即位より此に至る迄十一世二百九年なり。

五十七　王莽敗亡の顚末

王莽已に簒立し、悉く漢の遺制を破りて新政を布きしが、法令繁にして民の罰せらるゝもの甚だ多く、加ふるに外は匈奴を征して克たず、却てその怨を買ひ、邊寇絕ゆることなかりしかば、稅斂益重く百姓困弊して、所在盜起り天下又漢室を思ふに至れり。是に於て由東の樊崇先づ兵を起して赤眉の兵と稱し、湖北の王匡次で起りて綠林の兵と號す。既にして、漢の宗室劉縯、その弟劉秀と兵を春陵（湖北省棗陽府）に起して、綠林の兵と合し、湖北悉く王莽に叛く、その衆已に十餘萬諸將乃ち劉玄を推して帝となす。玄は縯と同族なり。王莽大軍を發して之を伐たしむ、劉秀僅に數千の兵を以て皇紀六百八十三年（23 A.D.）

大に莽の兵を昆陽(河南葉縣)に破る。是に於て海内の豪傑響の如くに應じ、劉秀の威望一時に熾なり。劉玄の兵益進んで三ヶ月の間にして洛陽を陷れ長安を攻めて、遂に王莽を斬る。莽帝と稱すること十五年にして亡ぶ。劉玄乃ち洛陽に入りて都し尋いで、長安に遷る。

五十八　劉秀の即位　漢室の復興

劉秀既に昆陽に勝ち長安また陷るの後、王郎を伐ち、銅馬の諸賊を平げ、又南河内を下すや已にして赤眉の賊長安を犯して帝を逐ひしかば、秀は鄧禹、馮異等を將として長安に入り賊を討じ、諸將の勸めにより劉秀遂に帝位に即き、都を洛陽に奠む。之を光武皇帝といふ。實に皇紀六百八十五年(25A.D.)秀の兵を擧げてより此に至るまで四年にして、天下又漢に歸す。洛陽は長安の東に在るを以て史家之を東漢と稱す。

五十九　光武帝の政治

帝即位の初、群雄の一方に割據するもの多く、公孫述は蜀に、隗囂は隴西に、竇融は河西に、各その附近一帶の地を領して漢命を拒む。帝吳漢、耿弇等の諸將に命じて之を征服し、又屢親征の軍を出し、數年にして海内復漢命に抗するものなく、匈奴も亦和親を求めて天下太平なり。光武の天下を一統せる後、力めて兵を用ゐず、專ら内治に勵み、愚く王莽の諸制を廢し、大學を起して學術を奬め、禮樂を修め、又處士周黨、嚴光等を優待して前代阿諛の風を矯め、天下の士をして氣節の尚ぶべきを知らしめたり、帝在位三十三年にして死す。

六十　注意すべき事項

(イ)新。王莽漢室を簒ひて國を新と號せり。

(ロ)昆陽の戰。皇紀六百八十三年(23A.D.)新の王莽東方の大亂を聞き、王尋、王邑をして四十餘萬の大兵を將ゐて之を征せしむ。漢の諸將恐れて昆陽に走る。其兵僅かに八九千のみ。新軍之を圍むこと急なり。劉秀窃に昆陽を脫し、兵を集めて自から先鋒となり、決死の士三千を縱ちてその中堅をつき遂に將王尋を殺す。城中の兵も亦鼓噪し出でゝ戰ふ。會々大雷雨俄に來り

しかば、敵兵潰敗し、淮川に溺れしもの萬を以て數へりといふ。是より劉秀の聲名天下に轟き、海内の豪傑風を望んで來り應ずる。王莽の滅亡漢室の再興擧げて此一戰に決せりといふべきなり。

(八) 東漢創業の功臣。鄧禹馮異(大樹將軍)、吳漢の三將は其重なるものなり。

第七　印度の古史

六十一　印度の開國

今より大凡四千年前中央亞細亞に住せるアリアン人種の一派は、漸く南下して信度河(インダス河)を渡り、今のパンジャブ地方に移住せり。當時幾多の部落はそれ〴〵酋長ありて、人民を率ゐて敵を防ぎ、祭祀を行ひ、農を事とし、人民の間には何等の種姓もなかりしが、人口繁殖して更に東方恒河(ガンヂス)沿岸に移住するに及びて、因襲の久しき、職業及人種の異に本づきたる四等の種姓別を生ずるに至れり。

六十二　太古印度の族制

所謂四姓とは左の如し

第一	波羅門(ブラーフマン)	僧族　祭祀を司る
第二	刹帝利(クシャトリヤ)	王族　武事を司る
第三	吠舍(ヴァイシャ)	平民　實業に從事す
第四	首陀(シュードラ)	奴隷　賤役に就く　非アリアン人種(被征服者即チ土民)

(アリアン人種(征服者))

六十三　摩奴(マヌ)の法典とその影響

波羅門は祭祀を司るのみならず、又アリアン人種傳來の經典吠陀(ベダ)を研究するを世業とし、所謂波羅門哲學を有す。然れども後にはその祖先以來、最も崇拜せる造化神たる梵天に附會して自己の種姓を神聖にせんと欲し、遂に「摩奴の法典」を定め專橫恣に限りなく、自餘の種姓を抑壓すること頗る苛酷なりしかば、刹帝利種の民先づ起て之に抗し、波羅門種にもその族の腐敗を憤るものあるに至れり。

六十四　釋迦牟尼と佛教の興起

釋迦牟尼は、皇紀百〇二年(559B.C.)頃中印度の迦比羅城(今のゴルク附近)に生れ、支那の孔老二子と殆んど時を同うす。夙に厭世の念を懐き、二十九歳の時、帝王の尊と妻子の愛とを棄て、城を逃れ山に入り、備さに苦行を經て、遂に解脱し、山を出でゝ新教を説き、波羅門に反對して四姓の別を破り、一切人類の平等を唱へ、能く物慾を離れて俗累を絶たば、何人も未來に於て皆均しく幸福を享くべしとの説を唱道せり。これ實に佛教々義の根本也。釋迦牟尼は凡八十歳を以て寂す。

六十五　結集及佛教の盛運

釋迦入寂の年、その高弟摩訶迦葉は佛弟子五百人を王舍城(パトナの東南)に會して、第一回の結集を爲し、その後、耶舍陀も亦佛徒七百人を毘舍離(パトナの東北)に會して、第二回の結集を爲す。結集とは釋迦の遺せる説教そのまゝを存せんがために、會する所の佛弟子をして各その暗記せる所を陳べしめ、その純粋なるものを拔き集むるの謂なり。然れども當時印度に文字なかりしかば、此二回の結集は共に暗記の誤を正して之を後に傳へしに過ぎざるなり。この結集ありしより、從來波羅門の屈辱を蒙むれる諸姓の民は、皆競うて佛家に歸依せしかば、佛教の盛運年と共に加はりしも、釋迦滅後二百年の間は、その勢力は猶ほ恒河流域の外に出でざりき。

六十六　ダリヤス及亞歷山の侵入

釋迦在世の頃、波斯の王サイラス Cyrus 四方を征服して一大帝國を建て、その子ダリヤス Darius 王、父の雄志を繼ぎて益〻その版圖を廣め、兵を南に進めて印度の西邊を侵せり。その後ほゞ二百年を經て、マセドニヤ Macedonia 王亞歷山 Alexander は世界征服の雄圖を抱きて、波斯を亡ぼしたる後、印度に進み、西印度を定め、北印度のポーラス Porus 王を破り、將に中印度に入らんとせしも、炎暑甚しく兵士進むを好まざりしかば、志を果さずして西に歸り、皇紀三百三十八年巴比倫 Babylon に歿す。蓋もなくして西部亞細亞は王の部將セリユー

クス Seleucus の有に歸す、シリヤの Syria 王國是也。

六十七　阿輸迦(阿育)王の佛教奬勵

皇紀四百年の頃阿輸迦(アショカ)王、摩揭陀(マカダ)國の王位を繼ぐ王深く佛教に歸依し、一千の僧侶を華子城(パタリプートラ)(今のパトナ)に會して、第三回の結集を爲し、(Cir. 250 B.C.)勅して佛教を國教と定め、布教僧を四方の外國へ派遣せり。是より佛教頓に隆盛となり、幾ならずして印度は大夏(バクトラ)より南は獅子國(錫蘭)に及び、時に遠く埃及シリヤに布教を試むるものあるに至れり。佛教は實に阿輸迦王の奬勵によりて、漸く世界に傳播せるものといふべし。

六十八　大月氏の盛衰

大月氏匈奴に逐はれて天山南路の故土を棄て、葱嶺を踰えて西大夏を亡ぼしアム河の岸に國を建つるや、大夏の餘衆南に走りてカブール地方に高附國を建て、塞種も罽賓に逃れて稍盛なり。既にして大月氏に丘就郤、閻膏珍二王相次で出で四方を征服し、高附、罽賓皆其併す所となり、大月氏の版圖は中

央亞細亞北西兩印度を包み、餘威葱嶺以東に及べり。殊に皇紀七百年代の初迦膩色迦(カニシカ)大王之に君臨するに及んでその都せるカシュミルは北方佛教の中心となり、國運頗る盛なり。その後三國以後、吐火羅(トカラ)、嚈噠(エフタル)等相次でその地に起り、大月氏次第に衰滅せり。

六十九　迦膩色迦(カニシカ)王と佛教

中印度の摩揭陀國は阿輸迦王の歿後殆んど百五十年を經て、南方より起れるアンドラ朝の爲めに亡ぼされ、波羅門教勢を復して佛教漸く衰へしかば佛徒の北に奔りて大月氏に投ずるもの頗る多く、北印度罽賓(カシミル)の地は今や佛教の中心となれり。皇紀七百二十年(60 A.D.)の頃、迦膩色迦王その國に君臨するに及んで、玉も亦深く佛教を信じ、五百の僧を罽賓の都に會して第四回の結集をなし、益々佛教の隆盛を致せり。

七十　佛教支那に入る

西漢武帝以來、世々西域諸國と交通せるが故に、時に佛教を傳ふるものあり

しも、未だその勢の微々たるを免れざりしが、東漢の明帝その説を聽かんと欲し、迦膩色迦王の時、蔡愔等を大月氏に遣はせり。蔡愔その地に至り佛經佛像を得、二高僧を伴ひて歸り越えて二年、白馬寺を洛陽に建てたり。是れ支那に於ける佛寺建立の始にして、時に皇紀七百二十九年(69 A.D.)釋迦滅後凡そ五百五十年なり。是より後、漢の西域經略は漸く功を奏し、東西交通益〻頻繁なるに及んで、外國僧の支那に來りて譯經に從事するもの多かりしかば、東漢の末に至りてぼゝ其の盛運を示し、南北朝隋唐の際に及んで其の隆盛を極めたり。

七十一　注意すべき事項

(イ)王舍城(ラージャガハ)。王舍城は、釋迦の滅後、高弟大迦葉が佛弟子五百人を會して第一回の結集をなしたる處なり。今のパトナの東南に當る。

(ロ)華子城(パータリプトラ)。華子城は阿輸迦大王の都城にして、大王が一千の僧を會して第三回の結集を爲したる處なり。今の恒河(ガンジス)に沿へるパトナ。

(ハ)蔡愔。蔡愔は東漢の明帝の命を奉じて、大月氏國に至り、迦膩色迦王に逢ひ、僧侶經像等を携へて、來り歸れる人なり。支那に佛教の公然傳はりたるは之を始とす(皇紀七百十七年)

(ニ)白馬寺。後漢の明帝の時(68 A.D.)洛陽に建立せられたる支那に於ける最初の佛寺なり。

第八　東漢の末運

七十二　東漢滅亡の原因

(一)外戚の驕橫

光武帝死して明帝章帝の間天下能く治まれり。然るに和帝年僅に十歲にして位に即くや、竇太后政を聽き、その兄竇憲朝權を專らにし、遂に逆謀ありしかば、宦者鄭衆は帝を扶けて竇氏の黨を除く、安帝また幼にして即位し、外戚鄧氏、政を執り、帝死するや外戚閻氏、少帝を迎へ立てゝまた大權を擅にす、既

にして閻氏は宦者の爲めに斥けられ順帝立つに及んで、皇后の兄梁冀威福を弄し、質帝を毒殺して桓帝を立てしが、帝漸く梁冀の專横を憎み、宦者と謀りて悉く梁氏を誅す。是より宦者の勢朝廷を傾け外戚に代りて益〻專横なり。

(二)宦者の勢權

漢は秦の制に倣ひ宦者をして君命を出納せしむ。和帝の時母后朝に臨みてより内外の傳達一にその手を經しかば、宦者の權始めて重し。當時宦者鄭衆帝を扶けて外戚竇氏を亡ぼし、功を以て大長秋となり、後の諸帝の外戚の專横を制するもの亦必ず宦者の力を借りしかば、その勢權愈〻加はり、桓帝宦者單超等と謀りて梁氏の族を誅するに及んでは、宦者にして列侯となるもの五人、天下の大權悉く宦者に歸し、僭横至らざるなし。是より天下漸く亂れんとす。

七十三　黨錮の顚末

光武名節を奬めてより志士競うてこれに赴き、遂に一代の風尚となり、漢末の專横を憤慨し、大學の學生三萬餘人亦之に應じ、盛に國政を誹議し朝臣を褒貶し益〻反抗の氣運を高む。宦者之を黨人と稱し、桓帝に誣告して悉く之を捕へ其終身を禁錮す、之を黨錮の變といふ。實に皇紀八百二十七年（167 A.D.）なり。桓帝死して靈帝立つに及んで、大將軍竇武、李膺、陳蕃等を引きて朝廷に立ち、謀て宦者を除かんとす、偶〻議泄れしかば宦者は誣ゆるに大逆を以てし、陳蕃以下名士百餘人を殺す、その他坐して罪せらるゝもの六七百人、宦者の暴政是より益〻甚し。

七十四　匈奴の衰微と其の西遷

呼韓邪單于西漢に内附してより、匈奴は久しく邊に寇せざりしが、王莽自立するに及んで、四近の諸族を誘うて絶えず北邊に寇す。光武天下を有して武を偃せ内治に專にせしかば、匈奴益〻漢を輕侮せり。其後匈奴は南北に分れ、南匈奴は降りて黄河の南に住せしかど、北匈奴は未だ漢に從はず明帝の時西に至て極る。故に宦者上に政權を擅にするや、名士陳蕃、李膺等先づ起て宦者の專横を憤慨し、大學の學生三萬餘人亦之に應じ、盛に國政を誹議し朝臣を褒貶し益〻反抗の氣運を高む。宦者之を黨人と稱し、桓帝に誣告して悉く之を捕へ其終身を禁錮す、之を黨錮の變といふ。實に皇紀八百二十七年（167 A.D.）なり。桓帝死して靈帝立つに及んで、大將軍竇武、李膺、陳蕃等を引きて朝廷に立ち、謀て宦者を除かんとす、偶〻議泄れしかば宦者は誣ゆるに大逆を以てし、陳蕃以下名士百餘人を殺す、その他坐して罪せらるゝもの六七百人、宦者の暴政是より益〻甚し。

七十四　匈奴の衰微と其の西遷

呼韓邪單于西漢に内附してより、匈奴は久しく邊に寇せざりしが、王莽自立するに及んで、四近の諸族を誘うて絶えず北邊に寇す。光武天下を有して武を偃せ内治に專にせしかば、匈奴益〻漢を輕侮せり。其後匈奴は南北に分れ、南匈奴は降りて黄河の南に住せしかど、北匈奴は未だ漢に從はず明帝の時西

域諸國を服して勢益大なり。是に於て明帝、竇固等に命じ大擧して北匈奴を征せしめ、更に西域に通じて遂にその諸國を威服せしかば、北匈奴の勢頓に衰へ、和帝の時、竇憲之を外蒙古に討つて大にその衆を破るや、單于は遂にその餘衆と共に遠く西方裏海の邊に遁れ去れり。是に於て鮮卑(東胡の餘裔)東より徙りて北匈奴の故地に據る。

七十五　鮮卑の興廢

東胡一たび匈奴の冒頓(ボツトツ)單于に破られて東に走りしより、分れて烏桓、鮮卑の二部となる。漢の武帝の頃、烏桓漸く強大なりしが、三國の時、魏の曹操に破られ遂に亡ぶ。鮮卑は東漢の初、南北匈奴の爭に乘じて、匈奴の地を略し、頓に強大となり、桓帝の時、その大人檀石槐は、內蒙古に據り、東は扶餘(フヨ)を滿洲に破り、西は烏孫(ウソン)を伊犂に討ち、北は外蒙古の北なる丁零(テンリン)を防ぎ、北匈奴の西走するに及んで悉く其地を奄有し、版圖頗る大なりしが、檀石槐の死と共にその國分裂す。その後四十年、部酋慕護跋、魏を助くるの功を以て王に封せられ、慕容氏と稱し、鮮卑復た興る。

七十六　班超の西域を征服せる始末

光武は事を外に構ふるを欲せず、西域諸國內附の請を斥けしかば、皆北匈奴に降りて北匈奴の勢獨り盛なり、明帝の時、班超、命を奉じて西域に赴き先づ于寘(ウテン)(和闐)疏勒(ソロク)(カシュガル)の二國を降し、明帝の死後、上書して更に西域鎭定の命を請ひ、遂に其地の兵を發し龜茲(キウシエン)、焉耆(ヱンキ)の二國を討平し、又烏孫を招き大月氏を破る。是に於て西域五十餘國皆漢に內屬す。皇紀七百年代の中頃、和帝は復西域都護府を龜茲に置き班超を以て之に任ず。時に、羅馬帝國は年々其版圖を東に擴めしかば、班超之に通せんとして、部將甘英を大秦に遣りしも、安息の爲めに妨げられて果さゞりき、大秦は羅馬の東方領土の支那名なり。超死して西域復た叛す。

七十七　西域征服の結果

漢の威令一時西域に行はれし、結果は、重要なる二大事件を生せり、一は佛教

の東漸にして、一は海上の交通なり。前者は已に說けるを以て之を略し、茲には海上の交通に就て述ぶべし。抑〻支那の絹布は夙に波斯印度に販賣せられしが、亞歷山（アレキサンドリア）の東征以來更に歐洲に傳はれり。然れどもその間諸國民の手を經るが故に、價頗る不廉なりしも、東漢の桓帝の時、羅馬王安敦（アントニアス）(Antonius)の使者と稱する者、日南（交趾支那）を經て、東漢に通せしより、爾後三國の頃に至る迄大秦の商人等今の東京地方に來りて貿易に從事するもの益〻多きに至れり。

七十八　注意すべき事項

(イ) 班固。班固は西域征討に大功ありし班超の兄にして、東漢の明帝の時、漢書を作りし大學者なり。漢書は史記に比すれば、事實精確、文章また溫醇にして、遙によく歷史の體裁を爲す。故に歷代の正史は皆範を漢書に取る。因にいふ、漢書未だ完からざるに班固死せしかば其妹班昭（またの名曹大家）は和帝の勅を奉じて之を大成せり。

(ロ) 鄭衆。東漢和帝の時の宦者にして、帝と謀りて外戚竇憲を誅しその一族を除き、功を以て大長秋となり、宦者專權の端を開く。

(ハ) 隙養、李膺。共に東漢の桓帝靈帝の際、宦者の專橫、朝政の紛亂を憤りて誹議痛論したるを以て、當路者より黨人と目せられ、その徒と共に禁錮せらる。世に之を黨錮の變といふ。

(ニ) 東漢の世、西域征服の二大結果。一は佛敎の東漸を促したること。（五十六、六十一、六十二頁參看）一は海路の交通を開きたること。

(ホ) 鄭玄。東漢の末年に出で、兩漢第一の大儒にして、經學殊に訓詁の學を集めて大成したる人なり。その說永く經學者の間に遵奉せらる。

第九　三國の世

七十九　東漢の末群雄割據の原因

宦者朝權を擅にし、名士禁錮せられて、人心恟々たるの時に當り、張角なるもの妖術により徒衆數十萬を集め亂を山東に起す。その徒皆黃巾を着く、故に

黄巾の賊といふ(八百四十四年)。朝廷、皇甫嵩を遣はし之を伐たしむ、曹操、劉備等亦兵を以て之に從ふ。張角死しその二弟遂に嵩の爲めに殺されしも、其殘黨尙四方に出沒して、十年の間、その患絶えず。朝廷乃ち重臣を出して、地方に赴きその鎭撫に從事せしむ、是より、朝權次第に地方に移り、遂に群雄割據の基を開けり。

八十　董卓の暴横

董卓兵を擁して洛陽に來り辨を廢し、その弟獻帝を立て政を專らにす。關東の諸將袁紹を推して盟主となし董卓を討つ、卓帝に迫りて都を長安に遷し益兇暴なりしかば、王允なる者卓の臣呂布を誘うて之を殺す。之より關中大に亂れ、獻帝逃れて洛陽に歸る。

八十一　關東に割據せる群雄

獻帝西に遷るや、關東麻の如く亂れ、諸將日に併呑を事とす。其重なるもの左の如し。

(イ)袁紹 山西 直隸 劉表 湖北　(ロ)袁術 河南安徽 公孫瓚 直隸 孫堅 湖南　(ハ)曹操 山東

(イ)(ロ)相爭ひ、(ハ)の曹操獨り其間に介在して窃に機の來るを俟つ。

八十二　曹操の勢頓に大となりし所以

袁紹は劉表と結び、袁術は公孫瓚、孫堅と力を併せて相爭ふ。曹操獨り山東に據りて雄飛の機を伺ひしが、獻帝東に歸るに及んで之を許(河南省許州)に迎へ、遂に詔を受けて司空に任ず。是より操、天子を擁して天下に臨む。これその勢權頓に群雄の上に出でし所以也。

八十三　曹操の勢威

曹操既に天子を擁して辭を征討に託し、先づ袁術を攻め之を滅ぼして河南の地を略し、ついで、袁紹を官渡(河南省開封府)に破りて直隸山西の地を定め、更に北邊の烏桓を破り、遼東の公孫康を降し、悉く河の南北を領す。操勢に乘じ兵を南して湖北の劉表を討ちしが、表死して子劉琮遂に操の軍に降る、既にして操丞相に任じ、その勢威天下に振ふ。

八十四　劉備孫權の同盟と曹操の大敗

劉備は黄巾の賊を討ちて功を立てしも、屢〻志を得ずして一たび曹操に從ひしが、操の逆心あるを察して之を誅せんと謀り、事成らずして、走りて袁紹に依り、後、劉表に投じ湖北の襄陽に在り。襄陽陷るに及びて名將諸葛亮(孔明)の勸めに從ひ、江東に赴きて孫權と同盟して操に當らんとす。孫權は孫堅の子なり。堅敗死するの後、兄孫策と共に袁術に依り、術敗るゝに及んで遂に江東に據る。既にして策死し、權固守して北上せざりしが、此に至りて劉備と兵を合せ、皇紀八百六十八年(208 A.D.)大に曹操を赤壁に破る。河南の地概ね孫權に歸す。

八十五　東漢の滅亡　魏の簒立

曹操江北を領し、孫權江南に據り、劉備は巴蜀を保つに及んでは、天下の群雄悉く亡びて唯此三雄を殘すのみ。此時に當りて獻帝猶位に在るといへども固より名あるのみ。曹操死して、その子丕嗣ぐに及んで、遂に、帝に迫りて位を讓らしむ。之を魏の文帝といふ。時に皇紀八百八十年(220 A.D.)光武の興復より是に至るまで百九十六年にして東漢亡ぶ。

八十六　三國の鼎立

曹丕位に即きて國を魏と號し洛陽に都するや、劉備も亦成都(四川省成都府)に帝位に即く。即ち昭烈帝なり。帝は漢の裔たるを以て國を蜀漢と號す。後九年を經て孫權も亦帝位に建業(江蘇省江寧府)に即き國を吳と號す。之を吳の大帝といふ。是に於て、三國鼎立の勢成る。

八十七　關羽　吳蜀の爭

初め劉備の進みて漢中に入るや關羽は江陵より出でゝ襄陽を陷れ、許より以南羽に應ずるもの甚だ多し。曹操大に恐れ許を遷れんとす。操其謀臣司馬懿の策を用ゐ孫權に說き、其後を襲はしむ。羽腹背敵を受け遂に吳軍の爲めに殺さる。劉備位に即くの後、羽の仇を報せんとし吳を伐つ、吳、魏に降りて之

を拒ぐ、兩軍相對すること累月の後、呉將陸遜連りに蜀の營を破り、昭烈帝僅に身を以て免れ、幾ならずして病を以て死す。

八十八　諸葛亮の忠誠

昭烈帝死し、太子帝禪嗣ぐ。諸葛亮(孔明)先帝の遺詔により、幼主を輔け忠誠を盡し、内農耕を勸め外呉と連和して共に魏に當り、日夜汲々として漢室興復の策をめぐらせり。皇紀八百八十八年(228 A. D.)出師表を上りて魏を伐つの兵を發し、祁山(甘肅省鞏昌府)を圍む、勢頗る盛んなりしが、蜀將馬稷(シヨク)、亮の命に違うて大敗す。爾後亮屢魏軍と戰うて志を得ず。八百九十四年(234 A. D.)兵十萬を出し魏將司馬懿と五丈原(陝西省鳳翔府)に相持す、懿固く守りて亮の挑戰に應せず、兩軍戰はざること百餘日、亮偶ゝ病を得て遂に軍中に歿せしかば、蜀軍空しく南に還る、是より蜀の勢頓に衰ふ。

八十九　三國の滅亡と晉の統一

諸葛亮死して蜀漸く衰へしかば、司馬昭、鄧艾(ガイ)等を遣して之を攻め遂に帝禪を降す(皇紀九百二十三年)。是に於て昭の威望益加はり爵を進めて晉王となる。昭死してその子、炎爵を嗣ぐや、遂に元帝に迫て位を禪らしむ。之を晉の武帝といふ。魏は曹丕、帝と稱してより五世四十五年にして亡ぶ。是より武帝徐ろに呉を圖り十五年の後遂に之を滅す。三國鼎立以來凡そ六十年にして天下遂に晉に歸す、時に皇紀九百四十年(280 A. D.)なり。

九十　注意すべき事項

(イ)赤壁の戰。　孫權江東に據りて漸く盛なり、曹操之を伐たんとす、諸葛亮劉備に說て孫權を助けしむ。時に操書を權に贈りて戰を挑む。呉の群臣恐れて色を失ふ。唯周瑜と魯蕭とのみ堅く之を拒がんことを請ふ。權因て周瑜をして兵三萬を督して備と共に操を赤壁(湖北省武昌府嘉魚縣)に拒がしむ、瑜の部將黃蓋僞り降りて操の軍に近き、火を發して敵船を燒く、瑜輕鋭の兵を率ゐて進み大に之を破り、操僅かに身を以て北に還る。是より孫權、江南の地を有し、劉備その西に據り、三强分立の勢成る。時に皇紀八百六十八年(208

A.D.)也。

(ロ)陸遜　三國呉の雄將なり。呉の魏と通じて關羽を襲ひ殺すや呉蜀の和破れ蜀帝來り攻む。陸遜は呉主孫權の命により、蜀軍を迎へ、敵の疲弊に乘じ火攻の計を以て蜀の四十餘營を連破す。蜀帝僅に身を以て逃る。

(ハ)司馬懿　司馬懿は三國魏の謀臣なり。曹操の許に苦むや謀を以て呉と通じて關羽を殺し、後諸葛亮の軍を率ゐ來りて五丈原に屯するや、懿敢て出でず亮遂に陣中に歿して蜀軍還る。魏の明帝死して後太子を輔け、曹爽を讒殺して自ら丞相となる。その孫司馬炎遂に魏に代て晉室を興す。

(ニ)五丈原　(七十七頁ヲ見ヨ)

(ホ)周瑜　三國呉の孫權に仕へ曹操の大軍を赤壁に敗りし名將なり。

(ヘ)魏の滅びし原因　初め魏の諸帝多くは剌薄にして骨肉に信任せず、帝室全く孤立の姿なりしかば、功臣司馬氏の簒奪を容易ならしめたり。

九十一　八王の亂の原因

武帝は魏が孤立して倒れたるに鑑み(一)即位の初大に子弟を要地に封じて帝室の藩屏となしが、後年に至りて反て諸王跋扈の患を生せり(二)加ふるに呉の江南に存する間は、武帝も意を政に用ゐしが、呉滅びて後は、漸く政に倦み内宴に耽り、(三)帝死して子惠帝、暗愚なりしかば、遂に大亂を釀せり。

九十二　八王の亂

惠帝立ちて暗愚なりしかば、汝南王亮專ら政を爲す。皇后賈氏、亮を除き代て朝に臨むや、趙王倫兵を擧げて皇后を斥け帝を廢して自立す。是より齊王冏、河間王顒、成都王穎、長沙王乂等互に相攻め、政權を爭ふこと十六年、東海王越、惠帝を奉じて位に復するに及んで亂始めて平く(皇紀九百六十六年)此間骨肉相殘害しで晉室の藩屏遂に空しきに至りぬ。

九十三　晉室東遷の由來

東漢氣節を貴ぶの風及西漢以來の訓詁の學は共に其反動を招き、晉初に至りては學者皆名敎氣節を賤み、時と浮沈し、ひたすら老莊の無爲恬淡を喜び、ついに當時の所謂清談（洛誦の反對にて空理を云ふ）の風大に行はれて皆世事を放擲し、また一人の國家を憂ふるものなし。加ふるに夷狄四方に起りて頻りに中國に侵入せしかば、皇紀九百七十七年、孤立の晉室は遂に夷狄の爲めに洛陽を取られ、瑯琊王睿江南の建康（前の建業）に立つに及んで晉の宗室以下の漢族概ね江南に徙る。建業は洛陽の東南に當れるを以て史家之を東晉といひ、以て洛陽の晉室と別つ。而して爾後三百年の間江北の地全く夷狄の占領に歸す。

九十四　夷狄侵入の由來

(一)兩漢以來、四方を征して疆域廣大となるに從ひ、夷狄の中國に來るもの次第に多く(二)三國騷亂の世を經て西晉の武帝の晩年に至るや、惡く州郡の武備を撤せしかば、夷狄の塞を越へて來り住するもの頓に加はり、忽ちにして驚くべき大數となれり。就中最も強大なる種族を匈奴、羯、鮮卑、氐、羌の五胡とす。

九十五　三國の世に於ける五胡の情況

匈奴及羯。東漢の初、南匈奴内附して塞内に居りしが、その戶口益〻繁殖し、西晉の初山西の地概ね匈奴の有たり。羯は匈奴の別種なり。

鮮卑。東漢の世、北匈奴の亡びし時、鮮卑は烏桓と共に東より徙りて其地を占領せしが、烏桓は後、曹操に征せられて衰へしも鮮卑は益〻強大となり、東は滿洲より西は河西に至る北邊一帶の地を領せり。

氐及羌。氐、羌共に西藏人種に屬す。羌はもと青海地方に居り、氐は四川に住みしが、東漢以來益〻東に徙り、三國を經て西晉の世に至りては氐、羌種の關中に在るもの殆んど漢人種と相半するに至れり。

九十六　匈奴の大單于中原に帝を稱す

晉室の東遷

晉に八王の大亂あるに際して、匈奴の大單于劉淵は左國城（山西省）に起り皇紀九百六十四年（304 A.D.）自立して漢王と號し、次で帝を稱し又都を平陽（山西省平陽府）に遷す。淵死して其子劉聰嗣き、劉曜、石勒等をして洛陽を攻めしむ、洛陽陷り、懷帝殺され、愍帝位に長安に即く、劉曜また之を圍み遂に帝を降す、此時、司馬懿の曾孫琅琊王睿（叡）建康を鎮す、愍帝亦賊手に斃ると聞き遂に帝位に即き、晉の大統を繼ぐ之を東晉の元帝といふ。

九十七　東晉の北征する能はざりし事情

東晉の元帝位に即くの初、王導をして政を執らしめ、其從弟王敦をして兵事を督せしむ、王敦遂に兵を擧げて叛し、官軍之を拒で敗る。帝憤死し、明帝立ち王導をして之を平定せしむ。成帝の時蘇峻叛して建康に迫りしが、名將陶侃の來援によりて僅かに鎮定するを得たり。東晉には此の如く叛亂頻りなり、しかば終に江北恢復の大業を爲す能はざりき。

九十八　桓溫の東征の事蹟

桓溫は英略倫を絕し文武の才幹あるの故を以て東晉の穆帝に選ばれて軍事を督し、江北回復を以て志とす、此時、成漢の主、李勢淫虐にして人心離叛せしかば、一擧して成都を陷れ、後、關中の紛亂に乘じて前秦王苻健を伐ちじが、克たず。轉じて、前燕王慕容皝を攻めしに皝の叔父、慕容垂のために大に枋頭（河南省懷慶府）に敗られ、威名頓に挫けり。乃ち建康に歸りて廢立を行ひ、後、帝位を簒はんとせしが王坦之、謝安等の爲めに妨げられ、志を遂げずして死せり。

九十九　苻堅の强盛及其の版圖

前秦王苻健の子苻生立ちて殘虐なりしかば、從弟苻堅弑して之に代り當時の人傑王猛を用ゐて國の富强を計り、慕容垂亦來り投ずるに及んで、王猛を遣りて前燕を亡ぼし、尋で、南巴蜀を定め、西前涼を略し、又遥に西域諸國を從へ、鮮卑の拓跋氏を侵してその地を奪へり、是に於て、苻堅の版圖は東は高句麗、新羅より西は龜玆、于闐に至り、塞外諸國の朝貢するもの六十餘國に及べ

り。苻堅は當代第一の豪傑なり。

百　肥水の戰

苻堅已に天下の大半を奄有し將さに江南を併せて晉室に代はらんとす。皇紀千四十三年（383 A.D.）苻堅卒六十萬騎二十七萬を率ゐて長安を發す。謝安の弟謝石、姪謝玄の兩人、東晉の兵八萬に將として秦軍と肥水（安徽省壽縣）に會し、大に之を破る。苻堅も亦流矢に中り狼狽して長安に還り、程なく叛者姚萇（後秦王）の爲めに殺され數年にして前秦遂に亡ぶ（千五十四年）是より東晉は一時稍無事なることを得たり。

百一　苻堅敗亡後江北群雄の割據

苻堅の敗亡するや、群雄皆秦に叛きて各一方に割據す。肥水の戰後一年、鮮卑の慕容垂、羌の姚萇自立せしより二十五六年間、東は山東より西は甘肅省の西境に至るの地に國を建て王を稱せるもの凡そ十二、而して最も強大なるものを後燕、後魏とす。

百二　後魏の興起

鮮卑の拓跋氏、もと漠北に居りしが後、盛樂（山西省の歸化城の南）に移り、一たび秦の苻堅の爲めに滅ぼされしも、苻堅敗亡の後、拓跋珪は部族を率ゐて再び盛樂に據り國を魏と稱す。史に之を後魏又は元魏といひて三國の魏と區別す。後魏是より強大を加へ、後燕を伐て之を亡ぼし、皇紀千五十八年（398 A.D.）珪は都を平城（山西省大同府）に遷して帝位に即く。之を道武帝といふ。

百三　劉裕（武帝）の東晉を纂ふに至れる次第

劉裕は彭城の人、郡吏の子なり。東晉の安帝暗弱にして攝政の大臣その當を得ざりしより、(一)妖賊孫恩なるものの亂を起し海内騷然たるに際し、劉裕は將軍劉牢之に從て恩を討ち大に勇名を揚ぐ。これ劉裕興起の始なり（千九十年）。幾もなくして(二)桓溫の子桓玄江陵に兵を擧げて建康に入り帝に迫りて位を禪らしめしが、劉裕再戰して大に之を敗り遂に玄を殺す。帝裕の功を賞し殆ん

ど軍事を擧げて之に任せしかば、裕の勢望益〻加はる。(三)超えて六年、裕南燕を亡ぼし尋で孫恩の殘黨を平げ、大に威を邊境に張る。是時に當り後秦の姚萇已に死し國勢漸く衰ふ。(四)劉裕之に乘じ遂に長安に入りその主を降す。(五)劉裕北征の功を恃み、建康に還て安帝を弑し、恭帝を立て自ら宋王となり遂に晉の讓を受く、是を宋の武帝とす、時に皇紀千八十年(420 A. D)也。

百四　南北朝の分立

皇紀千百年頃南に宋あり北に後魏あり江を隔てゝ天下を兩分す。この後北を北朝、南と南朝といふ、南朝は宋より齊梁陳に傳へ、北朝は魏分れて東西魏となり西魏は北周にうばはれ東魏は北齊に簒はる、已にして北周は北齊を滅し、終に隋は周陳を亡ぼして南北を統一す、此間凡百五十年、史に南北朝時代と稱す

百五　注意すべき事項

(イ)塞外人種の長く中國に優勢なりし所以

一、戎狄の內地に雜居せしこと、

二、清談の風流行して晉人概ね懦弱なりしこと、

三、八王の亂、

四、戎狄に豪傑の輩出せしこと、

(ロ)五胡十六國。八王の亂に乘じ匈奴の劉淵先づ兵を起し帝と稱してより戎狄の內地に跋扈すること百三十餘年。その間國を立つるもの大小十六國、人種を以ていへば匈奴、鮮卑、羯、氐、羌の五種、故に史に稱して五胡十六國といふ。然れどもその中三ヶ國は漢族の建國に係れり。

(ハ)王猛。王猛少にして大志あり、桓溫の秦を伐つや、往て謁し虱を捫て時務を談じ傍人なきが如し。溫用ゐんとしたれども應ぜず、後前秦王苻堅に召されて大に信任を受け、一歲中に五たび官を遷して遂に丞相となる、時に年三十六。猛死に臨みて晉の攻め難く、慕容、姚の二氏宜しく除くべきを告ぐ、堅その言を用ゐず、肥水の一敗遂にその國と身とを失へり。

(ニ)王敦。東晉の元帝の時、用ゐられて兵事を統べしが、其族多く朝廷に列するに及んで、王敦は王氏の長者として勢權内外を傾け、遂に叛して建康に迫る。元帝憂死し、明帝立ち、王導及蘇峻等に命じて之を討たしむ。王敦の軍敗れ、敦病を以て死す。

(ホ)枋頭。東晉の桓温が慕容垂と戰て大敗し、其威名頓に挫けたる戰場にして、今の河南省衛輝府に在り。

(ヘ)拓跋珪。苻堅敗亡の後、拓跋珪はその部族を率ゐて南下し、盛樂に都し、國號を立てて魏といひ、後益〻強大となり、皇紀一千年代の中頃、都を平城に移し帝位に即く、即ち後魏の道武帝なり。

(ト)石勒。羯人にして勇略に富む、初め劉淵に仕へて其將となり、屢〻大功を樹てたり。淵死し、劉曜代て漢の帝となるに及びて、自立して帝と稱し國を後趙と號せり。後、江北を一統す(九百八年)。

第十一　南北朝

百六　柔然の興廢

柔然は匈奴の別種にして漠の南北に居る。東晉の初、その部族初めて柔然と號し、爾後世〻拓跋氏に屬す。道武帝の時柔然の酋、社崙出づ。社崙は兇狡にして權變に富む、後魏が後燕後秦と難を搆へ北方經略の暇なきに乘じて國を富まし、兵を練り、高車及び匈奴の餘種を伐つてその地を略し、其領域内外蒙古に跨り、兵勢大に振ひ屢〻後魏に寇す。幾くもなくして社崙死し、柔然に内亂起り、後魏の邊境頗る安し。既にして社崙の從弟大檀立ち柔然又振ひしが、太武帝伐て之を走らし、四隣亦叛せしかば大檀憤死し柔然大に衰ふ。

百七　後魏太武帝の偉業

太武帝名臣崔浩に信任して皇紀千百五年遂に江北を一統し、ついで柔然威壓の功を遂げ、萬度歸等に命じて西域諸國を經撫せしめ、後又屢〻宋の軍を破

も終に宋をして北上の念を絶たしむるに於て東は高句麗より西は遠く波斯に至るまで諸國の後魏に朝貢するもの頗る多く、後魏の勢威益し此時より盛なるはなし。史家、太武帝江北統一の年(445 B.C.)を以て南北朝分立の成れる時とす。

百八　宋魏抗爭の由來

既に二大國の南北に分立する以上は必ず利害の關係あり、從て早晩衝突の起るべきは勿論なるが、宋魏の二國は只土地の接するを以て險要の地又は豐腹の土を欲するの念より相爭ふに止まらずして、その由て來る所遠きが如し。第一人種の相異。南は漢人種にして北は所謂五胡雜居し鮮卑最強大なり、南人は北人を索虜と侮り、北人は南人を島夷と譏れるに見ても知らる。第二、目的の相異。南人はもと北方中原の地に居りしを、五胡の亂のために江南に驅逐せられたる漢族なり。されば彼等は常に江北墳墓の地を回復するを以て畢生の志となせり。北人の思想は常に之と異なり、唯支那の中原は一統されざるべからず、秦の始皇、漢の武帝の舊圖に倣ふべしとの大抱負を懷いて他を顧みざりしなり。

百九　後魏の孝文帝の新政及その結果

太武帝弑に遇ひし後、文成帝、獻文帝を經て孝文帝に至る。帝專ら漢人の儒者を任用し、禮樂を興し制度を定め、文物始めて見るべきものあり。帝又國俗の鄙陋を厭ひ皇紀千百五十三年都を洛陽に遷し、ついで鮮を元と改め、胡服胡語を禁じ更に勅して宗室以下臣民の漢人と雜婚することを奬勵す。然れども功臣舊族概ね國風を慕ひ新制を喜ばず、加之奢侈柔弱の風大に行はれ後魏衰亡の兆現はる。

百十　東西魏對抗　高歡と宇文泰

孝文帝の後、宣武帝嗣ぎ政漸く弛み、孝明帝立つに及んで、六鎭の將士資給の薄きを怨んで叛す。爾朱榮之を平げ功を恃みて專橫なりしかば、孝莊帝の殺す所となれり。榮の一族ついで叛するや朔方の鎭將高歡之を破りて、洛陽に

入り、帝を廢し、孝武帝を立て自ら大丞相となり晉陽(山西省大原府)に居る、孝武帝遂に逃れて關西の大都督宇文泰に依り長安に都す、高歡乃ち孝靜帝を鄴に立つ、是に於て後魏東西に二分す、(皇紀千百九十五年)當時尙帝あれども實は高宇文二氏の天下たり。

百十一　蕭道成の簒立と宋の滅亡

蕭道成は南朝宋の權臣なり、曾て淮陰に在る時、廣く賓客を養ひ天下の俊傑と交る、明帝の時宋室の藩屏悉く亡び、帝崩じて太子昱、暴虐なりしかば道成遂に之を弑して順帝を立て、ついで迫りて位を禪らしめ國を齊と改む、時に皇紀千百三十九年なり。

百十二　侯景の叛

侯景は初め東魏に仕へて河南の軍事都督たりしが、大丞相高澄と隙ありしかば、河南の地を以て梁の武帝に降る、武帝侯景に兵を授けて東魏を伐たしめしが大敗して南に走りて壽陽に據る、既にして武帝東魏と和を約せしかば、景之を怨みて反し建康を襲ふ、時に武帝在位四十八年江南無事に慣れて兵備全く弛みしかば、武帝和を乞ひ憂憤して死す、幾もなくして侯景は梁帝を廢し自立して帝と稱せしが、終に武帝の子蕭繹のために誅せられたり。

百十三　隋の興起と南北朝の統一

北周の宣帝立つや、楊堅の女を立てゝ皇后とす、帝在位一年ならずして位を退き、其子靜帝嗣で立つに及んで、年幼なりしかば楊堅は外戚の親を以て政を執り、遂に相國となり、又爵を進めて隋王となり、終に帝に迫りて其禪を受けて周に代る、之を隋の文帝といふ、後七年を經て梁を併せ翌年陳を滅ぼす。東晉以來南北朝分立すること二百七十三年にして隋遂に天下を統一す、實に皇紀千二百四十九年(589 A.D.)なり。

百十四　南北朝時代の經學

三國魏の時、王肅出でゝ漢の鄭玄の學說に反對し、訓詁の學を排して專ら簡約華美の說をなしゝかば、兩晉及南朝にはその學風矢に行はれ、王弼、何晏ま

た老莊の玄理を好みて經書の解釋を爲せしかば、漸く清談の風を起せり。然るに北朝は鄭玄の學を用ゐて、眞摯に深遠なる研究をなしゝかば、徐遵明の如き大儒を出し、その門人また著名なるもの多し。

百十五　六朝時代の文學

兩晉より南北朝に至りては、漢末流行せる詞賦ますゝ盛となり、漸く浮華絢爛を尚び、終には精神を顧みずして形式のみに拘泥するの風を成し、所謂四六駢儷體起れり。晉末の陶淵明は此時代第一の文學者にして、宋の謝靈運、梁の沈約また著はる。然れども詩文に於ては、北朝は遂に南朝に及ばざりき。この華美なる文學を六朝文學といふ。蓋し江南に都せる吳東晉齊宋梁陳六朝の文學が此特色ありしを以てなり。

百十六　南北朝時代の佛教

晉及南朝には清談流行し、北朝また道教を奉ずるもの多かりしに際して、佛教の說また稍これ等に似たる所あるより、當代に至りて佛教益流布せられ、佛圖澄、鳩摩羅什、菩提達磨など相前後して支那に來り、譯經及布教に從事せるのみならず、趙の石勒、後秦の姚興、宋の文帝、梁の武帝其他、後魏の諸帝皆佛教を信じて、之が宣傳を助け、東晉の末には法顯、後魏の末には宋雲、惠生、ともに求法のため印度に至れり。

百十七　注意すべき事項

(イ) 崔浩。崔浩は北魏に仕へ最も太武帝の信任を受く。老莊佛法を惡み、專ら經術を修め曾て帝の命によりて國史を編し又律令制度を定む。北征南伐の際といへども常に帝に侍し、書策する所頗る多く、帝亦群議を排して浩が言に聽くを常とす。後浩漸く才略を恃み朝權を擅にし遂に罪を以て誅せらる。然れども後魏の興起は太武の勇邁と崔浩の才略に依るといふも不可なし。

(ロ) 法顯。法顯は名僧なり、東晉の末(399 A. D.)印度に赴き、錫蘭より南洋を經て支那に還り、其間十六年を費せり。その紀行は現存し、當時の佛教の狀況を知るは勿論、歷史地理上極めて重要なるものなり。

(六)王羲之。王羲之は東晉元帝の宰相王導の姪にして最も書を能くし、百家の能を總べて、衆體の妙を備ふといはる、その子王獻之また有名なり。

第十二　隋及唐の初世

百十八　文帝の治世　法制改定

文帝已に南北を併せ、專ら心を政に用ひ、大に節儉を奨め、賦稅を輕くして百姓を休息す。帝又頗る治才に富み、其改定せし法制は實に唐の制度の根源たり。太子廣不敬の罪あり帝之を廢せんとす(皇紀千二百十四年)廣遂に帝を弑して位に即く、之を煬帝といふ。

百十九　煬帝の偉業

(一)土木　煬帝長安を西京とし洛陽を東都とし、大に宮殿を營み、又民百萬を發して刊溝(今の江蘇の運河)を開き、ついで永濟渠(今の衛河)を開く、後又江南の河(今の浙江の運河)を穿つ。其他至る所河を掘り、長安より舟行して江南に達するを得べし。又長城を增築す。

(二)外征　裴矩を河西に遣り、西域の賈人を將ゐ來りて國の富强を示しかば西域諸國相次で來朝するもの四十餘國に及ぶ。又北は突厥と和し、南は林邑(今の交趾支那地方)琉球(今の臺灣)を征し、皇紀千二百七十二年(612 A. D.)百萬の兵を率ゐて高句麗を攻めしも大敗して還る。翌年また大擧して遼東城(盛京省奉天府附近なり)を攻めしも功なし。

百二十　群雄蜂起　隋の滅亡

煬帝の豪華を好むや頻りに土木を起し、年々遠征を企てしかば、百姓苛斂に苦み天下皆亂をおこす。帝の遼東に敗るるや、海內の豪傑競うて兵を擧げ、或は王と稱し或は帝と號し忽ちにして隋國崩壞す。是時に當りて李世民關中に起り、其父李淵を助けて遂に長安に入り、代王侑を奉じて恭帝となし、李淵禪いで恭帝の禪を受く。(618 A. D.)隋は三十七年にして亡ぶ。

百二十一　唐の勃興

煬帝の時、李淵は突厥を防ぎて利あらず淵の子世民、淵にすゝめて隋に反せしむ。淵乃ち突厥の援をかり、帝の東巡に乗じて、長安を陥れ、後遂に隋を亡ぼして帝位に即く、唐の高祖これなり。既にして煬帝弑に逢ひ關東大に亂る。李世民、關を出でゝ群雄を討ち、河の南北を定め、尋で梁、楚を平げ、朔方を破りて天下を一統す。唐の興起は實に世民一人の功といふを得べし。高祖位を世民に讓る、之を太宗といふ、實に皇紀千二百八十六年(625 A. D.)なり。

百二十二　太宗の偉業

唐の太宗、姓は李、名は世民、父を淵といふ、聰明勇決識量人に過ぎ、終に隋室を倒して唐室を興し、父について位に即き、忽にして天下を一統し、内外の治績悉く擧り、貞觀廿餘年の治は實に前代未曾有の太平たり、太宗は蓋し支那歴代第一の英主といふ可きなり、今その事蹟の主要なるものを擧ぐれば左の如し。

(一)父淵が太原の留守となり、突厥を拒ぎて利なく罪を獲んことを恐るゝに當り、世民は天下の大勢を看取し、淵に勸めて、隋室に叛せしめ、又突厥の援を借らしむ。(二)時に隋主煬帝江南に在りしかば、世民等直ちに長安を陥し、淵をして帝位に即かしめ、自ら秦王となる。(三)爾後、世民は專ら群雄の平定に從ひ、九年にして終に天下を統一し、淵(高祖)につぎて帝位に即く(皇紀千二百八十六年、626 A. D.)。(四)秦王たる時、文學館を開き十八學士を任じ、日夜文學を討論し、兄建成、弟元吉驕惰にして己を猜み害せんとするを覺り、先づ發して兩人を殺し始めて太子たりき。(五)帝能く人を用ゐ、能く諫を容れ、精勵治を圖る、乃ち宰相には杜如晦、房玄齡ありて政を輔け、諫臣には魏徵、王珪ありて帝の顧問たり。(六)教育を奬勵したる結果、大學に入り講義を聽くもの八千餘人に及び、孔穎達は勅により五經正義を撰せり、(七)其の他制度を與し刑を寛にし稅を輕くする等數ふ可からず、(八)又名將李世勣、李靖等を遣はして隋以來中國の憂たりし突厥(東突厥)を滅ぼし、ついで回紇を降し、西藏と和し、印度及び大食國と通じ、(九)景教、回教等の諸外教の弘布を許したり、(十)皇紀千三百〇九年(649 A. D.)太

宗崩ず。

百二十三　唐の制度

太宗の世に繼で高宗の初は、長孫無忌、褚遂良、李勣等文武の名臣政を輔けて海内太平なり。唐の制度は、概ね此二代の間に成る。而して唐制は支那歴代は勿論、我國及朝鮮の制度も概ね之に倣へるものなるが故に、其大略を知ること最必要なり。

(一)官制。中央政府に在りて大政を掌るものを三省と六部とす。上に三師三公あれども、唯天子の顧問のみ政務には與らず。今三省六部の職掌及關係を左圖に示す。

三省	職掌	長官	副官	六部	六部ノ職掌
中書省	詔敕の宣奉	中書令			
門下省	詔敕の審査	侍中			
尚書省	詔敕の施行	尚書令			
		左僕射			
		右僕射			
				吏部	官吏の銓敍
				戸部	賦稅
				禮部	禮儀
				兵部	軍事
				刑部	刑罰
				工部	土木

（長官ヲ尚書トイフ）

地方官には、道に巡察使、州に刺吏、縣に令ありて政を爲す。別に都督は諸州の軍政を掌り、都護は諸蕃を撫し外寇を拒ぐを掌る。後世の節度使はこの都督都護より起る。

(二)兵制。天下を十道に別ち、各道に折衝府を置き都尉を長とす。府の總數六百三十四、内二百六十一を關内道（帝都の在る所）に置き、以て内外の勢を制す。府に上中下三等の別あり。兵に歩騎あり。毎年冬季都尉自ら兵の習練をなす。

(三)田制及税法。後魏の文帝、井田の法を斟酌して、均田の法を施め、唐も亦之

に傲ふ。凡そ男子年十八以上のものには田百畝を給し、その二十畝を永業田とし、自餘の八十畝は口分田として一代を限る。而して田を收授するは毎年十月より十二月の間なり。稅目には三種あり、丁男毎年粟二石を出すを租といひ、二十日間、公事の爲めに役に就くを庸といひ、鄕土の產物若干を納むるを調といふ。此くて唐の田制及稅法は直に天下戶口の數と關係するが故に、三歲毎に鄕帳を作りて民をして法に背く能はざらしむ。

(四)刑法。唐の刑に五種あり、笞、杖、徒、流、死是なり。而して各二等乃至數等に分るゝが故に刑の輕重すべて二十等あり。

刑名	等別
笞刑	十より五十まで五等
杖刑	五十より百まで五等
徒刑	一年より三年まで五等
流刑	二千里より三千里まで三等
死刑	絞、斬の二等

百二十四　注意すべき事項

(イ)李世民。唐の太宗、名を李世民といふ。（九十、九十一頁ヲ見ヨ）

(ロ)唐の太宗に仕へたる名臣。文臣には、房玄齡、杜如晦、魏徵最著はれ、武臣には李靖、李世勣（またの名李勣）最名あり。

(ハ)均田法。唐の田制は均田法と稱せらる。（九十三頁ヲ見ヨ）

(ニ)租庸調。唐の稅法に定められたる三種の稅目なり。（九十四頁ヲ見ヨ）

第十三　唐代の外國

百二十五　高句麗百濟新羅建國の由來

西漢の末、扶餘族の朱蒙なるもの、鴨綠江の支流拂流水邊に高句麗國を興す、東漢三國の際漸く强大なりしが、前燕の爲に破られてより、專ら南方を圖る。少しく後れて朱蒙の次子、溫祚、事を以て國を遁れ、馬韓に入りて一部落を建て百濟と稱す、東晉の初には全く馬韓の地を奄有せり。二國の建國と殆んど

時を同うして朴赫居世なる者、辰韓に一部落を建て新羅國の基を開く、西晉の末、辰韓弁韓を併呑し勢漸く大なり。

百二十六　隋以前三韓と我國との關係

新羅は最も我國に近く、屢我熊襲を煽動せしかば、神功皇后遂に之を征服し、百濟も高句麗の侵略に逢うて我國に援兵を求めしかば、我國は弁韓の故地に任那府を置きて、新羅、百濟の二國を保護せり。當時高句麗猶り我に入貢せず、爲めにかの二國も爾後叛服常なく、新羅遂に任那府を陷り、我遠征の軍亦成功を見る能はざりき。

百二十七　高句麗の極盛及其の衰亡

高句麗は一たび前燕のために破られしが、その後明主相繼で出て、頻に地を擴め、廣開土王の子長壽王に至りては、支那の南北朝に臣事し、北方の靺鞨族と結び、遂に百濟を逐うて、都を平壤に移せり。（千百七十二年）その二王の治世は高句麗の極盛時代なりき。其後隋の文帝、煬帝、唐の太宗、前後高句麗を伐ち皆敗れて歸りしが、終に唐の高宗に滅ぼさる。

百二十八　我國と隋唐兩國との交通

隋唐の際、支那と朝鮮との關係漸く密なるに從ひ、我國との交通も亦頗に盛なるに至れり。皇紀千二百六十七年（我推古帝の十五年 607 A.D.）小野妹子を隋に遣はして好を修め、唐興るに及んで、遣唐使の制を設け、又支那に留學するもの頗る多く栗田眞人、吉備眞備、阿部仲麻呂等最著はれしが、唐の末世我菅原道眞奏して遣唐使を罷め、兩國々際上の交通長く中絶す。

百二十九　突厥の興起

突厥はトルコの音を表はせるものなり。匈奴の支族にして金山（アルタイ山）の南に居り、世、柔然に臣屬したりしが、その部長土門に至り、柔然に叛いて始めて可汗と稱し、その子木杆可汗頗る勇略あり、柔然を伐つて之を滅ぼし、西は嚈噠（エフタル）を破り、北は契骨（古の堅昆キルギス）を走らしゝかば、皇紀千二百廿年頃（西暦六世紀の中頃）突厥の領土は、內外蒙古より中央亞細亞に及べり。木杆可汗の本營を都斤山

（抗愛山附近）とす。

百三十　突厥の分立

木杆可汗は外蒙古の都斤山に在りて自ら東方を統べ、その從弟達頭可汗をして烏孫の故地（イリ地方）に居りて西方を管せしむ。達頭後に東羅馬帝國に好を通じ、波斯を圖りしが果さず、その孫射匱可汗は地を廣め、東は金山、西は裏海に至り、射匱の弟葉護可汗の時、西は波斯を併せ、北は鐵勒諸部を從へ、本營を千泉（露領トルキスタン、タラス河上流）に定め、その威勢甚盛なり。これを史に西突厥と稱す。

百三十一　唐と突厥との關係

隋唐の際突厥甚だ強く、隋の煬帝はその可汗始畢の爲めに雁門（山西省代州）に圍まれて大に苦み、隋末の大亂には、中國に割據せる群雄爭うてその歡心を買ひ、唐の高祖も世民（太宗）の謀に從つて臣と稱してその援兵を借りたり。然るに唐の初、突厥大に亂れしかば、太宗は李靖李勣等の名將を遣り、鐵勒諸部（トラオルコン河）と力を併せて之を伐ち、皇紀千二百九十年（630 A. D.）遂に頡利可汗を擒にす。是に於いて東突厥の地は、鐵勒の一部たる薛延陀の有に歸せしが、太宗の末年同じ鐵勒の一部たる回紇（後の兀兒）之に代り、薛延陀を滅ぼし、鐵勒諸部を率ゐて唐に歸服せり。高宗の初、內外蒙古の地悉く唐に入るこの頃唐は高昌（吐魯蕃）を滅ぼし、西突厥と地を接す。高宗は蘇定方を遣りて時の可汗沙鉢羅を伐つて之を擒にし、幾もなくして西突厥の地悉く唐の領となる。

百三十二　回紇及黠戛斯

回紇は太宗の時唐に降り、突厥衰へて後は代てその地を領し、烏德鞬山（外蒙古サインノヤン內）に本營を定む。安史の亂あるや、援兵を送りて大功ありしかば、唐の爲めに厚遇せられたり。皇紀千四百年代の末（四世紀の初）回紇は黠戛斯（堅昆、契骨、皆同じ）に破られ、餘類天山南路に走り、蒙古の時、畏兀兒として著はる。黠戛斯は回紇の北、エニセイ河の上流ケム河邊に居りしが、回紇を破りて南に下り、杭愛山阿爾泰山附近に移る。蒙古の時に乃蠻部、乞兒吉思部といふもの是なり。

百三十三　唐と大食國　回教の全盛

大食とは、もとシリヤ地方の亜剌比亜人を指せしものなるが、後には、サラセン帝國を大食國と稱せり。皇紀千三百年頃哈利發（マホメットの繼承者の義）オスマン、波斯を併呑したりしが唐の威名を聞きその波斯を助けんことを恐れ、使を唐に通じ、(651 A.D.)爾來頻りに唐の歓心を求めけり。當時大食國はその極盛に達し、葱嶺以西の亞細亞は全く其領土に歸し、領民皆回教に改宗せしかば、その地の佛教大に衰へたり。

百三十四　中古の印度

南北朝の中頃、北印度の烏茶に超日王出で、西北中の三印度を統一して文學を奨勵し、尋で隋唐の際戒日王は曲女城に據り殆んど全印度の主となり、又大に文學佛教を起し、唐の太宗の時好を通じ唐亦使者を送れり、實に印度の極盛時代なり。王の歿後、亂に乘じ、ラヂヤプト族西印度に起りて遂に印度の西半部を統一し、時に起れる溫都教（波羅門教の一種）を奉じて國教となし、大に佛教を排斥せり。

百三十五　唐の極盛時の版圖

太宗、高宗の時代に於ける唐の勢力は實に空前の盛大を致せり。高宗の時その管轄區域は、東朝鮮滿洲より、西は中央亞細亞に至り、北は內外蒙古より南は南洋諸島に及べり、此廣大なる版圖を治めんがために、唐は塞外に六都護府を置けり。

百三十六　注意すべき事項

(イ)長壽王。皇紀千百年代の中頃に在りて、高句麗の王位に即き、南北朝に臣事し、北は靺鞨族と和し、南は百濟を逐うて、平壤に都を奠めたり。高句麗の極盛時代と爲す。

(ロ)溫都教　婆羅門の一派にして、唐の太宗の頃、印度のラヂヤプト族が國教と定めて佛教を抑壓したるものなり。

(ハ)劉仁願、劉仁軌。劉仁願は唐の高宗の命により新羅を救うて百濟を伐ちその王を殺して、百濟を留守せしが、百濟の王族福信恢復を計り援兵を我

國に求め、我齊明天皇は阿曇比邏夫をして之を助けしむるに及んで、唐の劉仁軌は兵を率ゐて劉仁願を救ひ、皇紀千三百二十三年(663 A.D.)白江口(錦江ノ海ニ入ル處)に於いて我軍を破り遂に百濟を滅ぼせり。

第十四　唐の中世以後

百三十七　武后の亂

高宗位に即くや、太宗の宮女武氏を納れて之れを寵し、遂に立てゝ皇后とす。武后才略あり、帝の多疾なるに乘じ、漸く政務に與り、高宗の死後中宗睿宗立ちしが武后共に之を廢し、皇紀千三百五十年(690 A.D.)遂に自ら皇帝の位に即き、國號を改めて周といふ。則天武后是なり。然れども武后明敏能く人を用ゐしかば、裴師德、狄仁傑、張東之等の名士相次でその用をなせり。晩年武后政を怠り內行修まらざるに及んで、張東之等急に宮中に入り嬖人を斬り、武后に迫りて中宗を位に復せしむ。武后帝を稱すること十六年にして、唐室復興す。

百三十八　韋后の亂

初め中宗廢せられて、野に在るや韋氏と艱難を共にす、位に復するに及んで、韋氏を立てゝ皇后とし、政に預らしむ、韋后淫佚、武三思を寵し、共に謀りて張東之を殺し、遂に帝を弑して自ら政を擅にす。中宗の姪隆基、兵を起して韋氏の黨を誅し、父睿宗を迎へて位に復し、ついでその禪を受く、之を玄宗とす(千三百七十年)

百三十九　開元の治

玄宗即位の初め銳意治を圖り、賢臣姚崇を擧げて相とす。崇能く權倖を抑へ、宋璟次で相となり、政に私なく、善く人を用ゐしかば、百姓堵に安んじ、國運益〻盛なり。宋璟の後、張嘉貞、張說、李元紘、杜暹、韓休、張九齡、等相繼で相となり、三十年の太平を致せり、之を開元の治といふ。唐の文學技藝此時を以て最も盛なりとす。

百四十　節度使の設置

高宗以來內亂頻りに起り、國威の衰へたるに乘じ、外夷の邊境に寇すること益〻加はりしかば、玄宗は四境の要地に十節度使を置き、兵馬の大權を委ねて、その鎭撫に從はしむ。是より唐の國威また塞外に張りしも、漸く節度使專橫の端を開けり。

百四十一　安祿山及史思明の叛

玄宗晚年意漸く驕り、宴樂を事とし政亂れし時、營州の胡人安祿山なるもの、巧に帝の寵妃楊氏と結び深く帝の信任を得、平廬（內蒙古東部）范陽（北京）河東（山西省大原府）の三節度使を兼ね、兵權頗る大なりしかば皇紀千四百十五年（天寶十四年 755 A.D.）遂に反を謀り、河北を定め洛陽を陷り、翌年自ら燕帝と稱す。時に天下太平に狃れ民戰を知らざりしかば、賊兵遂に進んで長安を犯し玄宗蜀に奔る。顏眞卿、張巡等能く防ぎ、僅かに山東江淮の地を救ふを得たりしが、郭子儀、李光弼の二節度使兵を起し、西域、回紇の兵亦來り會するに及んで、連りに賊軍を破る。肅宗の至德二年（757 A.D.）安祿山その子に殺され官軍進んで長安を復し、新帝肅宗及上皇を迎へ翌年その將史思明亦燕帝を僭稱せしが、三年の後その子に殺され肅宗殘して代宗立ち、洛陽を復するに及んで、賊將相率ゐて降り、八年の內亂此に平ぐ（762 A.D.）是を安史の亂といふ。是より唐の國威大に衰へ、內憂外患漸く多し。

百四十二　節度使跋扈の由來

唐の初めに要地に都督府を置き、後節度大使の名あり。玄宗の時、邊境に十節度使を置き、安史の亂後內地にも之を增設せしかば、是より各數州の甲兵を領し、財賦を恣にして、その勢力隱然諸侯の如く、代宗の頃に至りては朝廷も之を制すること能はず、節度使益〻驕橫となる。

百四十三　節度使の盛衰

安祿山の反平定するや、代宗は降將三人を擧げて直隸地方の節度使に任ず、此地方は賊黨の根據地なりしかば、幾くならずして二藩結託して兵を蓄へ城を固くして朝命を奉せず。代宗の子、德宗府庫を富まして節度使の勢を殺

がんと計り却て亂を招ぎしが、憲宗に至り賢相杜黄裳の議を容れ、名將武元衡、裴度を遣はして、淮西及河北の三藩を降す。是より諸鎭相尋で歸順す、節度使の患をなすこと此に六十餘年なり。

百四十四　宦者專權の由來

玄宗內寵に耽りしより宦者漸く勢を得、肅宗代宗の世、ます〳〵信任せられ、德宗に至りて禁軍を統べ政權を攬り、人主の廢立を恣にし遂には憲宗、敬宗の二帝を弑するに至れり。文宗立て、宦者の跋扈を惡み、其黨を除かんと謀りて成らず、是より以後將相は勿論、天子の廢立一に其手中に歸するに至れり。

百四十五　朋黨の爭（李牛の爭）

初め穆宗の時李德裕、事を以て李宗閔と隙あり、是より各朋黨を立て、相爭ふ。文宗の時、宗閔、宦者の助によりて相となり、牛僧孺を招いて共に德裕に當る。偶吐蕃降服の事に關して議合はず、反目益〻甚し、後李德裕相となり勢甚盛にして遂に宗閔、僧孺を貶す。鬱くもなくして三人相次で死し、朋黨相爭ふこと前後四十年にして止む。朋黨の爭によりて宦者は漁夫の利を占め益〻暴威を振へり。

百四十六　朱全忠唐室を簒へる顚末

朱全忠もとの名は溫、黃巢に從て唐に反し、後降りて僖宗に用ゐられ、昭宗の時宦者を誅滅して威望漸く高く、宰相崔胤を殺し、帝に勸めて都を洛陽に遷し、天子を挾んで群雄の間に卓出せり。既にして群雄、唐室興復を名とし兵を起すに及んで、全忠遂に帝を弑し、哀帝を立て、尋で其禪を受く。實に皇紀千五百六十七年（907 A. D）にして唐は高祖の卽位より此に至るまで二百九十年にして亡ぶ。朱全忠國を後梁△△と號す。

百四十七　注意すべき事項

(イ) 唐代叛亂の主なるもの。武后の亂（百〇二頁）、韋后の亂（百〇三頁）、安史の亂（百〇四頁）、藩鎭の叛。（百〇五、六頁）

(ロ) 則天武后。（百〇二頁ヲ見ヨ）

(ハ)睢陽の戰。肅宗の至德二年(757 A.D.)正月安祿山の將尹子奇の河南を侵すや、張巡睢陽城(河南省商邱縣)に入り、城將許遠と共に力を合せて固守し屢賊を走らす、然れども城中食盡き、後には老弱を殺して之を食ふに至る。子奇猶圍を解かず、十ヶ月の後城遂に陷る。此時官軍既に長安を復す。巡は東に敗死すと雖も、官軍が容易に西方を平定するを得しは、睢陽城が賊軍を牽制せしによる、張巡許遠の忠と功と偉なりといふべし。

(百〇五頁ヲ見ヨ)

(ニ)唐末藩鎭の跋扈せし由來。(百〇五頁ヲ見ヨ)

(ホ)李德裕。唐の穆宗の時より凡そ四十年間、朝臣二派に分れ相軋轢して朝權を爭へり、その一方の領袖を李德裕といひ、他を李宗閔及牛僧孺とす。是より黨人相爭ふを李牛の爭といふに至れり。

(ヘ)李克用。李克用は沙陀の部長なり、驍勇にして膽略に富む。唐の僖宗の時、黃巢の亂を平げ、後朱全忠と爭ふ。近畿の亂るゝに乘じて遂に封せられて晉王となり、その子存勗に至り後梁を滅ぼして帝位に即く、是を後唐の莊宗とす。

(ト)張東之。唐の則天武后の時宰相狄仁傑の推薦によりて大に信任せられ、仁傑死して後は代て相となりしが武后晩年政に倦み佞臣を寵幸せしかば、東之は帝の疾あるに當て兵を率ゐて蹕侍を斬り、武后に迫りて位を避けて中宗を復位せしむ。後韋后の政を專らにするに及んで讒に遘うて殺さる。

(チ)郭子儀。唐の玄宗の時、朔方の節度使たり。安祿山反するや、朔方の軍と回紇の兵とを合せて賊を擊破し遂に長安を復す。代宗の時、安史の亂に乘じて吐蕃來り寇す。郭子儀之を破りて長安を安んじ、後吐蕃回紇連合して再び西邊を侵すや、回紇に說き共に吐蕃を破る、これより郭子儀の威名內外に振ふ。

(リ)裴度。裴度は唐の憲宗の名將なり。節度使抑壓を以て自ら任じ、嘗て淮西を巡視し、還て其取るべきことを奏す。帝乃ち裴度と武元衡とに命じて淮西

の節度使吳元濟を討たしむ。偶〻元衡殺され、斐度諸軍を督し、遂に元濟を擒にし淮西を平ぐ。是より節度使相率ゐて朝廷に歸降す。

第十五　隋唐の學問宗教及貿易

百四十八　隋唐の儒學

魏晉の際、儒學も亦南北二派に分れ、南方は簡約華美なる王肅の學風行はれ北方は敦厚深遠なる鄭玄の學風を奉せり。隋天下を一統して未だ學風を統一するを能はざりしが、唐の太宗は大に學事を奬勵して都鄙に學校を建て、孔穎達顏師古に命じて五經正義を作らしめ、始めて儒學を統一し、又秀才進士の諸科を以て官吏登用の法を定めたり。

百四十九　唐の詩文

唐の經學は未だ大に稱すべきものなく、高遠なる思想は却て老佛の徒に見るを得べかりしが、獨り盛唐の詩文に至りては殆んど前代を凌駕するに足り、文學を以て一世に聞ゆるもの勝へて數ふべからず。中にも韓退之、柳宗元の文章、李太白、杜子美の詩は永く後世の宗とする所たり。

百五十　唐代支那に入りし諸宗教

(一)祆教。太古バクトリア國（蘇魯支 Zoroaster の創むる所に係り、火を拜するを以て拜火教といふ。支那に祆教といふ。もと波斯の國教なりしが、その國滅びて回教徒に虐待せられしかば漸く東に徙り、遂に支那に入りしなり。唐の太宗爲めに祆寺を長安に建てその布教を許す。

(二)景教。皇紀十一世紀の末（西曆五世紀の中頃）コンスタンチノポリスの僧ネストリウス Nestorius の創めし耶蘇教の一派にして波斯、中央亞細亞に流行し、唐の太宗の時支那に傳來し。太宗高宗ために景寺を立て、玄宗肅宗郭子儀皆信仰せりといふ。

(三)回教。マホメット教なり、大食國の勢を得ると共に葱嶺を越へ、新疆を經て支那に傳はれり。回紇人最も能く信仰せしを以て回教といふ。

百五十一　佛教興隆の原因

佛教は魏晉南北朝を經、唐に至りて極盛に達せり。文宗の時、寺四萬、僧尼七十餘萬人ありといふ。今其原因を尋ぬるに、(一)海陸交通の便益、加はりしかば印度、中央亞細亞の僧侶は、多く支那に來りて自ら布教又は譯經に從事したること。(二)支那の君主は概ね佛法を信じ布教に力めたること。(三)支那僧の印度に往きて佛典を得て歸るもの多かりしこと等なり。

百五十二　印度に渡りたる著名の僧侶

玄奘（ゲンザウ）は唐の太宗の時、西域諸國を經て印度に入り、十七年の後六百餘部の經典を齎らして歸國し佛經の新譯を成せしは、支那佛教史上特筆すべき偉功なり。高宗の世、義淨（ギジヤウ）も南洋より印度に航し、二十五年を經て歸國せり。各人の手に成れる紀行は現に存して學者間に貴重せらる。

百五十三　道教唐の國教となる

老子の學は東漢三國の際、佛教興隆の影響を受け、一種の宗教となり道教と稱せらる。唐興りて之を奉じ、玄宗の時、唐の正教と定めてより益盛に行はれ、武帝に至り一時道教以外の宗教を嚴禁せり。

百五十四　隋唐と西洋諸國との海岸貿易

東漢の世、大秦始めて支那に通じ、三國時代には羅馬の商船獨り支那南海の交易をなしゝが、佛教の東漸は東西交通を頻繁にし、隋唐の初に及んでは、支那の商人の南洋諸島、印度洋、波斯灣に至るもの少からず、既にして大食國起り、印度洋の航海權は亞剌比亞人の獨占する所となれり。當時支那沿岸に有名なる貿易港を廣州、泉州、杭州等とす。

百五十五　注意すべき事項

(イ)玄奘、義淨。（百十二頁ヲ見ヨ）

(ロ)唐代の能書家。張旭、顏眞卿、褚遂良最も著はる。

第十六　遼　五代　宋

百五十六　契丹

契丹は漢代東胡の裔にして、南北朝の頃、その部衆潢河(シラムレン)附近を根據として、内蒙古東部一帯の地を占め、隋唐の際常に支那に臣屬せしが、唐の國威衰ふるに及んで獨立し、次第に南に下れり。

百五十七　阿保機

耶律阿保機、契丹の大人となるや、四隣の諸部を併せ制度を改め、世襲君主の基を定め臨潢(潢河の北)に都して、帝と稱す。時に皇紀千五百七十六年(916 A. D.)にして之を契丹の太祖といふ。既にして北は室韋、女眞を侵し、西は回紇吐谷渾を略し、東渤海を破りしかば、その領土は内外蒙古より東は海に及べり。子太宗立つに及んで、五代の戰亂に乘じて、南、支那の中原を圖るに至りぬ。

百五十八　渤海の興亡

隋の頃、靺鞨の粟末部(松花江流域)は高句麗に屬せしが、高句麗亡ぶるや、その部長大祚榮高句麗の故地を領し、皇紀千三百七十三年(713 A. D.)唐の玄宗より封爵を受けて國を渤海と號す。その子太武藝立ち、地を拓き國を富ませし、聖武天皇の時、我國に使を通じ、和親を約するなど久しく東海の一強國たりしが、二百餘年の後遂に契丹の太祖阿保機の滅す所となる。

百五十九　契丹と後晉

後晉の高祖石敬瑭の洛陽を陷れて後唐を亡ぼすことを得たるは、契丹の太宗が援兵を送りたるによるなり。されば高祖は北方十六州を契丹に割き、又歲に金帛三十萬を贈るを約し之に對して臣禮を執りしが、高祖死して、出帝立つに及んで、大に禮を失ひしかば、太宗發怒し、大擧して南下し、出帝を擒にし、自ら大梁(即ち汴)に據りて、國號を遼と改む。然れども士民の反抗ありしかば、守兵を止めて再び北に還る。

百六十　後周の世宗の偉業

世宗新に立つや、北漢、遼と兵を合せて來り侵す。世宗逆擊して大に之を破り、尋で南唐を攻めて悉くその江北の地を收め、遂の政亂るゝに乘じて、北、遼を

侵して其南邊を略せしが、偶〻疾に罹りて死す。(二十六年)世宗は五代第一の英主なり。

百六十一　五代の帝系

唐の滅亡後群雄割據するもの凡そ十國、而も中原に覇を稱して相次ぎしものを左の五國とす、故に五代といふ、此間紛亂止まず道義全く頽る。

(一)梁。太祖(朱全忠)―末帝……(一五六七―一五八二)
(二)唐。莊宗(李存勗)―明宗―閔帝―廢帝…(一五八三―一五九六)
(三)晉。高祖(石敬瑭)―出帝……(一五九六―一六〇六)
(四)漢。高祖(劉知遠)―隱帝……(一六〇七―一六一一)
(五)周。太祖(郭威)―世宗―恭帝……(一六一一―一六二〇)

百六十二　趙匡胤(宋の太祖)

後周の世宗雄志をもたらして死し、(二十六年)其子恭帝尚幼なるを以て、その年將士等宿將趙匡胤を推して帝位に即かしむ、之を宋の太祖といふ。太祖は宰相趙普の說に聽き、節度使を罷め文臣を以て之に代へ、州郡に通判を置きて武臣民政の權を抑へ、地方に轉運使を任じて收稅の事を司らしめ又天下の精兵を選んで禁軍を組織せしかば、更に北に向て北漢を伐ちしが中途に歸し、節度使跋扈の患を除けり。

百六十三　宋の統一

太祖已に內治の大策を實行し、後外征に從事し、南唐、荊南、後蜀、南漢、吳越等の諸國を滅ぼし、南方全く平定せしかば、更に北に向て北漢を伐ちしが中途にして死す。太宗其志を繼ぎ北漢を滅ぼして天下を一統せり。時に皇紀千六百三十九年(979 A.D.)なり。

百六十四　澶州の役

太宗の北漢を滅ぼすや、勢に乘じて遼を侵し敗れて還りしより、宋遼二國相反目し、太宗の子眞宗嗣ぐに及んで宰相寇準の言を納れ親征して遼軍を澶州(直隸大名府)に破りしが、其入寇を恐れ、遂に歲幣銀十萬兩、絹二十萬匹を遼に贈

りて和を結び、兄弟の盟を爲す。(十六百六十四年 1004 A.D.)

百六十五　李元昊

西夏は黨項(タングート)の後にて圖伯(ツバット)特族なり。唐末その部族夏州(オルドス南部の)に移り、後、宋と遂とに臣屬せしが、李元昊(カク)その王となるに及んで回紇を伐ちて河西を奪ひ、興慶(甘肅寧夏府)に都して帝と稱し、國を西夏(△)と號す。(十六百九十八年 1038 A.D.)

百六十六　宋と西夏

西夏の起るや、宋の仁宗は韓琦、范仲淹等を遣はして之を伐つ。遼の興宗其虚に乘じて南下せんとせしかば、仁宗恐れて歳幣を遼と夏とに贈りて和を結ぶ。

百六十七　宋の大屈辱

是より先き、(一)皇紀千六百年代の中頃、宋の太宗南、瞿越(趾交)を伐て利あらず。(二)次で眞宗遼に失敗し、(三)今仁宗も亦西夏に克たずして歳幣を贈るを約す、これ實に宋の大屈辱にして、之を雪ぐは蓋し宋室焦眉の急務だり。王安石の新法は此目的のために採用せられたるなり。

百六十八　宋の財政困難

宋は(一)眞宗以來遼に歳幣を贈り、(二)仁宗以來西夏に金帛を贈りしと、(三)建國以來功臣を優待して濫りに其子孫一族に官爵を授けたるとにより益財政の困難を來し、英宗神宗の際に至りては又如何ともすべからざるに至れり。王安石の新法は即ち之を回復せんがためなり。

百六十九　王安石の新法

仁宗の後英宗を經て皇紀千七百二十七年(1067 A.D.)神宗位を繼ぐ。帝年少く氣鋭なりしかば、宋の積年の屈辱を雪がんと欲し、即位の二年王安石を用ゐて、富國強兵の策を建てしむ。安石乃ち、富國策としては青苗法、募役法、市易法を立て、府庫の充實を計り、強兵策としては、保甲法、保馬法を立て、民をして鄉閭に在て武藝を習はしむ。

百七十　新法に對する世論　朋黨の爭

神宗已に新法を建て、次弟に之を行ひ直ちに外國の經畧に從事せしが、南は交趾に敗れ、北は西夏に敗れ、全く志を果さゝるのみならず、新法の目的一に國庫の充實にありて、百姓の休戚を顧みざりしかば、人民之を喜ばず。又名臣歐陽修、司馬光等は當代有名の學者と共に極力之に反對せしも、安石之を顧みず斷じて實施せしかば、之より朝臣二派に分れ、相共に政權を爭ふこと十六年。哲宗を經て、徽宗位に即くに及んで、蔡京を擧げて新法を復し、遂に悉く新法の反對黨を除けり。世に舊法黨を元祐黨といひ、新法黨を紹豐黨といふ。

百七十一　阿骨打金の太祖の事蹟

阿骨打（アクダ）は黑水靺鞨部の一なる生女眞の部長なり、初め松花江（ソンガリ）の北に居りしが、遼の衰に乘じてその羈縻を脫し、皇紀千七百七十五年（1115 A. D.）皇帝を稱し、國を金と號す、金の太祖是なり。尋で遼と戰ひ、又熟女眞を降し漸く遼の上京（臨潢）に迫る。宋の徽宗は、宰相蔡京の言を用ゐて金に歲幣を約して遼を夾

擊せんとす、金の太祖之を諾し兵を進めて連りに遼を破るに當り、宋軍一度も克つ能はずして金の援を乞うて僅かに遼の南京を陷れしかば、金は既定の歲幣に滿足せず、更に增額を求む、宋その意に從ひ、自ら僅かに南京と其附近の六州を得て止みたり。太宗の時、金遂に遼を滅す、時に皇紀千七百八十五年（1125 A. D.）なり。

百七十二　西遼の興亡

皇紀千七百八十五年、金の太宗の遼を亡すや、宗室耶律大石、餘衆二千を率ゐて西に走り、中央亞細亞に一大强國を起し、自ら黑契丹の濶兒汗と稱す、支那に所謂西遼の德宗即ち是なり。德宗は四隣を征して西は アラル海より東は西夏に達する大領土を有せしが、その孫直魯克の一時、乃滿の屈出律及び花剌子模のムハメットの爲めに分割せられて亡ぶ。

百七十三　靖康の難

金の太宗既に遼を亡ぼし、宗族幹離不を遣し南して宋の國都汴京に迫らし

む。徽宗位を欽宗に譲る、欽宗三鎮の地を割くを約して金兵を退け（靖康元年）後、約に背きしかば、太宗大に怒り、また南下して遂に汴京を陷れ、徽宗及欽宗を執へて北に還る時に靖康二年（皇紀千七百八十七年 1127 A.D.）なり。是に於て欽宗の弟、高宗、位に南應天（河南省歸德府）に即き、後更に臨安（浙江省杭州府）に遷る。之を宋の南渡といふ。

百七十四　秦檜の和議

高宗の生母韋太后四はれて金に在り、帝日夜之を召還せんことを念ひ、屬金に乞ふ、既にして秦檜宋の相となり、頻りに和を主張す。金の熙宗之を許さず、又兵を起して來り犯す。宋の名將韓世忠、岳飛等連りに之を破り、將に河北を回復せんとするの勢ありしが秦檜諸將を召還し、忠勇無比の岳飛を殺し、皇紀千八百一年（1141 A. D.）遂に金と和す。婧和の條件左の如し。

第一、東は淮水西は大散關を以て兩國の境となす。第二、宋より歲幣銀絹各廿五萬を納むべし。第三、宋の君主は金の封冊を受くべし。第四、徽宗の梓宮（死骸を收めたる棺）及韋太后を宋に送歸すべし。

百七十五　宋代の儒學文藝及宗教

儒學は宋に至りて一變し、前代の訓詁學に對する性理學を起せり。即ち哲理の思索を主とするものにて、佛教殊に禪學の影響を受けたるものなり。周敦頤はその鼻祖にして、程顥、程頤之を承け、朱熹に至りて之を大成す。世に宋學といふ。宋の詩は唐に及ばざれどもその文章必ずしも之に下らず。就中歐陽修、蘇軾（東坡）最も稱せらる。宋には佛教最も行はれ、中にも禪學盛にして當時の儒者概ね之を修めしかば、儒學に影響せしこと頗る大なり。道教も亦一時大に行はれたり。

百七十六　注意すべき事項

(イ) 趙普。宋の太祖に知られて宰相となり、藩鎮抑壓の策を建て、又北征を後にして南征を先にすべきを說き、宋をして統一の業を成さしむ。太祖崩じて太宗に仕ふ。

(ロ) 司馬光（溫公）。宋の神宗の時王安石新法を出すや朝臣にして最も之を難せ

しは司馬光なり。哲宗位に即き宣仁太后(神宗の母)攝政の時、擢でられて相となり、悉く新法を罷め、非常に人心を得たり、但在職僅に八月に過ぎざりしは惜むべし。又資治通鑑の撰者として有名なり。

(ハ)宋の學風。性理の學即ち所謂宋學は學藝よりも寧ろ實行を重んじ、盛に國政を論議するに至れり。即ち前には王安石の新法を議して遂に黨を分ち、中頃、君父の仇なる金と和すべからざるを主張し、後には朱熹の韓侂胄と爭へる等、皆當時の學風を見るに足るものなり。(百三十百卅二頁ナ見ヨ)

(ニ)遼の聖宗。皇紀十七世紀の中頃(西暦十世紀末)に出でたる遼第一の英主にして、宋と和せる後、東、高麗を降し、其版圖東は日本海より西は天山に至り、南は、支那本部の北部より北は外蒙古に達し、朝貢臣を稱するもの六十國に及べり。實に遼の極盛時なり。

(ホ)王安石の新法出づるに至りし原因。宋は眞宗の時、遼に破られ、仁宗の時西夏と和し共に歲幣を約せしと、實に宋の大屈辱なるのみならず、又益〻財政の困難を大ならしめたり。これ神宗に至りて王安石をして富國強兵の策を立てしめたる所以なり、

(ヘ)青苗法。王安石の立てたる新法の一にして、插苗の時期に朝廷より資金を百姓に貸し、秋熟の時期に二分の利子を添へて返却せしむ、之を青苗錢といふ。神宗即位の二年、之を行ふ。新法中この法の弊害最甚しかりしかば、大に學者の攻撃を受け、中にも蘇東坡の言痛切を極めたり。

(ト)宋の朋黨の爭(王安石の新法に就て)。新法出づるや、學者人民概ね之を喜ばず。朝臣中、帝の代り、攝政の代る毎に、新法黨(熙豐黨)舊法黨(元祐黨)と互に政權を爭ひ、相陷擠するを力めたりしが、徽宗の時蔡京出でゝ全く舊法黨を除く。兩黨の首領にして、一たび政權を握りしものは、王安石(新)、司馬光(舊)、章惇(新)、韓忠彥(舊)蔡京(新)なり。

(チ)汴京。五代の時には大梁と稱し、宋代りてより汴京といふ。今の河南省開封府なり。皇紀千七百年代の末金人之を陷れ、徽宗、欽宗を虜へて北に還り

しかば、欽宗の弟高宗は南、應天に至りて位に即き、後臨安(杭州)に遷れり。

(リ)宋代の佛教。　佛教の中、禪學最も行はれ、當時の儒者殆ど之を學ばざるなし、故に禪學が儒學に及ぼせる影響大にして、陸象山を經て明の王陽明に至りて、その跡明かに現はる。

(ヌ)南宋と金との國都及び其の分領せし疆域。　皇紀千八百〇一年、(1141)宋は金と第三回の和を媾じ、兩國分領の疆域を定む。即ち東は淮水、西は大散關(陝西省鳳翔府の内)を以て兩國の界とし、以北を金の領土、以南を宋の領土とす。南宋は臨安(杭州)に、金は汴京(開封府)に都す。

(ル)李綱、韓世忠、岳飛。　共に南宋の末運に際し、主戰論を唱へて金を退くること數ゝなりしが、秦檜寵を高宗に得て一時の安を偸み、切りに和議を主張し、遂に此等忠烈の士を除きて、金に臣屬せり。

(ヲ)韓侂胄。　宋の光宗の時の權臣にして、朱熹以下當時の名士學者を指して黨人といひ、僭横を極めしが、後金と隙を開き遂に誅に伏す。

(ワ)朱熹。　朱熹は閩の人、程子の學統を傳へて之を大成せり。その學、居敬窮理實踐を主とす。二程の後宋儒皆禪味を帶ぶ、朱熹の學絶えて此弊なし。これ朱熹の偉なるを證するに足るべし。夙に我國にも入り德川氏の世殊に盛なりき。朱熹又頗る著述に富み、中にも四書集註、通鑑綱目、近思錄最も世に知らる、晩年權臣韓侂胄に憎まれ、その學を僞學その徒を黨人と誣ひられ、且官爵を削られたり。

(カ)唐宋八大家　唐の韓愈、柳宗元、宋の歐陽修、蘇洵、蘇軾、蘇徹、王安石、曾鞏を竝び稱して唐宋兩朝の八大文章家といふ也。

第十七　元

百七十七　蒙古の興起

蒙古はもと黑龍江の支流斡難(オーノン)、怯魯連(ケルレン)二河の水源なる不而罕(ブルハン)(肯(ケン)特)山附近に居りたる室韋の一部にして、世遼金に屬せしが、十九世紀の初、(西暦十二世紀

の中頃)合不勒その部長となるや、金と戰て勝ち、和して後、蒙輔國王に冊せらる。その孫也速該に至り、四隣の諸部を併せ、勢漸く強大となりしが、塔々兒部の爲に殺され、その長子鐵木眞纔で蒙古の部長となる、後の成吉思汗是なり

成吉思汗は、稀世の英傑にして、雄略宇内を呑み、四方を攻伐して蒙古大帝國の基を建てたり。

百七十八　成吉思汗の事蹟

成吉思汗は初の名鐵木眞、蒙古部長也速該の長子なり。父の後を嗣ぐや、先づ塔々兒部を伐ちて父仇を報じ、次で克烈、乃滿の諸部を滅ぼして内外蒙古の地殆ど其有に歸するや、皇紀千八百六十六年(1206 A. D.)遂に大汗の位に即き、成吉思汗と號す。尋で、南西夏を降し金を侵して河北の地を奪ふ、又哲別を遣りて西遼を伐ち屈出律を殺して其地を收めしめ、千八百七十八年(1218 A. D.)その四子朮赤、察合台、窩濶台、拖雷と共に親征の軍を起し、花剌子模(南アラル河以東)國に侵入して遂に之を滅し、更に二將を遣りて、西阿羅思(ヤロシ)の諸侯を破り、東に歸る。五年の後、成吉思汗は西夏を滅ぼし、直ちに金を侵さんとし兵を發せしが、六盤山(甘肅省寧夏府附近)に至りて病んで歿す、時に年七十二、之を元の太祖とす(皇紀千八百八十七年 1227 A. D.)

百七十九　成吉思汗西征の原因

初め乃滿の破るゝや、太陽罕の子、屈出律、西遼に奔り遂に之を滅ぼしてその地を奪ふ。蒙古の南、遼、金を伐つに當り、屈出律その虚を襲はんとす。成吉思汗乃ち其將哲別を遣し遂に屈出律を伐ちて之を殺し其地を略せしかば、蒙古は直に花剌子模と境を接せり。偶〻花剌子模人、蒙古の隊商百餘人を殺し、蒙古使を遣りて其罪を詰りしに、又之を殺せしかば、成吉思汗怒りて其四子と共に親征の軍を出すに至れり。

百八十　蒙古興隆の原因

成吉思汗位に即きてより僅に二十年にして蒙古は非常なる大版圖を有せり。その主なる原因は、(一)蒙古の大汗は、クリルタイと稱する大會に於て全國

人に最重望ある英傑の推戴せられたるものなること。(二)その騎兵の精鋭なること、(三)その軍規の嚴肅なりしこと。(四)蒙古兵は從軍中も納稅の義務あるが故に財源に窮せざること等なり。

百八十一　拔都の西征

太祖死して、窩濶台(太宗)嗣で大汗となり哈喇和林(外蒙古オルホン河の西)に都を定め、直に兵を出して金を滅し高麗を破り、東方稍〻事なかりしかば、乃ち西方を經略せんと欲し、皇紀千八百九十六年(1236 A.D.)その姪拔都に命じ、貴由・蒙哥等と共に、五十萬の大軍を率ゐて阿羅思を征せしむ。拔都沿道の諸部を降し、翌年阿羅思に入り、「モスカウ」「キエフ」を陷り、更に西して波蘭及匈牙利を侵し、至る所殺掠を恣にす。遂に波蘭及び獨逸武士の同盟軍を「リーグニッツ」Liegnitz (普魯西亞のシレジア州に在り)に破り、全歐爲めに震駭す。實に皇紀千九百〇一年(1241 A.D.)なり。會〻太宗死去の報ありしかば、拔都は諸將をして東に歸らしめ、自ら留まりて阿羅思(ロシア)を領し、欽察(Kipchak)汗國を建つ。

百八十二　蒙古の南征

太宗の後、定宗(貴由)立ちしが三年にして死し、憲宗(蒙哥)立つに及び、弟忽必烈をして、四川雲南の地に據れる大理國を降さしむ。忽必烈進んで吐蕃(チベット)に入り別に兀良哈台を遣して交趾を降す。

百八十三　旭烈兀の西征

旭烈兀は憲宗の弟なり。西域の回教徒を平定せんため、天山の北より葱嶺の西に進み、皇紀千九百十八年(1258 A.D.)八吉打 Bagdad を陷れ、サラセン帝國 Saracen を滅ぼし、益〻西してシリア Syria を略し、將に埃及に渡らんとす。偶〻太宗の訃來りしかば師を旋す。後ア〻 Amu 河以外の西方亞細亞一帶の地に伊兒汗國を建つ。

百八十四　憲宗の南侵　世祖の即位

憲宗既に南邊を定め將に宋を滅ぼさんと欲し、其弟阿里不哥を喀喇和林に留め、自ら兵に將として南、四川を攻む。忽必烈兀良哈台、亦各〻軍を進めて湖南

湖北の地に至る。宋將賈似道、密に和を乞ふ偶〻憲宗歿して、阿里不哥蒙古の大汗たらんとせしかば、忽必烈賈似道の請を容れ、江北割讓と歲幣とを約して北に歸り自ら大汗と號す(1260 A.D.)世祖是なり。尋て阿里不哥を降し、後國號を元と改む時に千九百三十一年(1271 A.D.)なり。

百八十五　宋の滅亡

世祖位に即くに及んで、使を宋に遣して土地と歲幣とを求む賈似道約に背き反て使者を殺しゝかば、世祖大に怒り、將伯顏をして大擧南侵せしむ宋の恭帝賈似道を退け、天下に詔して勤王の兵を募る。文天祥、張世傑等召に應じて能く戰ひしが、皆蒙古の兵に破られ、恭帝終に元に降る、その後、遺臣等再擧を圖りしが皆敗死し、皇紀千九百三十九年(1279 A.D.)世祖は支那を統一せり。

百八十六　元軍の大敗

世祖は、高麗王を介して屢〻我日本を招致すれども我は答へず、その後、時の執權北條時宗、却て元使を斬りしかば、世祖大に怒り、宋を滅したる勢に乘じ、皇紀千九百四十一年(1281 A.D.)大擧海を渡りて來り寇せしめ、颶風の爲めに大敗してより意を日本に絕ちしが、尋いで、緬國及占城を降すに及んで南海諸國相率ゐて朝貢せり。是に於て蒙古の版圖は亞細亞、歐羅巴の二大洲に跨り、此に空前の大帝國を建設するに至れり。

百八十七　蒙古四汗國の始祖及疆域

蒙古の大帝國は、內に諸王族の私領を含むその大なるものを左の四とす。

國名	始祖	疆域
伊兒汗國	旭烈兀	阿母河以外の西方亞細亞一帶
欽察汗國	拔都	東はキルギス荒原より西は匈牙利の國境迄
察合台汗國	察合台	西爾河外天山附近一帶
窩濶台汗國	窩濶台	阿爾泰山附近

百八十八　海都の事蹟

初め憲宗の大汗となるや、太宗の子孫たる窩濶台汗國の諸王等皆不平なり而して太宗の孫、海都その領袖たり。世祖の即位するや、阿里不哥を助けて成らず、遂に其地に據りて叛す。既にして察合台汗及欽察汗共に海都に與し、終に三汗國の諸王は海都を推戴して大汗となす。當時西方に在ては獨り伊兒汗の世祖を助くるあるのみ。海都は遂に察合台汗と兵を合せ頻年元を侵しゝが、元の將伯顏能く之を防ぎ世祖死して成宗位に即くや、海都また屬入寇し、幾くもなくして死し、武宗の時其の子察八兒共に元に降り、窩濶台汗國遂に亡ぶ。(1310 A. D.)

百八十九　元衰滅の原因

(一)元に一定の帝位繼承法なく、相續の際必ず多少の紛爭を生ずるを以て權臣專橫の端を啓きしこと。(二)交鈔(紙幣)の濫發は物價の騰貴を招きて百姓益〻困難せしこと。(三)喇嘛權を專らにして淨財を貪り天下苛斂に苦みしこと。(四)蒙古人を重用して漢人の怨を買ひたること。

百九十　蒙古時代東西交通の盛なりし所以

(一)元の世祖の統一以後歐亞二洲間に割據せる小國亡びて、商賈の往來自由となりしこと。(二)政治上軍事上の目的により道路を開き宿驛を設け、守備隊を置きたるがために旅客の危險を減じたりしことは東西交通の隆盛となりし大原因なり。

百九十一　注意すべき事項

(イ)「クリルタイ」。蒙古の大汗は父子相續にあらずして全國中最重望あり且つ力量ある人を推戴するの習慣法に從ふ。「クリルタイ」はこの大汗の選定、並に征討の大事を決する爲に開かるゝ大會議の謂にして、蒙古の諸王族、諸將及蒙古に屬する諸部の酋長、諸國の君主等によりて組織せらる。忽必烈一たび「クリルタイ」の決議を待たずして大汗となりしより此古制止む。

(ロ)賈似道　賈似道は宋の理宗に仕へし奸臣なり。蒙古の軍宋を侵せる時、之を防ぎて利あらず、窃に臣と稱して和を乞ふ。(1259 A. D.)忽必烈北に還るに

及んで似道帝を欺き蒙古敗退すと奏し、爾來大に寵任せらる。度宗立つや政を專らにし、苟安を偸みしが、世祖の爲めに前約を徹せられて姦謀顯はれ、元軍の南侵するに及んで遂に誅に伏す。

(ハ)耶律楚材(エリツツツァイ)。遼の宗族にして、後蒙古に降る。儒術を以て厚く太祖に信任せられ、内治に關して畫策する所頗る多し。太祖の死後太宗に仕へ中書令となり國政に參ずること前後二十年にして死す。蓋し元初第一の文臣なり。

(ニ)文天祥。文天祥は宋末忠烈の士なり。恭帝の時、元兵の入寇するに當り、勤王の師を興し婿和の使となりて元軍の陣に至りしが、和成らず。既にして恭帝元に降り、端宗立つや、幾もなくして天祥元の兵と戰て大に敗れ、後海豐に走らんとして、途に元兵に捕へらる。元將張弘範切に歸順を勸むれども聽かず、燕京に至りて獄に繫がれ、有名なる正氣歌を作りてその志を示し、終に獄中に死す。

(ホ)崖山。元の將張弘範が宋の張世傑と戰て大に之を破りたる處にして、宋

室最後の戰なり。此戰終るや、宋將陸秀夫は帝を負ふて海に投じ諸臣從死するもの十餘萬人、世傑は安南に赴き再擧を謀らんとして海上難に逢ひて死す。宋の遺族全く盡く。

(ヘ)拔思巴(パスパ)。吐蕃の喇嘛なり。世祖吐蕃に入り和を約して歸るの時伴ひ來り、帝となるの後之を拜して帝師とし、吐蕃全土を統べしむ。拔思巴また世祖の命によりて蒙古文字を作る。

(ト)范文虎。元の世祖の命を受け弘安年間我國に寇し大敗して歸れる元の總大將なり。

(チ)マルコ・ポーロ。Marco Polo 伊太利國ヴェニスの商人にして皇紀千九百三十五年(1275 A. D.)陸路支那に來り、元の世祖の優遇を受け、屢〻地方の官吏に任ぜられ、留ること十七年の後、海に浮んで歸國す。此大旅行の記事今尙存し、大に學者間に貫重せらる。

(リ)喀喇和林(カラコルム)。蒙古初代の都にして、太宗始めて此に居り、定宗憲宗を經て

世祖に至りて始めて燕京(北京の古名)に遷る。今のオルホン河の西に在りき。

(ヌ)蒙古の盛時に於ける版圖。世祖の初年即ち蒙古の極盛時に於ける版圖は、北方亞細亞の北部と、南方亞細亞の南部とを除き亞細亞大陸を横貫して歐洲に跨る。詳くいへば、支那の全部、朝鮮、中央亞細亞、阿富汗斯坦、印度の西北小部、交趾、歐洲の露西亞、西比利亞の南部一帶を包括す。

(ル)施耐奄。元の小說家にして支那の小說中前後無比と稱せらるゝ有名なる水滸傳の著者なり。

第十八　明

百九十二　明の興起と元の滅亡

元の末世、內は賦斂重くして民心益〻離叛し、外は察合台、伊兒欽察の三汗國兵亂相繼ぎて愈〻衰へしかば、漢族所在に叛して、中原麻の如く亂れ、群盜多く帝王を稱す。此時に當り、安徽に起れる郭子興の部將に朱元璋といふものあり、もと濠州(今の鳳陽府)の窮民にて僧となりて乞食までしたりしが、後、大に人心を得て士民の戴く所となり、子興に代りて、金陵(江蘇寧府)に據り、兵を出して陳友諒、張士誠、方國珍を破り、悉く江の南北を略し、遂に徐達、常遇春等をして北に向うて元を伐たしむ、時に元の權臣相爭ひ、兵を出すの暇なかりしかば、徐達等遂に燕京を陷れ、順帝北に走りて、元亡ぶ、朱元璋帝位に卽く、之を明の太祖(洪武帝)とす、實に皇紀二千二十八年(1368 A. D.)なり。太祖尋で將を遣して蒙古、雲南の地方を平定し、天下悉く明に歸す。

百九十三　明の太祖朱元璋の政治

太祖天下を統一せし後、邊要の地に行都指揮使を置きて國防を嚴にし、內は租稅を輕くし、敎化を盛にし、封建の制を復して帝室の藩屛とす、流石に匹夫より起りて帝業を成せる人だけありて治績多し、たゞ性殘忍にして猜忌多く後患を恐れて多く武功の臣を殺せり。

百九十四　靖難の役

太祖子弟を分封して征伐の自由を與へしかば漸く尾大の勢をなし、太祖死して惠帝立ち、諸侯の力を殺がんとするや、燕王棣先づ君側を清むるを名として燕京に叛し、大擧して南侵し、自ら靖難の兵と稱す。明初の宿將皆既に太祖の誅戮に逢ひ、今や諸將の能く之を防ぐものなかりしかば、金陵遂に陷りて、燕王位に即く、之を成祖（永樂帝）とす。（一千二百十六年）帝都を燕京に遷し、北京と改め金陵を南京といふ。成祖亦雄略あり、四方を經營し、大に明の國威を振張せり。

百九十五　方孝孺

方孝孺は明の惠帝の儒臣なり。燕王の南侵に當りて、媾和の策を立てゝ燕王に斥けられ、乃ち固く城を守りて燕軍を防ぎしが、宦者の敵に通ずるにより て、城遂に陷る。既にして成祖方孝孺をして即位の詔を草せしむ。孝孺節を守りて聽かず、帝怒つて孝孺及その宗族朋友門人凡數百人を殺す。

百九十六　鄭和

鄭和は成祖の宦者なり。曩に金陵の陷らるゝや、惠帝出奔して行く所を知らず、成祖その再擧を恐れ鄭和をして水軍を率ゐて南海諸國を搜索せしむ。終に帝を得ざりしが、鄭和の出征七回に及びしかば是より明威南洋に振ひ朝貢するもの三十餘國に及べり。然れども、後に宦官專横の患を殘したるは成祖の失策なり。

百九十七　帖木兒の偉業

蒙古の疎族帖木兒 Timur は豪邁にして大志あり。夙に成吉思汗の雄圖を慕ひ世界を統一せんと欲し、諸汗國の崩壞に際し、渴石より起り東葱嶺を踰えて二千廿九年（1369 A.D.）察合台汗國を滅ぼし都を撒馬兒罕に奠めたり。尋て伊兒汗國を滅し、更に露西亞に入りて欽察汗國を定め、兵を轉じて印度を侵しが、偶阿斯曼國王バヂャゼッド Bajazit の東侵を聞き、急に西に歸り、アンゴラ Angora（1402 A.D.）の一戰、大に之を破り、小亞細亞を定め、ついで明を滅して世界統一の實を擧げんとし、兵を率ゐて東に向ひしが、中途にして病にかゝり、大志を齎らして訛打兒 Otrar に歿す。時に皇紀二千六十五年（永樂三年 1405 A.D.）なり。

百九十八　露西亞帝國の起源

月即(ベツク)別の欽察汗たりし時、阿羅思(ロス)の「モスカウ」公宜萬(イヴアン)一世(Ivan I)叛亂討平の功を立て、頗る汗の信任を得、終に阿羅思の大公となり、(千九百八年)汗に代りて國内の租稅徵集を掌る。これより宜萬の權勢益〻盛にして、露西亞勃興の基礎を建つ。皇紀二千百四十年(1480 A. D.)宜萬三世は欽察汗國を滅ぼし、その孫宜萬四世は始めてツアールの號を用ゐ蒙古族の諸汗國を併呑せり。

百九十九　土耳古帝國の起源

隋唐の際、中央亞細亞に瀰蔓せる突厥(トルコ)族は、成吉思汗の西征に逢ひ逃れて小亞細亞に居りしが、皇紀千九百六十年頃(1300 A. D.頃)阿斯曼(オスマン) Othman その部長となり、伊兒汗國の衰退に乘じて小亞細亞を奪ひて阿斯曼帝國を建つ。今の土耳古帝國是なり。バヤゾットはその曾孫なり。

二百　宦者專橫の由來

明の太祖は歷代の弊に鑑み、宦者の參政を嚴禁せしが、成祖の簒立は宦者の內應與て大に力ありしかば、成祖之を德とし、漸くその禁を弛めたり。殊に宦者鄭和に惠帝搜索の大任を委ねたるは成祖の大失策なり。是に於て宦者の勢次第に加はり、英宗の時、王振、曹吉祥あり、憲宗の時、汪直あり、共に政權を擅にして國事を誤り、爾後宦者益〻專橫にして明室愈〻衰ふ。

二百一　土木の變

元末、外蒙古の西部に瓦剌(ワエラ)部あり。也先(エスン)その部長となるや、明の振はざるに乘じて南侵す。明の英宗、宦者王振の言に從ひ、親ら將として北上し、二千百九年(1449 A. D.)瓦剌の兵と土木(直隸省宣府の內)に戰ひ、大敗して虜となる。敵兵直に北京に逼る。于謙等景帝を擁立して之を破りしかば、和成り、英宗南に還る。

二百二　韃靼の俺答

俺答(アルタン)は元朝亡ぶるの後、漠外に據れる元室の裔にして、その祖世々韃靼(タタル)可汗と稱せしが、後領土分裂し、俺答は陰山附近の地に據りて土默特(ウメド)部の祖となり、頻りに明に入寇す。時に明の世宗位に在り、權臣嚴嵩苟安を偸みて、邊防を

忽にせしかば、二十餘年の間、支那本部の北方は韃靼人の蹂躙する所たり。既にして倭答吐蕃を征し喇嘛に歸依せしより、漸く殺戮を厭ひ、穆宗の時遂に好を明に通ず。(1572 A. D.)。

二百三　倭寇

倭寇とは、我國南朝の遺臣が西國の流民と共に高麗及元の東海岸を侵したるを始めとし、明の太祖の時また往て寇し、尋で成祖の時我足利義滿、明と隣交を修め貿易を爲しゝかば、應仁の亂後四方不逞の徒、商賈と稱して明に渡り、遂に海賊と變じ、漸く內地を侵掠し、勢猖獗を極めたるものを云ふ。皇紀二千二百二十三年(1563 A. D.)明將俞大猷等、平海衛(福建省興化府)に於て倭寇を擊退せしより、その患殆んど止みしも、猶臺灣に據りて近海沿岸に出沒せり。

二百四　朝鮮の建國

高麗は曩に元の東征に加はりてより國力益〻疲弊し、後權臣政を亂しかば、恭愍王歿せし後、其の將李成桂諸將に推されて位に即き國號を朝鮮と改め都を漢陽(今の京城)に定め明の封冊を受けて其の外藩となる、之を今の朝鮮の太祖とす。實に皇紀二千五十二年(1392 A. D.)なり。

二百五　萬曆朝鮮の役

朝鮮の太祖入世の孫宣祖(李昭)の時、我國の豊臣秀吉、朝鮮を介して明を伐たんとせしに、宣祖之を拒みしかば、秀吉、大軍を起して朝鮮を攻む。(我文祿元年 1592 A. D.)明將祖承訓、李如松相前後して我軍を防ぎ、連りに敗れて和を媾せしが、幾もなくして和破れ、交戰數餘の後、秀吉病んで歿し、我軍東に還るに及んで(慶長三年 1598 A. D.)宣祖乃ち京城に入る。

二百六　顧憲成と東林黨

顧憲成は有名なる明末の學者にして、神宗の時、諫爭して罷められ、鄉に歸りて東林書院を建て、講學に託して學者を集め朝政を誹議す、朝臣呼んで東林黨といふ。

二百七　明の滅亡及其の原因

(一)宦者の專橫により朝政先づ亂れ(二)倭答の入寇と倭寇とによりて朝廷の威信益〻衰へ(三)秀吉征韓の際、兵を出して朝鮮を援けたるため財政頗る困難に陷り(四)財政の窮乏を救はんとして鑛稅を起し、その弊害全國に及び(五)東林黨起りてより朋黨の爭漸く加はり宦者魏忠賢出づるに及んで正義の士を殺し、奸邪の輩國政を弄びたるに(六)熹宗暗愚にして奸臣の言を信じたれば(七)新に起れる滿洲人は破竹の勢を以て遼東を定め、今や明の東境に迫れり(八)されば熹宗死して弟毅宗立ち、政を改めんとしたれど、此時人心悉く明室を離れ、終に張獻忠、李自成等の大賊陝西より起り、中原忽ち麻の如くに亂るゝに至りぬ(九)されど成祖の時、地方藩鎭の勢を殺ぎたりしを以て、今や此等の賊を防ぐものなく、加ふるに滿洲人の東北邊を侵すありて明廷の之に力を盡す能はざるに乘じ、李自成は遂に北京を陷し、毅宗自ら縊つて死し、李自成乃ち帝と稱す、明は太祖即位より二百七十七年にして亡びぬ。時に皇紀二千三百〇四年(1644 A. D.)なり。

二百八　明代著名なる學者

宋濂は方孝孺の師にして明初第一の儒者なり。王守仁は宋以來天下を風靡せる朱子學に反對して良知、知行合一の說を唱へ、明の學風を一變す、即陽明學の祖なり、その弊は所謂心學又は狂禪となる。黃宗羲、顧炎武等は明末より清初に跨りて出で、陽明學の弊に堪えずして考證學を創めたる大儒なり。

二百九　莫臥兒帝國の興亡

皇紀二千百年代の末期、阿富汗斯坦に據りたる「バベル」Babar (帖木兒の孫五)は印度の內亂に乘じて之を侵し皇紀二千百八十六年(1526 A. D.)パニパットの戰に大勝を得て悉く北印度を略し、莫臥兒(蒙古の訛音)帝國を創建せり。其孫アクバル Akbar 大帝に至りて、更に中印度を征服し、アム河以南ヒンドヤ以北の大領土を開き、都をアグラ(デーリの東南)に奠む。アクバル乃ち婚をラヂプト族の諸侯と通じ、非回教徒稅を廢して溫都教徒の歡心を求め又制度を定め弊風を改め、文學を奬勵して、勢頗る盛なり。其曾孫英主アウランゼブ Aurungzebe の經略

により、アクバル大帝歿後凡百年にして印度全主始めて莫臥兒帝國の有となる。然れども其後内亂相繼ぎ、又波斯の入寇に逢ひて、國運益衰ふるに際し、二千二百年代の末より始まれる英人の印度經略は漸く其歩を進め皇紀二千五百年頃終に全印度を征服し、二千五百十七年(1857 A. D.)莫臥兒帝の尊號を剝ぐに及び、莫臥兒帝國はアクバルの建國より三百三十一年にして滅ぶ。

二百十　歐人東漸の由來

(一)土耳古國の勃興以來歐洲商人の東洋に來るもの、唯アレキサンドリアよりナイル河を溯り、砂漠を横ぎりて紅海に出でそれより印度洋に至るの航路に由るの外なかりし爲め印度新航路發見の必要ありしに、(二)マルコ、ポロ以下東洋旅行家の紀行は東洋諸國が稀有の富有として皷吹されたるにより、益東洋との交通を渇望せしめたり、(三)殊に西班牙、葡萄牙の兩國人は回教徒を撲滅して耶蘇教を以て之に代へ、更に回教徒の本國をも改宗せしめんとの希望を懐きて東洋に來るの念切なりしに當り、(四)西暦十五世紀の前半、葡萄牙の王子ドン、ヘンリ Don Henry は大に航海探險を奬勵し、(五)西暦十四世紀の初發明せられたる羅針盤の航海に應用せられたるより、冒險家頻に出で(六)終に西暦一四九二年コロンブスの亞米利加大陸發見となりしが(七)西暦一四九八年(明應七年、明の孝宗弘治十一年)五月葡萄牙人ヴァスコ、ダ、ガマ Vasco da Gama はアフリカの南端を回航して始めて印度のマラバール海岸に到著し、茲に歐洲人積年の望を達することを得たり。

二百十一　葡萄牙人の東洋貿易

葡萄牙人ヴァスコ、ダ、ガマは、國王の命を奉じ、喜望峯を廻りて、印度の馬拉巴爾に達せしより(一千八百五年)同國人の東航するもの益多く、十二年の後、葡萄牙領印度總督アルブケルク Albuquerque は印度西海岸の臥亞 Goa を根據地とし、遠く南洋諸島及支那海岸の諸港に商館を立て、更に澳門を略し、尋で我國に至り、凡一百年間東洋貿易の主權を握りしが、和蘭人來るに及んで漸く衰運に向へり。

二百十二　西班牙人の東洋貿易
比律賓群島の占領

皇紀二千百八十年(1520 A.D.)西班牙人マゼラン Magellan は亞米利加の南端を廻りて太平洋に出でしより。西班牙人の西航するもの多く、四十五年の後には比律賓(フイリツピン)群島 Philippines を占領し、馬尼剌(マニラ) Manila を根據地とし、我邦人及支那人との貿易を營みしが、到る處、葡萄牙人との競爭に敗れ、大に振ふ能はず、和蘭人來るに及んで全くその商權を失ふ。

二百十三　明代の天主教

明初耶蘇教を禁せしが、歐洲に勢力を失ひたる舊教徒の一派、耶蘇會徒(ジエズウイツト Jesuits)は新航路の開通と共に盛んに東方に渡航し、皇紀二千二百年の頃臥亞(ゴア)に本部を置き爾來大に傳道に力めたり。有名なる宣教師マテオ、リッチ Matteo Ricci(利瑪竇)は明の神宗の時支那に來り、萬曆廿八年(1601 A.D.)北京に入り、神宗の許を得て布教に從事せり、支那に天主教といふ。

二百十四　注意すべき事項

(イ)靖難。明の成祖簒立する時、自ら靖難の兵と號して、南金陵に迫れり。故に此戰を靖難の役といふ。(百五十一頁ヲ見ヨ)

(ロ)兪大献。兪大献は戚繼光等と共に明の世宗の末年、倭寇を福建の平海衛に敗りて、明初以來の大患を除けり。

(ハ)李成桂。李成桂は今の朝鮮の太祖にして、皇紀二千五十二年高麗に背きて自立せり。

(ニ)李昭(リヒン)は豊臣秀吉征韓の時朝鮮王にて太祖八世の孫なり。

(ホ)東林黨。明末學者の政治を議するものを朝臣稱して東林黨といふ、名儒顧憲成實に其領袖たり。

(ヘ)フランシス、サビエル。Francis Xavier(方濟各)サビエルはジエズウイット派の宣教師にして、天文十八年(1549 A.D.)我國に航し、京都、周防、豊後地方に布教せり。蓋し我國には初來の耶蘇宣教師なり。

(ト)マテオ、リッチ(利瑪竇)。利瑪竇はヴェズウイット派の宣教師にして二千二百三十九年初めて支那の廣東に來り、布教すること廿餘年後北京に入り、明の神宗の許可を得て會堂を建つ、(1601 A.D.)是より同派の布教漸く功を奏せり。リッチの著はせる天主實義はその文章、中國の名家をも凌ぐと稱せらる。

(チ)蒙古三汗國の末路。元の東方に衰微する間に、西方の三汗國も亦次第に衰へたり。蓋その相續法不完全にして繼承の際宗族相爭ふに乘じ、國内紛亂するに由る。皇紀二千年代の初、中央亞細亞に英傑帖木兒(テムール)といふ者起り、先づ時の察合台汗ユリアスを逐ひ、ついで伊兒汗國に侵入せり。この汗國は始祖旭烈兀(フラーグ)の曾孫合贊(ガザン)の時、國運甚盛なりしが、その死後内亂絶えず、又欽察汗の侵入を受けて大に衰へたりしかば、帖木兒は容易に之を併呑せり。時に扱都後裔トクタミンは帖木兒の後援を得て欽察汗の位に在りしが、終に帖木兒に降り、帖木兒の死後、内訌相つぎ、汗國殆んど解崩せしかば、モスコウ太公イヴァン三世は諸小汗國と同盟して時の欽察汗アーメドを討ちて之を殺し、欽察汗國茲に亡び、イヴァンは全オロス(露西亞)の主となり、蒙古より獨立せり。(皇紀二千百四十年)

(リ)レガスピー。西班牙の人にして、新航路によりて東に來りフィリッピン群島を占領し、(1565 A.D.)數年の後マニラを建てゝ西班牙東洋貿易の根據地と定めたり。

第十九　清

二百十五　後金の興起

金亡びてより、通古斯(トングス)族の勢久しく微々たりしが、明の時、今の盛京の東北に據れる滿洲部に覺羅(ギョロ)部あり明の英宗の時、赫圖阿拉(ホトアラ)(興京)附近に移り、奴兒哈赤(ヌルハチ)その部長となるに及んで先づ滿洲海の諸部及び蒙古族たる科爾沁(コルチン)の諸部を統一し、尋で同族たる扈倫(フルン)、長白山東A.D.)遂に國號を建てゝ後金(アハン)といひ、汗の位に即く、清の太祖、即ち是なり。然る

に扈倫の葉赫部獨り強を恃んで降らず、反つて明、朝鮮と同盟して滿洲を侵さんとせしかば、太祖は精兵を率ゐて大に之を破り、ついで葉赫部を滅ぼし、都を瀋陽（今の奉天府）に都せり、是に於いて今の滿洲全土は强盛なる一君主の統一する所となれり。

二百十六　清の太宗の經略

太宗（太祖の子）即位の初、朝鮮と和し、尋で科爾沁、鄂爾多斯、土默特諸部と力を合せ、韃靼可汗林丹を伐ち滅し、漠南蒙古を定めて、遂に國號を清と改む（二千二百九十六年）時に朝鮮尚は明と通せしかば、翌年、太宗は之を征して屬國となす。

二百十七　清の世祖（順治帝）の統一

李自成、北京を陷るや、明將吳三桂清に降る。太宗の子世祖之を援けて李自成を討平し、遂に都を北京に遷す。時に明の遺臣史可法等清に抗せしが多鐸來り伐つに及んで戰利あらず、南京遂に陷る。清軍益進んで明の宗族の所在に割據するものを平げ、遂に一統の業をなす。時に皇紀千三百廿一年（1661 A.D.）

二百十八　鄭成功（朱成功）

鄭成功は明の遺臣にして、父は鄭芝龍、母は我肥前平戸の人なり。明亡ぶるや、明の宗族魯王を奉じて久しく厦門に據りしが、戰利あらず。後臺灣に退き、悉く島内の和蘭人を逐ひ、援兵を我國に乞ふて聽かれず、遂に志を得ずして歿し（康熙元年 1662 A.D.）、其孫鄭克塽に至りて清の聖祖に降れり。（1683 A.D.）

二百十九　三藩の叛亂

世祖は明の遺族の江南に出沒するを憂へ、明の降將吳三桂を雲南に、尚可喜を廣東に耿繼茂を福建に封じて之を鎮定せしむ。聖祖既に天下を一統して三藩獨り强大なりしかば、窃に之に備ふる所ありしに、三藩亦自ら安んぜず。吳三桂遂に他の二藩を誘うて兵を起すや、清の辮髪令を憤りし漢族は、三藩に響應して江南大に亂れしが、遂に清軍の爲めに破られ、前後九年にして三藩の亂悉く平ぐ。（二千三百四十一年 1681 A.D.）

二百二十　尼布楚の條約

聖祖既に南方を平定し、北の方哥薩克を攘はんと欲し、雅克薩（アルバジン）を攻め、且つ書を露西亞帝ペートル一世に贈り、國境を定めんことを求む。兩國の使節、尼布楚（ネルチンスク）Nertchinsk（シルカ河の中流）に會して露國は外興安嶺以南の地を清に讓れり。（皇紀二千三百四十九年　1689 A.D.）

二百二十一　聖祖（康熙帝）の偉業

聖祖は唐の太宗にもまさる英主にして、國基を定め學術を興し偉績大に擧る。前には三藩の叛を平げ臺灣を降して中國を安んじ、後には噶爾丹を伐ち、喀爾喀部を定めて內外蒙古の地を收め、尋で圖伯特を服し、又尼布楚條約によりて露西亞の南下を止めしかば、清の國威大に振ふに至れり。帝又大に學問を好み碩學一時に輩出す。佩文韻府、康熙字典等は聖祖の勅撰に係り、又天主敎師を重用して西洋の新學藝を輸入せり。實に古今に稀なる英明の天子といふ可し。

二百二十二　高宗（乾隆帝）の偉業

聖祖の後、世宗を經て、高宗立つに及び準噶爾を伐て終に之を平定し、次で喀什噶爾・葉爾羌を降し、天山南北路悉く清の版圖に入る。後阿桂を遣りて貴州の苗族を討平せしめ、更に兵を發して緬甸、暹羅、安南、廓爾喀等を征せしめ、或は降し或は和を許して師を旋す。是に於て清の版圖は東は海より西は葱嶺に及び、北は外興安嶺以內の地を包み、南は喜馬拉山下に達せり。而して帝又文學を好み、天下の碩儒を招きて稀世の盛運を興したるのみならず、帝自らも博學強記にして多くの著述あり而して四庫全書總目は當代に成れる浩瀚なる編纂物なり。

二百二十三　清初の學術

陽明學の餘弊は、明末の學術界に反動を來し、空疎なる議論を斥けて、眞摯なる研究を力むるに至れり、之を考證の學といふ。明末黃宗羲此學風を創め、清初に至て顧炎武、閻若璩、毛奇齡最も有名にして專ら經史の研究に從ひ康熙

乾隆の際極盛に達す。後之を漢學といふ。此他小說家金聖嘆あり、史家趙翼あり、皆一代の泰斗たり。

二百二十四　清初の耶蘇教科學との進歩

明末にマテオ・リッチ Matteo Ricci 入りて神宗の信任を得、次で來れる宣教師は皆天文曆法等に精通せるの故を以て明廷に重んぜられ、王族大臣の耶蘇教に歸依するもの多かりしが、清の世祖の北京に入るや、又耶蘇教徒を厚遇し、アダム・シャール Adam Schaal（湯若望）を擧げて欽天監（天文長）となし、聖祖もまたフェルビースト Verbiest（南懷仁）を重用せしかば、支那の天文曆法測量術は此等耶蘇教徒の傭聘によりて其面目を一新せり。その後ヴェズウィット教徒と自餘の舊教徒との間に內訌起りしが、聖祖はヴェズウィット派を保護し、他を逐ひしが、世宗の初年（二千三百八十四年）天主教（耶蘇教のこと）禁制の嚴令を下せり。

二百二十五　和蘭人の東洋貿易

和蘭人は皇紀二千二百六十二年（1602 A.D.）始めて東印度會社を立て、次第に葡萄人牙及西班牙の商民を驅逐し、尋で爪哇のバタヴィアを以て其根據地となし（二千二百七十九年）更に臺灣を占領して（二千二百八十四年）盛に我國及支那と貿易を營み、皇紀二千二百年代の末期（西曆十七世紀の初）より葡萄牙人に代りて東洋貿易の主權を握れり。

二百二十六　英吉利人の東洋貿易

英吉利人は二千二百六十年（1600 A.D.）東印度會社を建て我國及支那に貿易を試みしが、我國に於ては和蘭人に妨げられ、支那に於ては葡萄牙人に妨げられて志を得ざりしが、獨り印度に於ては葡萄牙人の抵抗に克ち、マドラスを根據地として印度の海岸に貿易を營み、當時ポンヂシェリに據りて貿易に從事せし佛人と競爭せり。

二百二十七　英國人の印度侵略其一

（クライヴの事蹟）

皇紀二千四百年代の初（西曆十八世紀の中頃）佛國の印度總督デュプレー Dup-

Lewis は印度の衰亂に乘じ、之を併呑せんとの大望を抱きしかば、英佛兩國人之より相嫉視し戰爭數年に亙れり、この間英國印度會社の書記なりしクライヴ Clive がアルコット城を襲び取つて五十日間死守したる勇氣は印度土人をして佛人よりも英人の恐るべきを知らしめたり程なくヤュプレー本國に召還せられしが、その頃ベンガルの副王スラジュドーラ Surajud Daula は突然カルカッタを襲ひ、英人百餘人を執へて黒害 Black Hole と稱する獄舍に投じ窒息して死せしめたり。此急變を聞くや、クライヴはマドラスより至り翌二四一七年(1757 A.D.)六月を以てプラッシー Plassey の野にベンガルの大軍を擊破し、副王の廢立を行ひ、且つ新領主に迫りて會社にカルカッタ附近の地の收入權を與へしめたり、此戰には佛人も敵軍に在りしが敗北の結果その勢益〻衰へたり、英國はこの年を以て英領印度帝國の始、とす。

二年を經てクライヴはカルカッタの知事に任じ翌年莫臥兒帝國の貴族に列し、數年を經てベンガル、ビハール、オリッサの收入權を會社に收めたれば、會

社の勢は漸く印度の中部に及べり。

二百二十八 英國人の印度侵略其二

皇紀二四三四年(1774 A.D.)ベンガル知事～スチングス Hastings 總督に任じ、後絶えず土豪と兵を交へ、大に英人の權勢を張り、又行政を革新し財政を整理し、內治上の基礎を定めき。後總督ウェレスリー Wellesley の時印度侵略をして全く印度に立脚地と失はしめ、一方には盟約又は戰爭に由りて漸次に諸王の領土を併呑せしかば、在職中に英國領は印度の半に達せり。この後、世の總督によりて、チベールの地を畧し、緬甸を侵し、益領地を廣めしが、ダルフージー Dalhousie に至りて文勳武功共に擧り英領印度を大成せり。然れども彼が西洋文明の注入は土人の怒を招き次の總督カンニング(Canning)上任の翌年即皇紀二千五百十七年(1857 A.D.)土兵の一揆起りしに、莫臥兒帝亦之に與りしとの嫌疑を以てその尊號を失ひ、三百年間印度に君臨せる莫臥兒帝國は亡びぬ翌年印度は會社の手を離

れて本國政府の直轄となり、皇紀二千五百三十、A. D.)一月一日を以てヴィクトリア女王 Victoria は新に印度女帝の

二百二十九　阿片戰爭の原因

英人印度貿易に成功してより、次第に支那貿易の利ぬるに至れり。

の阿片は年々巨額の輸入をなし、其弊害の及ぶ所殊に印度より

宗(道光帝)は、林則徐を擧げて兩廣(廣東廣西)の總督に任じ(二九年)その輸入を嚴禁せしむ。林則徐は乃ち廣東の英商に命を下し、阿片二萬餘函を出さしめて悉く之を燒棄し、爾後貿買するものは死刑せり。然れども阿片は英人の重要貿易品なるを以て猶ほ

しかば、林則徐は斷じて其の通商を禁ぜり。是に於て清英

徐は英邁果決識量人に過ぐ、實に清朝有數の人才なり。

二百三十　阿片戰爭

英國は通商の復舊を迫りしに林則徐は斷然之を斥けしかば、道光二十年

(1840 A.D.)英將ブレメル Bremer 軍艦を率ゐて舟山島を占領し、廣東、廈門、寧波等の諸港を封鎖し、別將エリオット Elliot は艦隊を進めて渤海に入り、白河口に逼れり。宣宗大に驚き、罪を林則徐に歸してその職を奪ひ、琦善を廣東に遣りてエリオットと和を講ぜしめしが、翌年朝議又變じて和議を破り、則徐を起し、攘夷の詔を下しぬが、清兵連りに英人に破られ、南京亦危かりしかば、清廷大に恐れ、道光二十二年 (1842 A.D.) 者英(イギリス)伊里布(エリブ)を全權大使とし、英國公使ポッチンジャー Pottinger と南京(江寧府)に會して和を議せしむ。

二百三十一　南京條約

皇紀二千五百〇二年(1842 A.D.)清英二國和を南京に結んで、阿片戰爭終を告ぐ。媾和の條件左の如し。

(一)清は償金二千一百萬弗を支拂ふこと(二)香港を英國に割讓すること(三)上海(シャンハイ)、寧波(ニンポー)、福州(フーチュー)、廈門(アモイ)、廣東(カントン)の五港を開放すること。

是より、支那は外國の侮るべからざることを知り、軍備を修め、西洋の文物を

入るゝに至れるのみならず、歐洲列國の東方經略これより益〻盛なり。

二百三十二　英佛同盟軍侵伐の原因

五港を開きてより、有罪の徒の外船に逃れて逮捕を免るゝもの多かりしかば、咸豐六年(1856 A.D.)清の官吏は何等の交渉もせず英國商船アロー號を捜索して清人十二名を捕へしに、香港の知事大に怒り、兩廣總督に訴へしも要領を得ず偶〻廣西の清民佛國の宣教師を殺しゝかば、翌七年英佛二國同盟し、兵を合せて廣東を攻む。

二百三十三　英佛同盟軍の北侵　北京の陷落

英佛の同盟軍は廣東を攻めて之を陷れ、北して白河に入り、直に天津に迫れり。此時長髮賊江南に起り勢甚だ猖獗なりしかば咸豐八年清廷は假りに天津に於て媾和の條約を結びしが、翌年六月批准交換の際英國使節を乘せた

る軍艦を砲撃せしかば、二國の兵大沽(タークー)を下し、天津を陷れ進んで北京を陷る。是より先、文宗難を熱河(直隸省承德府)に避く。

二百三十四　北京條約

皇紀二千五百二十年(1860 A.D.)英佛二軍の兵北京を陷るや、文宗は皇弟恭親王をして二國の公使と和を媾せしむ。時に露國公使イグナチェフは北京に在りて其間を斡旋し、同年十月和議遂に成る。其條件左の如し。

(一)英國及び佛國に各八百萬兩の償金を支拂ふこと。(二)英佛二國より公使及領事を支那に派出することを得ること。(三)耶蘇教公布の自由を與ふること。(四)南京條約の五港の外、牛莊(ニューチャン)、登州、潮州(汕頭(スワトウ))、臺灣、瓊州、九江、漢口を開放すること。(五)九龍半島を英國に割讓すること。

二百三十五　長髮賊の亂

清初の諸帝外征に從事せしより國庫漸く乏しく賦斂益〻重かりしかば、高宗の末年以來叛亂屢〻起りしも、未だ大患を爲すに至らざりき。宣宗の時阿片戰

事に敗れてより、大に國威を損せるに乘じ、皇紀二千五百九年(1849 A.D.)洪秀全なるもの廣西の桂平に起り、耶蘇教に附會して黨を集め、自ら耶蘇の弟と稱し、國を建てゝ太平天國といふ。此時兩廣饑饉ありしかば、起て之に應ずるもの甚多し。翌年宣宗歿して文宗(咸豊帝)立ち、諸將を遣りて之を伐たしめしも利あらず、賊軍の勢猖獗にして、連りに江南の諸城を陷れ南京に據りて、將に北京に向はんとせしかば、文宗恐れて勤王の兵を募る。曾國藩、曾國荃、左宗棠、李鴻章等之に應じ、各所に賊兵を破りしが、浙江、江蘇、江西の大半猶賊の據る處となり勢頗る熾なり。是時北京條約已に締結せられしかば、清廷は力を專らにして內亂の平定に從ひ、文宗歿して穆宗(同治帝)立つに及んで米人華爾特(Ward)、英人戈登(Gordon)を招聘し、支那人及外國人を以て洋槍隊を組織し、曾國藩李鴻章等率ゐる所の清軍を助けて賊を伐たしめしかば、皇紀二千五百二十四年(1864 A.D.)南京陷り、賊魁洪秀全毒を仰で死し、前後十五年にして賊徒悉く平定す。此亂は歷代にも稀なる大亂にて一時は清朝の安全を疑はしめたる程なりき。

二百三十六　恰克圖條約

世宗の時、露國は屢使を遣はして、通商條約を定めんことを求めしかば、清廷之を容れ、皇紀二千三百八十七年(1727 A.D.)恰克圖(キャクタ)を以て兩國の互市場となし、露人が北京に來りて通商を營み又公使館及會堂を建つることを許可せり之を恰克圖條約(アイグン)といふ。

二百三十七　露西亞の極東經略、愛琿條約

露人は通商を以て滿足せず。東部西比利亞の總督ムラヴィーフ(Muravieff)は、清の屯田兵の空しきを見て次第に黑龍江を下りて其河口を占領し、長髮賊の亂あるに乘じ、清廷に迫りて、咸豊八年(1858 A.D.)愛琿(アイグン)條約を結び、黑龍江を以て兩國の界と改め、烏蘇里(ウスリ)江以東を共有とし、露人は更に松花江、烏蘇里江の通航權を得たり。後二年を經て、露國公使イグナチェフが清廷の爲に英佛二國との媾和を全うしたるの功を負ひ、烏蘇里江東の全部を略し、翌年ウラヂオス

トック港を建て、其根據地となし、我明治八年(1875 A.D.)樺太島を占領す。

二百三十八　露西亞の中央亞細亞侵略

皇紀二千年の頃吉利吉思族は伊犂の西北、西爾河の東北一帶に據りしが、準噶爾部の强盛と共に次第に西方に逐はれ、二千三百年代の末期に至りて、露西亞の保護國となれり。尋で露西亞は中央亞細亞の侵略に從ひ、浩罕、基華、二汗が布哈拉汗と相戰ふに際し、益兵を東に進め、皇紀二千五百三十五年(1875 A.D.)までには布哈拉基華を保護國とし、浩罕を滅して其版圖に加へたり。

二百三十九　伊犂條約

露國は伊犂の回敎徒の叛亂に乘じて之を伐ちて其地を占領し、後清廷より其還附を求めしも應せざりしが、明治十四年(1881 A.D.)和成り、コルゴス河(伊犂河の上流)を以て國境とし、清國は九百萬留(千萬圓)の償金を拂へり。之を伊犂條約といふ。此條約は尼布楚條約と共に清國外交上の成功なり。

二百四十　中央亞細亞に於ける英露の爭衡

西曆十八世紀の末、今の波斯王家の祖アガ・ムハメッド Aga Muhammed 波斯を統一せしが、程なく露國の侵略を被り、終に裏海の西岸一帶の地を露國に讓與せり。

この波斯侵略といひ、かの中央亞細亞の蠶食といひ、孰れも英領印度を危うするものなるが故に英國乃ち自衛の策として先づ波斯を引入れんとしたりしが成らず、因て阿富汗斯坦を保護するの外なかりき。然るに露國は波斯を挑發してヘラットを襲はしめしかば、印度總督アウクランド Auckland は阿富汗王ドスト・ムハメッド Dost Muhammed を諭して波斯の入寇を止めしめんとしたれど、ムハメッド應せず、反つて露國に通せり、英人大に怒りてその國を攻むること二回、而も意の如くならず、而して露國の中亞侵略は著々功を奏し、英人益恐怖の念を抱けり。然るに我明治十三年アブトルラーマン Abdur-Rahman 英人の爲めに擁立せられて阿富汗王となり、英國の保護を乞ひ、大に西洋文明を移植せり。是より阿富汗斯坦は印度の藩屏たり。

明治十七年露國はメルヴを取り、二十年には英國と協議し、露領と阿富汗斯坦との境界を確定し、二十八年(1895 A.D.)に至りてパミールに關する兩國の紛議も亦落著せり。

二百四十一、佛國の後印度經略と清英との交渉

西暦十九世紀の初、佛國は後印度經略に著手し、我文久二年(1862 A.D.)越南(安南)の柴棍(サイゴン)を陷れて交趾支那の南部を割かしめ、尋て眞臘(カンボヂヤ)を保護國とし終に明治十八年(1885 A.D.)東京を佛領とし、翌年越南をも保護國とせり。是より先き此條約締結の際清國は之に異議を唱へしかば、清佛戰を開き其結果清國は以上の事實を承諾せり。後八年を經て(明治二十六年)佛國は暹羅に迫りて湄公(メイコン)河以東の地を略せしが、これが爲めに英佛二國間に葛藤起り、翌年湄公河の上流地に中立地を置きて始めて落着せり。

二百四十二、注意すべき事項

(イ)史可法。史可法は明の遺臣にして、明亡ぶるの後、明の宗族福王を擁して、南京に據りしが、遂に清軍のために破られ、志を得ず。(百五十四頁ヲ見ヨ)

(ロ)鄭成功。鄭成功もとの名は森、海賊鄭芝龍の子にして、母は我平戸の人なり、明滅びし後、厦門に據り久しく清に抗し、終に敗れ後和蘭人を逐うて臺灣に入り再擧を圖りしが程なく志を得ずして歿す。鄭森、明の宗族唐王より國姓と名とを賜はり朱成功といへり、故に俗に國姓爺ともいふ。(百五十五頁ヲ見ヨ)

(ハ)アダム、シャール Adam Schaal (湯若望)。ヴェズウィット派の宣教師にして清の世祖(順治帝)の信任を受け、天文暦數に通ずるを以て、清の欽天監となれり。

(ニ)マドラス。皇紀二千二百九十九年(1639)英國が東洋貿易の根據とせる處にして、印度の東海岸にある港なり。

(ホ)ヘスチングス。英人ヘスチングスはクライヴの後を承けて、印度の知事となり、ついで第一回の總督に任じ、幾多同胞の猜疑中傷を顧みず、敢て諸

殼の改革を斷行し、印度の諸王を威服して益、英國の勢力を增進せり。二千四百四十五年(1785 A.D.)職を辭して歸國するや、英國の名士バーク等のために國會に彈劾せられしが、終に斃さる。

(ヘ)陳化成。陳化成は清の宣宗の時の驍將にして、阿片戰爭起るや吳淞(ウースン)に據りて英軍を拒ぎ、大に敵兵を恐れしめしが、遂に城陷りて其の身は陣歿せり。

(ト)僕鼎査(ボッチンジャー)。ボッチンジャーは支那の大使伊里布、耆英と共に阿片戰爭の局を結べる南京條約に調印したる英國の全權公使なり。

(チ)曾國藩。長髮賊の勢猖獗なるや、文宗詔を下して勤王の兵を募りしに、湖南の曾國藩先づ之に應じ湘勇を發して賊を伐ち、湖南を復し、武昌を取る。然れども賊勢猶盛なりしかば、米人ワルド。次て英人ゴルドンの加勢によりて漸く之を挫きし後、曾國藩は諸道の官軍を合せ大擧して南京を圍み、遂に之を陷れ長髮賊を平定せり。其後露西亞と伊犁條約を結びたる時曾

國藩の子曾紀澤之に調印せり。

(リ)ゴルドン Gordon(英)。英人にして、長髮賊の亂にワルドの後を承けて洋槍隊を統帥し、大に賊の鋭鋒を挫き、曾國藩等をして能く南京に入らしめたり。その率ゆる所の隊を稱して常勝軍といへり。亂平ぐの後清廷此偉功に酬ゆるに巨萬の金を以てせしかど皆辭して受けざりき。その廉潔想ふべきなり。

(ヌ)愛琿條約。ムラヴィーフのために迫られて、清國は使節を愛琿(アイグン)に送り、之と會して兩國々界其他に就き結べる條約なり。(百六十七頁ヲ見ヨ)

(ル)クルーベイ。佛國は越南王と和約をなし清國之に對して異議を唱ふるを顧みずして諒山を占領せんとするや、清國の守兵之を逆擊し、二國の和好遂に破る。此時クルーベイは佛國艦隊に將として福州沿岸に支那の福建艦隊を全滅し、澎湖島を占領し、且臺灣の諸港を封鎖せり。幾くもなくしてクルーベイ死し、佛國の輿論も平和の回復を希ひしかば、兩國の和成る。(明治十

八年(1885 A.D.)（百七十頁參看）、

(チ)臺灣の沿革。明の中世(二千二百年代の初頃)倭寇の明軍に擊破せられてより、臺灣を占領して猶は支那の東南沿岸を剽掠せしが、和闌人の支那近海に貿易を營むに及んで寛永二年(1624 A.D.)遂に我國人を逐うて之を奪ひ學校を設け寺院を建て文化の輸入を力めたり、皇紀二千三百廿一年(寛文元年 1661 A.D.)鄭成功等魯王を奉じて臺灣に來り、悉く島内の和闌人を逐ひ、明の回復を計りしが其孫鄭克塽の時清の聖祖に降り(二千三百四十三年)爾來臺灣は清領となりしを、日清戰爭の結果明治廿八年我が國の版圖に入る。

(リ)ビニヨー。今より凡百年前安南に在住せる佛國宣教師なり、當時安南内亂あり、ビニヨー乃ちもとの王族阮福映(後の嘉隆帝)に說き地を割き通商を許すを約して、佛國王ルイ十六世の援助を求めしめ、遂に阮文惠の子孫を滅ぼして安南に越南國を建てしめたり。佛國の安南經略是より見るべし。

第二十　最近の日清韓

二百四十三　日本の臺灣征伐

琉球所屬の確定

(ヌ)琉球は皇紀二千年代の中頃より支那及我國に臣屬せしが島津家久征服以來我屬地たり。然るに明治五年(皇紀二千五百三十二年)尚泰を封じてその藩王とするに及んで清國頗る之を含む。時に琉球の漁民臺灣に漂着して其の生蕃の爲に殺さるゝこと屢なりしかば、明治七年我國終に西鄉從道をして之を伐たしむ、清國異議を唱ふ。乃ち大久保利通、天津に至りて談判の末、償金五十萬兩を得て兵を止む。これにより、て、琉球は、我版圖たることを確定し、藩を廢して沖繩縣を置きしに、清廷又異議を唱へ兩國漸く不和の度を加へたり。

二百四十五　大院君の鎖國主義

我文久三年(1863 A.D.)李熙(キ)朝鮮王となる。年幼にして實父大院君(李昰應(ソン))政を攝し、

耶蘇教を嚴禁す佛國の示威は其功なく、其後米國軍艦を率ゐて開國を迫りしかど、之れ亦功を奏うせざりしかば、大院君益鎖國主義を執りて我國の修交の要求をも斥けたり。(明治八年)

二百四十六　我國朝鮮の獨立を承認す

翌九年韓廷は我修交の要求を拒みしのみならず、我軍艦を江華島に砲撃せしかば、我國は黒田清隆、井上馨等を遣して、往て其罪を詰らしめ、更に通商條約を結びて釜山の外元山、仁川二港を開放することを定め、且つ朝鮮の獨立を認めたり。蓋し是れより先き佛米二國の朝鮮と交渉するや、清廷は朝鮮の獨立國にして外交は清の關知せざる所なりと明答したるを以てなり。

二百四十七　朝鮮に於ける事大獨立二黨の軋轢

朝鮮國王既に長じて政を親らするに及んで、王后閔氏の權益重かりしかば、明治十五年大院君不平の餘、京城の兵を誘うて閔族を伐ち且つ我公使館を燒きしが、亂平ぎて後、議論二派に分れ、一は閔族之を率ゐ、專ら清廷に賴るより之を事大黨といひ、他は獨立黨と稱し我國に賴りて獨立を完うせんとするものにて、朴泳孝金玉均等之が領袖となり、兩派の軋轢益甚し。

二百四十八　甲申の亂　天津條約

明治十七年、獨立黨刺客を放つて反對黨を襲ひ國王を擁して我公使に賴りしに、清兵は反て事大黨を助けて獨立黨を破り、且つ又我公使館を燒きしかば、我公使は國に歸り、朴泳孝等逃れて我國に投ず、之を甲申の亂といふ。是に於て我國は朝鮮を責めて償金十三萬圓を出さしめ、翌年(光緒十年)伊藤博文を清國に派し、李鴻章と天津に會して左の條約を結ぶ、之を明治十八年の天津條約といふ。

(一)兩國の撤兵(二)爾後兵を朝鮮に出すの要ある時は兩國互に通知すること